

内野宿御茶屋跡

福岡県飯塚市内野所在遺跡の調査

飯塚市文化財調査報告書 第57集

2022

飯塚市教育委員会



「筑前穂波郡内野村高石故城之図」(『古戦古城之図』国立公文書館蔵)



内野宿御茶屋跡調査区全景（各調査区合成） ※第6次調査を除く

序

福岡県の中央部、筑豊地域の中心都市である飯塚市は豊かな水と緑に囲まれ、古来より生活環境に恵まれてきました。こうした環境のもと、立岩遺跡に代表されるように市内には先人たちの残した貴重な足跡である文化財が数多く存在しています。

その中で重要とされる遺跡について、飯塚市教育委員会では範囲内容確認調査を実施し、その内容把握をおこない、今後の保存・活用に際しての基礎資料の収集に努めています。

本書は平成21～30年度に範囲内容確認調査を実施した内野宿御茶屋跡の調査報告です。鎖国下の江戸時代において、海外との窓口であった長崎を介して入ってくる学問や技術・文化・情報は、長崎街道を通過して九州諸藩や江戸に伝えられました。この長崎街道の開設に伴い、慶長17年（1612）に冷水峠の麓に置かれた宿場町が内野宿です。近代以降、長崎街道の多くの宿場町がその歴史的景観の変容を余儀なくされましたが、内野宿は往時の宿場町の面影を感じさせてくれる所です。この内野宿の核となる福岡藩主の別館である内野宿御茶屋は、参勤交代の際などに長崎街道を利用する九州諸藩の藩主等から休泊所として利用された施設でもあり、近世の交通史や福岡藩における御茶屋のあり方と構造を知る上で重要なものであります。発掘調査により、その範囲や構造・成立時期・建物遺構が明らかになり、大変貴重な成果をあげることができました。本書が当地域を特色づける歴史研究や教育、文化財保護思想の理解と普及に多少なりとも貢献できれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査・報告書の作成にあたり、多大なご協力をいただきました方々に厚く感謝いたします。

令和4年3月31日

飯塚市教育委員会
教育長 武井 政一

例 言

1. 本書は、平成21～30年度に範囲内容確認調査を実施した、福岡県飯塚市内野所在の内野宿御茶屋跡の発掘調査報告書である。
2. 調査及び報告書作成は、国及び福岡県の補助を受け、飯塚市教育委員会文化課が実施した。
3. 本書使用の遺構実測図は、櫛山範一・八木健一郎・大庭淑佳・久保田あかね・前川陽子が作成した。本書使用の遺物実測図は、櫛山・大庭・藤木聡が作成した。製図は、大庭がおこなった。
4. 本書使用の遺構及び遺物写真は櫛山が撮影した。航空写真・デジタル合成については有限会社空中写真企画に委託した。植物珪酸体分析・花粉分析は株式会社古環境研究所、種実同定・樹種同定・放射性炭素年代測定は株式会社古環境研究センターに委託した。
5. 本書使用の方位は座標北である。
6. 遺構の略号として用いたものは、SB（掘立柱建物跡）、SA（柱穴列）、SX（不明土坑など）、SD（溝・流路跡）、SE（井戸跡）、UK（埋甕）である。遺構番号は各次調査毎に通し番号を付していたため、本報告書では「調査回数－遺構略称・遺構番号」として記載している。
7. 出土陶磁器の時期・産地については鈴木由紀夫氏（佐賀県立九州陶磁文化館）、佐藤浩司氏（当時：北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室）にご指導をいただき、櫛山が分類した。また、すべての出土遺物についてご指導をいただいた訳ではないので、事実誤認等があればすべて櫛山の責にある。
8. 火打石については、藤木聡氏（宮崎県埋蔵文化財センター調査課）に鑑定・実測までご指導・ご協力をいただいた。
9. 「筑前穂波郡内野村高石故城之図」（大倉喜太郎献納本『古戦古城之図』国立公文書館蔵）の写真は、朝倉市教育委員会所有のネガフィルムについて借用・掲載許可を頂き掲載した。
10. 本書の執筆・編集はV-1・2を古環境研究所、V-3～5を古環境研究センター、VI「火打石等について」を藤木聡、それ以外をすべて櫛山が担当し、編集は櫛山がおこなった。
11. 本書に関わる図面、写真、遺物などの資料は、飯塚市教育委員会で保管している。

本文目次

I. はじめに	1
1. 調査の経緯	1
2. 調査組織	2
II. 地理的・歴史的環境	3
1. 地理的環境	3
2. 歴史的環境	3
III. 内野宿御茶屋跡の概観	7
1. 長崎街道と内野宿	7
2. 内野宿御茶屋跡について	10
IV. 調査の記録	13
1. 調査の概要	13
2. 検出遺構について	25
3. 出土遺物について	33
V. 自然科学分析	67
1. 内野宿御茶屋跡における植物珪酸体分析	67
2. 内野宿御茶屋跡における花粉分析	70
3. 内野宿御茶屋跡における種実同定	73
4. 内野宿御茶屋跡における樹種同定	73
5. 内野宿御茶屋跡における放射性炭素年代測定	76
VI. 総括	79

図版目次

巻頭図版 1 「筑前穂波郡内野村高石故城之図」(『古戦古城之図』国立公文書館蔵)

巻頭図版 2 内野宿御茶屋跡調査区全景(合成)

- | | | |
|-------|---|-----------------------|
| 図版 1 | 1. 内野宿遠景(東上空から) | 2. 内野宿御茶屋跡現況(東上空から) |
| 図版 2 | 1. 第1次調査全景(北上空から) | 2. 第2次調査全景(東上空から) |
| 図版 3 | 1. 第3次調査全景(北上空から) | 2. 第4次調査全景(東上空から) |
| 図版 4 | 1. 第5次調査全景(西上空から) | 2. 第7次調査全景(西上空から) |
| 図版 5 | 1. 第8次調査全景(西上空から) | 2. 第9次調査全景(西上空から) |
| 図版 6 | 1. 1-SB001(南から)
3. 1-UK002(北東から) | 2. 1-UK001(東から) |
| 図版 7 | 1. 2-SX008(東から)
3. 2-SX002(北東から) | 2. 2-SX018(北東から) |
| 図版 8 | 1. 2-SX001(西から)
3. 3-SD001土層(西から) | 2. 3-SD001(東から) |
| 図版 9 | 1. 第5次調査3-SD001土層(北西から)
3. 第6次調査6-tr4(東から) | 2. 第6次調査6-tr4(南から) |
| 図版 10 | 1. 7-SB001(北東から)
3. 7-SX001(東から) | 2. 7-SX001・SX002(北から) |
| 図版 11 | 1. 7-SX003(南東から)
3. 第7次調査1トレンチ(北西から) | 2. 7-SX005(北西から) |
| 図版 12 | 1. 第7次調査2トレンチ(北西から)
3. 9-SB001(北西から) | 2. 第7次調査3トレンチ(北西から) |
| 図版 13 | 1. 9-SE001(北から)
3. 第9次調査2トレンチ土層(北東から) | 2. 第9次調査1トレンチ土層(南東から) |
| 図版 14 | 出土遺物 1 | |
| 図版 15 | 出土遺物 2 | |
| 図版 16 | 出土遺物 3 | |
| 図版 17 | 出土遺物 4 | |
| 図版 18 | 出土遺物 5 | |
| 図版 19 | 出土遺物 6 | |
| 図版 20 | 出土遺物 7 | |
| 図版 21 | 出土遺物 8 | |
| 図版 22 | 出土遺物 9 | |

挿図目次

第 1 図	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	4
第 2 図	周辺地形図 (1/4,000)	6
第 3 図	北部九州の近世主要街道	7
第 4 図	内野宿御茶屋絵図読取図 (1/500)	9
第 5 図	「筑前穂波郡内野村高石故城之図」にみえる内野宿	10
第 6 図	御茶屋跡発掘調査区位置図 (1/800)	11
第 7 図	内野宿御茶屋跡遺構配置図 (1/500)	折込
第 8 図	第 1 次調査 2・3 区遺構配置図 (1/200)	13
第 9 図	第 2・3 次調査区遺構配置図 (1/200)	15
第 10 図	第 4・5 次調査区遺構配置図 (1/200)	16
第 11 図	第 4 次調査区西壁土層図 (1/80)	16
第 12 図	第 6 次調査区平面図・土層図 (1/40)	17
第 13 図	第 7 次調査区遺構配置図 (1/200)	19
第 14 図	第 7 次調査区土層図 (1/80)	20
第 15 図	第 8 次調査区平面図・土層図 (1/100)	21
第 16 図	第 9 次調査区遺構配置図 (1/100)	23
第 17 図	第 9 次調査区土層図 (1/40)	24
第 18 図	番所跡 1-SB001 実測図 (1/60)	25
第 19 図	主屋跡 9-SB001 礎石跡東西断面図 (1/80)	26
第 20 図	道具蔵跡 2-SX008 実測図 (1/60)	27
第 21 図	石積遺構 2-SX018 実測図 (1/40)	27
第 22 図	石積遺構 7-SX001～SX003 実測図 (1/60)	28
第 23 図	敷石遺構 7-SX005 実測図 (1/40)	29
第 24 図	池跡 2-SX002・流路跡 3-SD001 土層図 (1/80)	30
第 25 図	井戸状遺構 9-SE001 実測図 (1/40)	31
第 26 図	埋甕 1-UK001・UK002 実測図 (1/20)	32
第 27 図	土坑 2-SX001 実測図 (1/40)	32
第 28 図	第 1 次調査出土土器・陶磁器実測図 (1～4:1/3、他:1/6)	33
第 29 図	池跡 2-SX002 上層出土土器・陶磁器実測図 1 (1/3)	34
第 30 図	池跡 2-SX002 上層出土土器・陶磁器実測図 2 (1/3)	35
第 31 図	池跡 2-SX002 上層出土土器・陶磁器実測図 3 (1/3)	36
第 32 図	池跡 2-SX002 上層出土土器・陶磁器実測図 4 (82:1/4、他:1/3)	37
第 33 図	池跡 2-SX002 上層出土土器・陶磁器実測図 5 (96:1/6、他:1/3)	38
第 34 図	池跡 2-SX002 下層出土土器・陶磁器実測図 (1/3)	39
第 35 図	第 2 次調査土坑等出土土器・陶磁器実測図 1 (1/3)	39
第 36 図	第 2 次調査土坑等出土土器・陶磁器実測図 2 (1/3)	40
第 37 図	第 2 次調査その他の出土土器・陶磁器実測図 (1/3)	41
第 38 図	第 3 次調査出土土器・陶磁器実測図 1 (1/3)	42
第 39 図	第 3 次調査出土土器・陶磁器実測図 2 (1/3)	43
第 40 図	第 4・5 次調査出土土器・陶磁器実測図 1 (1/3)	44
第 41 図	第 4・5 次調査出土土器・陶磁器実測図 2 (1/3)	45
第 42 図	第 7 次調査出土土器・陶磁器実測図 1 (1/3)	46
第 43 図	第 7 次調査出土土器・陶磁器実測図 2 (1/3)	47
第 44 図	軒丸瓦実測図 (1/4)	49

第 45 図	軒平・軒棧瓦実測図 (1/4).....	50
第 46 図	丸瓦実測図 1 (1/4).....	51
第 47 図	丸瓦実測図 2 (1/4).....	52
第 48 図	平瓦実測図 (1/4).....	53
第 49 図	棧瓦実測図 (1/4).....	54
第 50 図	目板瓦実測図 (1/4).....	55
第 51 図	雁振瓦実測図 (1/4).....	56
第 52 図	文字瓦実測図 (1/4).....	57
第 53 図	金属製品実測図 (1/2).....	58
第 54 図	石製品・ガラス製品・土製品実測図 (7～9 : 2/3、16～20 : 1/3、他 : 1/2).....	59
第 55 図	御茶屋空間構成推定図.....	79

表 目 次

表 1	出土土器・陶磁器観察表 1.....	60
表 2	出土土器・陶磁器観察表 2.....	61
表 3	出土土器・陶磁器観察表 3.....	62
表 4	出土土器・陶磁器観察表 4.....	63
表 5	出土土器・陶磁器観察表 5.....	64
表 6	出土土器・陶磁器観察表 6.....	65
表 7	出土土器・陶磁器観察表 7.....	66

写真目次

写真 1	冷水越の石畳.....	8
写真 2	内野の夫婦銀杏 (昭和 3 年頃).....	12
写真 3	福岡県指定天然記念物 内野の大イチョウ (現在).....	12
写真 4	山内家庄屋敷跡表採鬼瓦.....	81

I. はじめに

1. 調査の経緯

冷水峠の麓である飯塚市内野に所在する内野宿は長崎街道の宿場のひとつで、その町建ては『筑前国続風土記』によると慶長17年(1612)とされる。旧筑前国領内には長崎街道の宿場として内野の他に黒崎(北九州市)・木屋瀬(北九州市)・飯塚(飯塚市)・山家(筑紫野市)・原田(筑紫野市)があり、そのため福岡藩ではこの六つの宿場を通る道筋を「六宿筋」とも呼称していた。これらの宿場の多くが明治以降の宿駅制の廃止、鉄道の開設、近代工場の立地、戦後の高度成長に伴う開発、自動車の普及による交通網の整備などの影響を受け、その歴史的景観の変容を余儀なくされたが、内野宿は六宿の中でも往時の宿場町の面影を良く残していると言える。

内野宿御茶屋跡は、宿場内を南北に走る長崎街道と宿場の中央で直行し西側に延びる道を上った正面に位置している。内野宿御茶屋については明治期に廃止されると、その建物についても解体され、現在ではその敷地の殆どが田畑となっている。しかしながら、内野宿御茶屋については文化8年(1811)に詳細に描かれた『内野御茶屋絵図』が残っており、現在では見ることの出来ない御茶屋の全体像を知り得ることが出来る。平成10年度には内野地区において圃場整備事業が計画され、御茶屋跡の敷地についてもその対象地として含まれることになった。筑穂町教育委員会(現、飯塚市教育委員会)としては、その遺跡の重要性から現状保存が望ましいとして御茶屋跡の敷地については圃場整備の計画から外すことを町産業課(現、飯塚市)に要望した。その後、協議を繰り返し、町産業課と内野地区の地元の方々の同意を得ることができ、平成11年度に御茶屋跡の敷地については圃場整備事業計画の対象から外し、現状保存を図れることが出来た。

平成18年3月26日に筑穂町を含む1市4町が合併し飯塚市となるが、その中で飯塚市を代表する重要遺跡である内野宿御茶屋跡については将来的な保存を図る上でも、その範囲と内容を確認しておく必要があると判断され、平成21年度から御茶屋跡の範囲内容確認調査を国及び県の補助を受け、飯塚市教育委員会(文化財保護課)が実施することとなった。調査前の平成21年4月26日には内野地区の方々を対象として御茶屋跡発掘調査の事前説明を行ない、調査の目的と内容についてのご理解とご協力をお願いした。

平成21年度は御茶屋跡北側の範囲の確認(第1次調査)、平成22・23年度は御茶屋跡南西部の範囲と内容の確認(第2次調査)、平成23年度は御茶屋跡南西側の範囲の確認(第3次調査)、平成24年度は御茶屋跡南側中央部の範囲と内容の確認(第4次調査)、平成25年度は御茶屋跡南側施設の追加調査(第5次調査)、平成26年度に調査が長期間にわたることが想定されたため第1～5次調査の成果をまとめた概要調査報告書の作成、平成27年度は御茶屋跡北側に面して東西方向にはしる道路の確認(第6次調査)、平成28年度は表御門・银杏ノ木跡・主屋(御式台部分)の確認(第7次調査)、平成29年度は主屋北側と囲繞施設の確認(第8次調査)、平成30年度は主屋中央部の確認(第9次調査)を目的として実施した。平成21～30年度の9次にわたる調査により、御茶屋跡の範囲・内容について多くのことが明らかになった。なお、第1次調査中の平成21年8月6日には地元の飯塚市立内野小学校6年生(7名)が社会科見学として調査現場の見学会を行い、さ

らに同月には記者発表を行ない、現地説明会(見学者67名)を開催した。第2次調査では平成23年5月に記者発表を行ない、現地説明会(見学者54名)を開催した。最後の調査となった第9次調査では、これまでの調査成果も含めて平成30年3月に記者発表を行ない、現地説明会(見学者65名)を開催した。

2. 調査組織

平成21年度～令和3年度の発掘調査関係者及び整理・報告に係る関係者は下記のとおりである。

○ 飯塚市教育委員会

生涯学習部	文化財保護課	(平成21～24年度)	
教育部	文化財保護課	(平成25～26年度)	
教育部	文化課	(平成27年度～)	
教育長	森本 精造	(平成21・22年度)	片峯 誠 (平成22～27年度)
	西 大輔	(平成29～令和元年度)	武井 政一 (令和2年度～)
教育長職務代理者	上田 敬子	(平成28年度)	
生涯学習部長	田子森 裕一	(平成21・22年度)	伊藤 博仁 (平成23・24年度)
教育部長	瓜生 守	(平成25～28年度)	久原 美保 (平成29～令和元年度)
	二石 記人	(令和2年度～)	
文化財保護課長	嶋田 光一	(平成21～26年度)	
〃 課長補佐	毛利 哲久	(平成26年度)	
〃 係長	毛利 哲久	(平成21～25年度)	
文化課長	久保山 博文	(平成27～30年度)	坂口 信治 (平成31年度～)
文化財保護推進室長	毛利 哲久	(平成27～令和2年度)	高橋 宏輔 (令和3年度～)
調査担当	櫛山 範一	(平成21～30年度)	
整理報告担当	櫛山 範一	(平成31～令和3年度)	

調査にあたっては、土地所有者の方々や内野地区の住民の方々の御協力と御理解を得ることができた。出土遺物について、陶器については佐藤浩司氏(元北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室)、磁器については鈴田由紀夫氏(佐賀県立九州陶磁文化館)より貴重なご教示をいただいた。

『内野御茶屋絵図』等に記載のある古文書の解読については、仲村慎太郎氏(飯塚市歴史資料館)よりご協力・ご教示をいただいた。また、以下の方々には調査・報告書作成において、殊に有益なご助言・ご教示、写真等の資料の提供などのご協力をいただいた。記して感謝いたします。

〔福岡県教育庁総務部文化財保護課〕 田上稔・吉田東明(調査当時)・宮地聡一郎・大庭孝夫、〔九州歴史資料館〕 西谷正(調査当時)・杉原敏之(調査当時)・岡寺良(調査当時)・酒井芳司・一瀬智(調査当時)、〔筑紫野市教育委員会〕 山村淳彦・森山栄一、〔朝倉市教育委員会〕 乙藤慎、〔九州大学学生〕 森大樹、〔内野地区〕 杉山一枝・大庭順一・安田家久(故人)・多田篤弘・大町秀一・宗像松童・羽野博臣(順不同、敬称略)

Ⅱ．地理的・歴史的環境

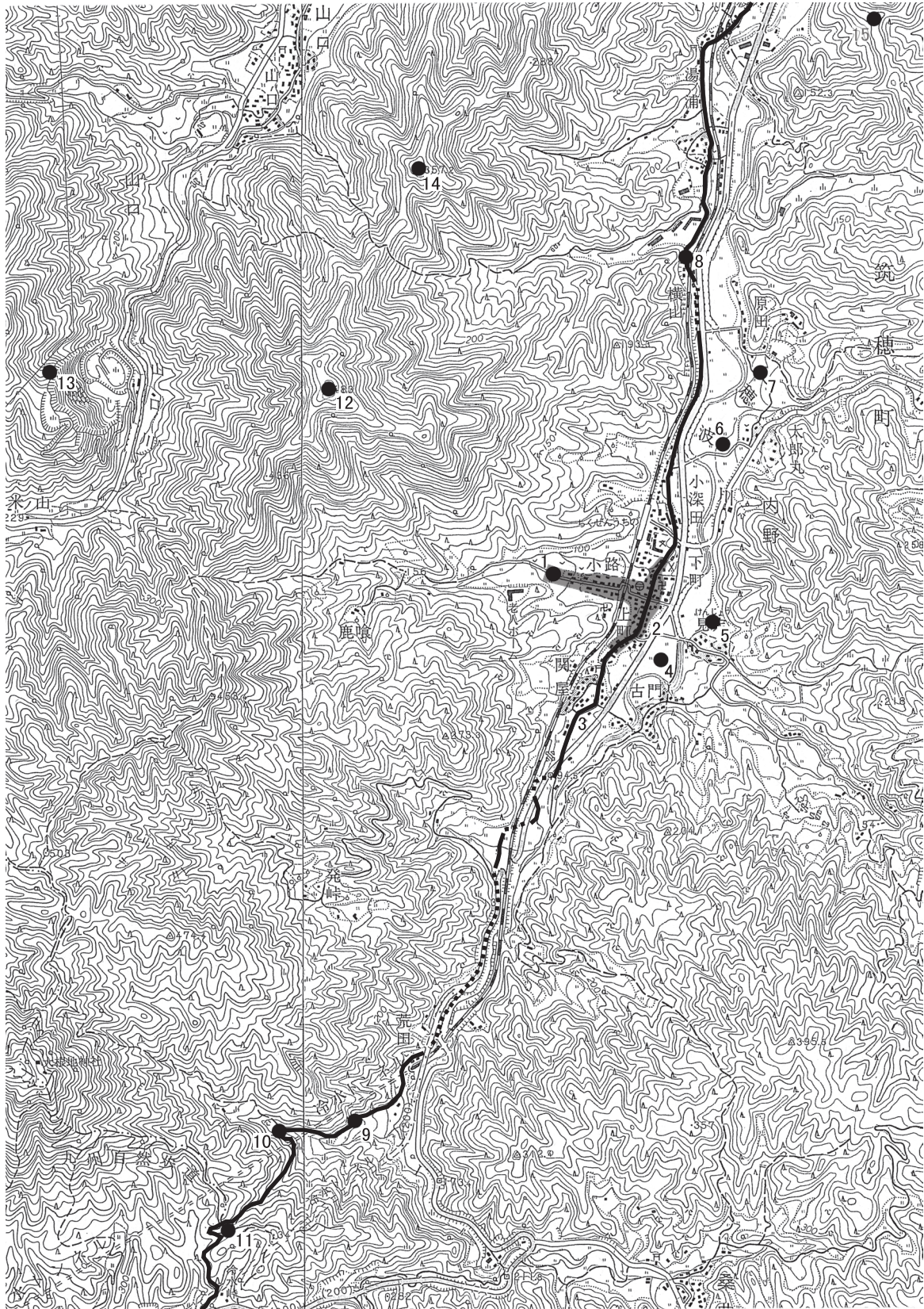
1．地理的環境

平成 18 年 3 月 26 日に飯塚市、嘉穂郡穂波町・筑穂町・庄内町・穎田町の 1 市 4 町が合併して誕生した新「飯塚市」は、人口約 13 万 1 千人、面積約 214km²を誇る筑豊地方最大の都市で、地理的には福岡県のほぼ中心に位置している。飯塚市が位置している嘉穂盆地は、西を三郡山地、南を古処山地、東を金国・戸谷ヶ岳山地に囲まれており、盆地内には古処山地に水源を発する嘉麻川と三郡山地に水源を発する穂波川が合流し、遠賀川となって北流している。本地域の地質は、古生代の呼野層群・三郡変成岩、中生代の花崗岩類が中央部や東西の丘陵地帯の基盤となる。これらのうち、呼野層群は北九州市門司区の企救半島から三郡山地にかけて分布し、市城北西の笠置山周辺部にも見られる。大きく上層・中層・下層に分かれ、上層は平尾台石灰岩、中層には輝緑凝灰岩や砂岩、チャート、粘板岩が、下層には凝灰岩質粘板岩、緑色凝灰岩質粘板岩がある。いわゆる立岩産石包丁は、この呼野層群中の輝緑凝灰岩を石材として使用している。新生代の古第三紀には夾炭層である直方層群が盆地中央部に堆積するが、この分布域が近代に国内石炭生産の半数を産出した筑豊炭田である。今回報告する内野宿御茶屋跡は、穂波川の上流域で嘉穂盆地の最南部に位置する内野地区に所在する。内野地区の地形は北流する穂波川を中心に、その支流である松浦川、北川などにより形成された小谷底平野が集まった南北に長い谷底平野である。この谷底平野は東・西・南の三方を標高約 300～480m 級の高山に囲まれ、北側にあたる横山付近でも谷底平野をくぐるかの様に東西から低山地が迫っているため、この谷底平野は小盆地状を呈している。内野宿は穂波川の左岸にあたる谷底平野のやや微高地（標高約 80m）を中心に立地しているが、御茶屋跡はその西側で松浦川により形成された谷底平野の奥部で宿場を見下ろせる小高い地点（標高約 100m）に所在している。

2．歴史的環境

ここでは、内野宿御茶屋跡が位置する嘉穂盆地南部を中心として歴史的環境を概観する。

旧石器時代に関する明確な遺跡の存在は明らかにされていないが、縄文時代早期前半には穂波川の支流である山口川流域の沖積台地上に所在するヒイ田遺跡から刺突文土器や撚糸文土器が出土していることから、嘉穂盆地における人々の生活の始まりを知ることができる。後晩期になるとこれより下流に位置する木下遺跡から竪穴住居跡が検出されており、人々の定住化が進んでいったことが分かる。弥生時代になると嘉穂盆地内では遺跡数が著しく増加するが、嘉穂盆地南部においては山口川流域でその傾向が顕著に見受けられる。殊に陣ノ内遺跡と前遺跡については嘉穂盆地において大型甕棺採用の初見例の一つとして注目される。古墳時代になると、嘉穂盆地内には三角縁波文帯三神三獣鏡が出土した忠隈古墳などが築造され、当地においても首長層の形成が着実に進んでいったことが知れる。筑紫君磐井の乱後である『日本書紀』安閑天皇 2 年（535）条には「筑紫穂波屯倉」設置の記載があり、穂波屯倉についてはこの穂波郡の地に比定されている。ほぼ同時期に、前方後円墳である王塚古墳（桂川町）が築造されている。王塚古墳は装飾古墳として全国的に著名で



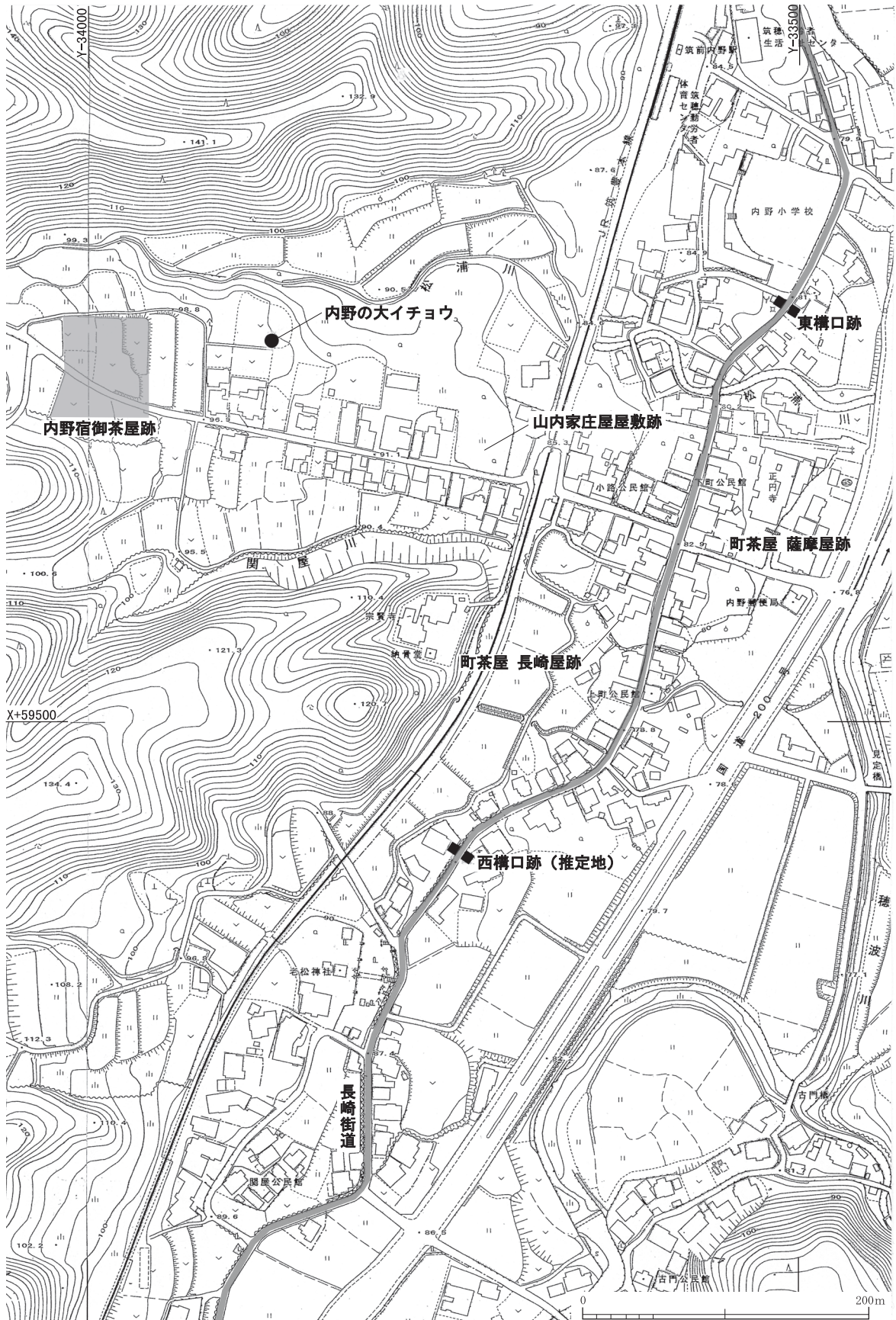
1. 内野宿御茶屋跡 2. 内野宿 3. 長崎街道 4. 宮田遺跡 5. 板田遺跡 6. 土取遺跡 7. 向田遺跡
 8. 横山遺跡 9. 長崎街道冷水越(冷水峠石畳) 10. 首無し地藏 11. 郡境石 12. 高石山城跡
 13. 米ノ山城跡 14. 茶臼山城跡 15. 扇山城跡

第1図 周辺遺跡分布図(1/25,000)

あるが、この古墳の周辺には平塚のホーケントウ古墳、北古賀の北古賀古墳など7基の前方後円墳が所在しており、嘉穂盆地南部を経済基盤とした首長層の奥津城であったと推定される。古代には王塚古墳の西約2.5kmに新羅系の整備な軒瓦を出土することで著名な大分廃寺が創建される。発掘調査によって、創建時期については7世紀後半から末頃で、伽藍配置については法起寺式あるいは観世音寺式と想定されるに至っている。

室町時代になると中国地方から大内氏が北九州への勢力拡大を開始し、筑前国においてもその支配体制を整えていく。文明12年(1480)には、連歌師である飯尾宗祇が大内氏家臣杉弘相の知行地である長尾(飯塚市)の館で百韻連歌を興行したことが紀行文『筑紫道記』に記されており、当地方についても大内氏の勢力下にあったことが分かる。大内義隆の代に筑前国において確固たる支配体制を築いたが、天文20年(1551)に義隆が重臣陶隆房(晴賢)に攻められ自害したのをきっかけに、大内氏の勢力は急速に衰退していく。この隙をついて、大友氏が筑前・豊前へと侵入し、永禄2年(1559)には筑前・豊前の守護を兼ね、九州探題職を手に入れ、貿易都市博多を完全に掌中に収める。また、同時に毛利氏も北九州への進出の機会を狙っており、筑前国の豪族である秋月氏、筑紫氏等を調略により反大友方とし、大友氏に対し圧力をかけていくことになる。そのため筑前国は大友氏と毛利・秋月氏の領有を巡る戦乱の地となる。その後、大友氏は筑前支配の強化のため、元亀元年(1570)に宝満城・岩屋城主として高橋鎮種(紹運)を、元亀2年(1571)に立花城主として戸次鑑連(立花道雪)を配置する。これにより、一時的に筑前国は安定するが、天正6年(1578)に日向国耳川で大友氏が島津氏に大敗すると、筑前は再度動乱状態となる。その動乱の先鋒となった秋月氏は嘉穂地方などに勢力を拡張し、各地で大友方の戸次氏や高橋氏と合戦に及んでいる。嘉穂盆地においては秋月方の城と云われるものが多く所在し、内野地区にも高石山城が所在する。一方、耳川の戦いで大友氏に勝利した島津氏は北上を続け、龍造寺隆信を沖田畷の戦いで敗死させ、天正14年(1586)に、秋月氏と結んで大友方の高橋鎮種が守る岩屋城を攻め落城させる。この戦いで勝利を収めた島津氏であったが、自軍の被害も大きく立花城を攻略することが出来ず足止めされ、同時に九州平定を目指す豊臣秀吉の軍勢が筑前に攻め入ったため、筑前から撤兵することになる。その際、下関より渡海した秀吉は小倉に上陸して田川方面へ南下し、大隈(嘉麻市)から八丁峠を越えて秋月、久留米、薩摩へと向かっている。

天正15年(1587)、豊臣秀吉は秋月氏、島津氏を降伏させ、九州の平定を成し遂げる。筑前一国は小早川隆景に与えられ、慶長5年(1600)の関ヶ原の戦い後に小早川家の後を受けて黒田長政が豊前中津から筑前に入部する。その際、飯塚の太養院に宿泊して筑前名島城に入っている。慶長6年(1601)には那珂郡警固村福崎の地に福岡城の築城を始める。その築城の際に必要な用材を求め、黒田孝高(如水)が穂波郡内野・山口・馬敷の山林に来て馬敷村の西光寺に滞在したことが文献史料より知ることができる。慶長12年(1607)、黒田長政は国中の掟一三か条を定め、その制札を博多に立てている。その中に「伝馬送り夫」の一条がみえ、この内容から筑前領内においても幕府の命を受け伝馬制度の整備に努めていたことが分かる。このように交通連絡網が整えられていく中で長崎貿易の進展も重なって、長崎街道が統一的に整備されるのであろうが、内野宿については『筑前国統風土記』の「慶長十七年、長政公その家臣毛利但馬をして此地を見そなはしめ、初めて町を立せらる。」という記載によって、慶長17年(1612)に創設されたことが知れる。また、同時期に冷水越も開通したと考えられ、冷水峠には今でも往時を偲ばせる石畳の道が残っている。



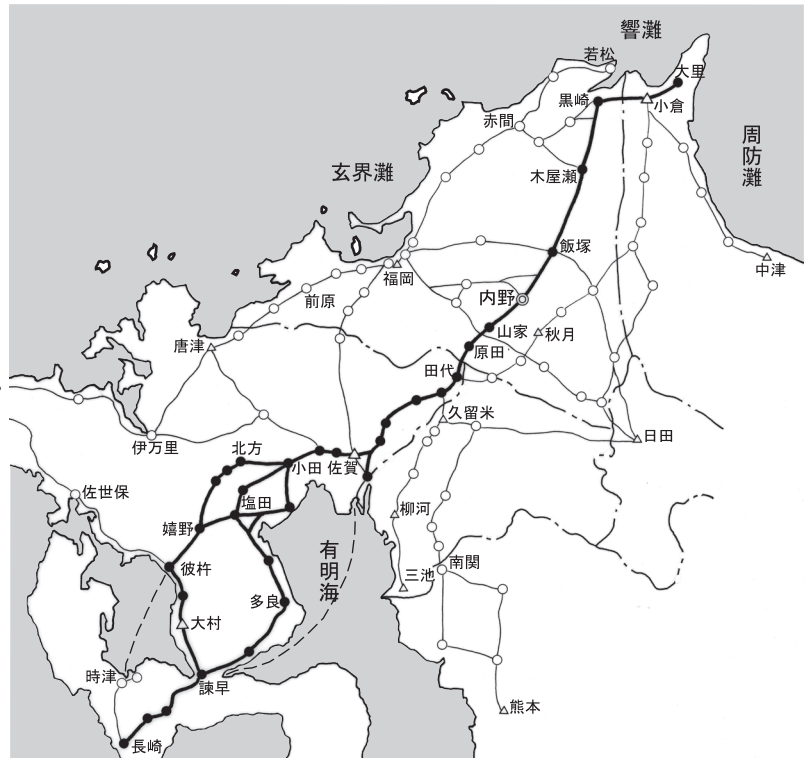
第2図 周辺地形図 (1/4,000)

Ⅲ. 内野宿御茶屋跡の概観

1. 長崎街道と内野宿

1) 長崎街道について

長崎街道とは、江戸時代において長崎から大里（小倉）までの約 58 里（約 230km）を結ぶ脇街道で九州第一の幹線である。慶安 2 年（1649）段階では、大里・小倉（小倉藩領）から、黒崎・木屋瀬・飯塚・内野・山家・原田（以上、福岡藩領）、田代（対馬藩領）、轟木・中原・神埼・境原・佐賀・加瀬・牛津・小田・塩田・浜・多良・湯江・諫早・永昌・矢上（以上、佐賀藩領）、日見・長崎（以上、天領）に至る経路である。その後、年代と共に経路の変更があり、天明 7 年（1787）では佐賀藩領である小田から多良・塩田・彼杵を経由して各々長崎へと向かう 3 つの経路があった。福岡藩領である筑前



第 3 図 北部九州の近世主要街道

国内には長崎街道の宿場として黒崎宿（旧遠賀郡）・木屋瀬宿（旧鞍手郡）・飯塚宿（旧穂波郡）・内野宿（旧穂波郡）・山家宿（旧御笠郡）・原田宿（旧御笠郡）の六つの宿場町が置かれ、この六つの宿場を通る道筋は「六宿筋」とも呼称されていた。

2) 長崎街道と内野宿の成立

長崎街道の成立については、それ以前の北部九州の交通路の存在が前提にあり、これらを踏まえて考えていかなければならない。中世においては古代官道のルートを継承した道と新たに各地の政治・経済・宗教等の拠点を結んだ道が出現する。そのような中世における道に、近世の長崎街道へと継承される道が文献史料により確認できる。文明 12 年（1480）、山口の大内氏に招かれた連歌師の飯尾宗祇が太宰府・博多を旅して紀行文『筑紫道記』を残している。その中で宗祇は下関から船で西に向かい若松の浦に上陸し、「こやの関」（木屋瀬）に宿泊したのち、翌日は長尾（飯塚市長尾）から米ノ山峠を越えて太宰府へと向かっている。中世後期の貴重な紀行文であるが、これにより木屋瀬から長尾までは遠賀川水系に沿った長崎街道と類似する道の存在が推察され、米ノ山峠越えとあるのは古代官道の田河道を継承したルートが中世においても存在していたことが分かる。また、肥前の基肄郡（三養基郡）から杵島郡にかけて佐賀平野を横断するルートも古代官道以来の道

筋を継承しつつも、中世における政治・経済の拠点の南下に伴い佐賀市中心部周辺のより平野部を通過するよう遷移している。元龜2年（1571）に大村純忠が長崎をポルトガル船に開港して以降は、貿易拠点としての重要性が高まると共に各地に分散的に存在していた道筋が長崎に繋がる形で形成されていったと考えられる。天正14年（1586）の豊臣秀吉による九州平定の際において、秀吉の本隊は小倉に上陸した後に田川へ南下し、大隈（嘉麻市）から八丁峠を越えて秋月（朝倉市）・久留米、そして薩摩へと向かっている。また、文禄の役（1592）で肥前名護屋城に赴いた際には、小倉から木屋瀬または芦屋（遠賀郡芦屋町）を経由して赤間を経由して博多に到っている。そのため、この段階では筑前領内において六宿筋は通じておらず、部分的に通じていたことが知れるのみである。また、これにより長崎街道が未成立であった近世初期において、豊前から筑肥、薩摩方面へと貫通するルートとしては秋月街道や唐津街道の前身としての太閤道を想定することができる。

江戸幕府が成立すると、筑前領内では福岡藩による宿駅制度の整備が進められる。特に貿易拠点である長崎へと繋がる道の整備は、幕府の意を体した福岡藩などにおいて推進されたと考えられる。その中で長崎への最短ルートとして計画されたのが、冷水越のルートであったのだろう。この冷水峠を挟む南北の麓に置かれたのが内野・山家の宿である。山家宿については同地に現存する恵比須像の銘文や『二日市庄屋覚書』から、黒田長政の重臣である桐山丹波の家臣志方彦太夫が実務を受け持ち、慶長16年（1611）に開かれたことが伝わる。一方、内野宿については、福岡藩の儒学者である貝原益軒を中心に元禄元年（1688）に編纂が開始され、宝永6年（1709）に完成した『筑前国続風土記』（以下、『続風土記』）の「内野村」の項において、「内野町むかしはなし。慶長一七年、長政公その家臣毛利但馬をして此地を見そなはしめ、初めて町を立せらる。是より飯塚へ三里七町、御笠郡山家へ二里廿一町、御笠郡へ越す所の冷水嶺迄一里十町あり」とあり、慶長17年（1612）に黒田長政の家臣である母里太兵衛が内野宿を開設したことが分かる。よって慶長16年（1611）に山家、翌17年（1612）に内野の宿場町が開かれ、それと時を同じくして冷水越も開削されたと考えられ、これを以って長崎街道の成立に至ったと考えられる。



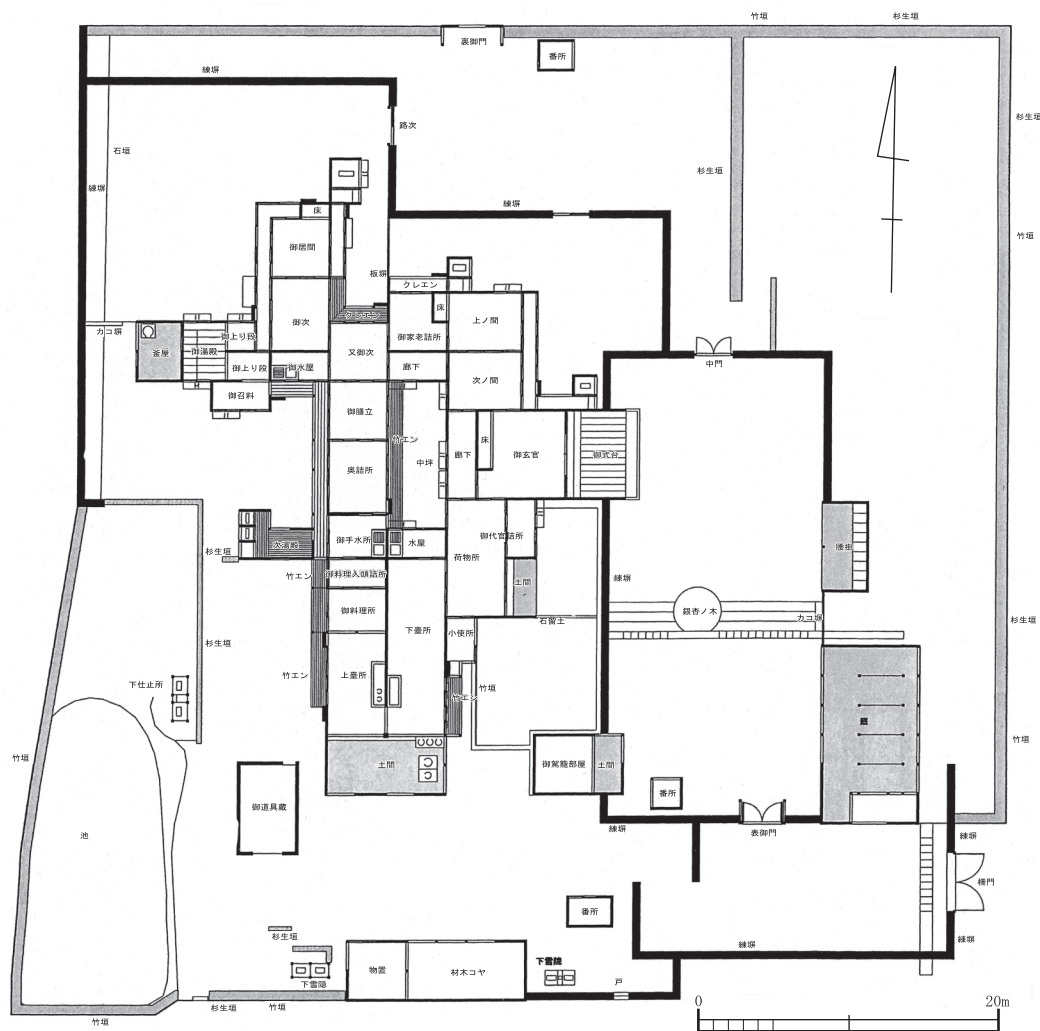
写真1 冷水越の石畳

3) 内野宿の概観

内野宿は、冷水峠の開削に伴って慶長17年（1612）に黒田家臣の母里太兵衛により開設された宿場町である。宿場は穂波川の左岸にあたる谷底平野のやや微高地（標高約80m）を中心に立地している。慶長10年（1605）、幕府が諸国大名に命じて作成提出させた国絵図と考えられる『慶長年間筑前国図』には、村々の位置が示され、街道には朱線が引かれ、一里塚が描かれている。この絵図には冷水越や六宿筋は記されておらず、また内野村の位置について穂波川の右岸に記されている。そのため、宿場町が開設する以前について内野村は穂波川右岸にあったが、慶長17年に宿場町を開設するにあたり穂波川左岸において新たに町を建設したと推定される。なお、正保元年（1644）に

幕府が全国の大名に作成提出させた『正保年間筑前国図』には、六宿筋が朱線で、冷水越の峠には「寒水越」とし、内野村の位置は穂波川左岸に記されている。

宿場は東構口（飯塚宿側）から西構口（山家宿側）まで約 470mで、その両構口間を街道が南北に走り、その中央部から西側に御茶屋へと向かう道が延びる。そのため町並みは、この三叉路を中心に三方向に広がりを見せている。三叉路の北側を下町、南側を上町、西側を小路と現在でも呼んでいる。また、両構口から宿場内に入って 100m程度進むと道がやや屈曲しており、見通しが利かない構造となっている。三叉路付近の街道筋には町茶屋として薩摩屋跡（中茶屋）と長崎屋跡（下茶屋、現在の建物は明治後期の建築）が近接して位置している。その他に宿場内には、酒造業を営んでいた松屋（主屋は江戸時代後期の建築）、板場を営んでいたと云われる小倉屋（現在の建物は明治後期の建築）などの町家、宿場のシンボリックな存在となっている内野の大イチョウ（県指定天然記念物）、道沿いには水路などが残っており、往時の面影を偲ばせている。



第4図 内野宿御茶屋絵図読取図 (1/500)
 (『長崎街道』福岡県文化財調査報告書第184集 福岡県教育委員会2003より転載、一部改変)

2. 内野宿御茶屋跡について

御茶屋と呼ばれる建物については、江戸時代初期において将軍や大名が遊獵の際の休泊所として建てたものであり、それが参勤交代制の確立に伴い幕府領にあっては将軍直営から民営の本陣に転化したのに対し、諸藩ではそのような明確な変化は見られず、藩営的性格を江戸時代後期まで持ち越し、御茶屋と本陣の両性格を併有していたとされる¹⁾。

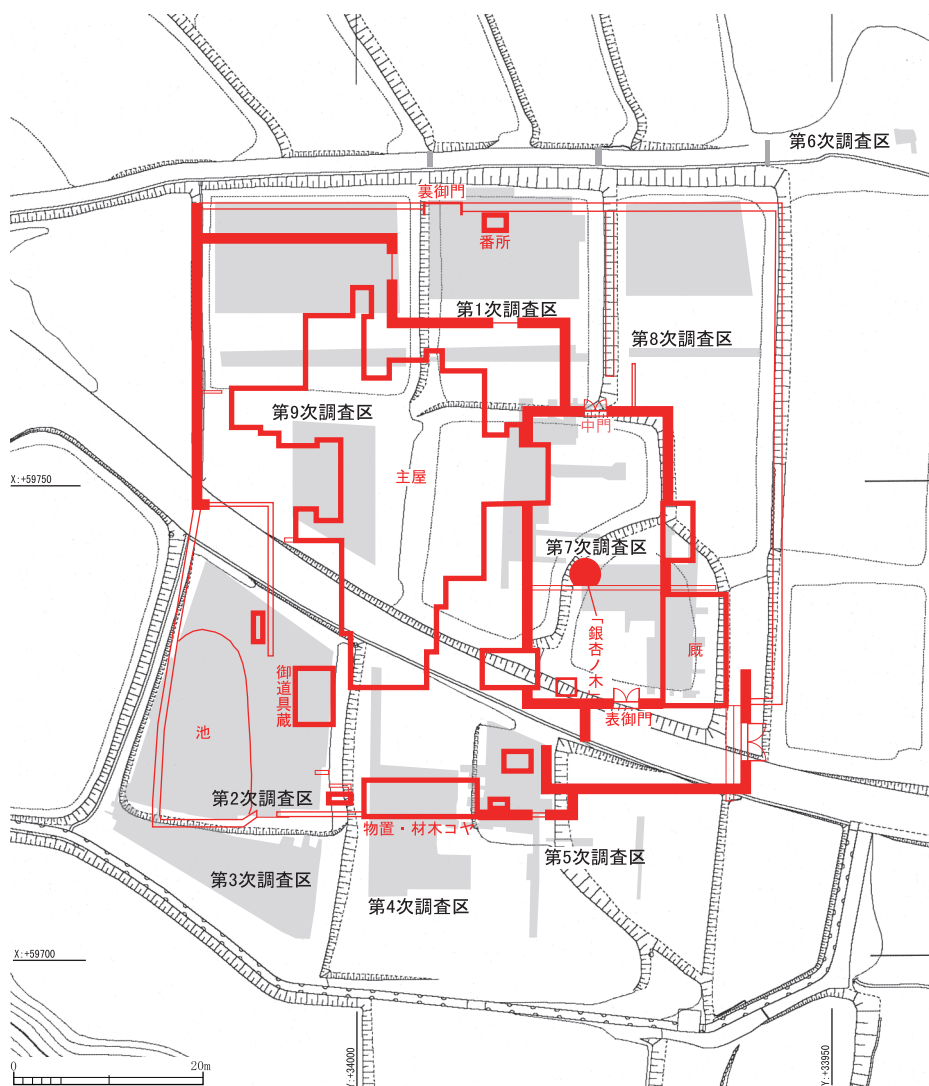
福岡藩の御茶屋については、『続風土記』の提要の中で、「國中邦君別館之在所」として、箱崎・青柳・藍島・赤間・底井野・黒崎・若松・植木・木屋瀬・赤地・飯塚・内野・姪浜・橋本前原・板付・原田・山家・甘木の19ヶ所を挙げている。現在、この記載が文献資料の中で内野宿御茶屋に関する初見と考えられるので、内野宿御茶屋については遅くとも『続風土記』が編纂開始された元禄期（1688～1704）には存在していたと考えられる。

『新訂黒田家譜第5巻』によると、明和8年（1771）第七代藩主である治之が國中巡見を行なうが、その中で「（四月）三日内野にゆき、五日同所別館の後ろの山にて猪鹿をからせ、居間より見物し、七日内野を発し」とある。このことからこの御茶屋が藩主の国廻りや遊獵の際の休泊所として利用されていたことが分かる。

福岡藩内においては内野・山家・赤間宿の御茶屋の指図が残っており、『内野御茶屋絵図』（以下、『絵図』）には文化8年（1811）12月8日に新任の代官田中左衛門が御用聞伊藤五郎太夫と御勘定奉行杉山太郎太夫の掛かり合いのもとに「惣絵図六枚」と「御茶屋・両町茶屋御道具」の目録三帳を受け取ったことが記されており、この絵図が描かれた時期を知ることができる。また、この絵図については外構と建物全体が極めて詳細に描かれており、部屋名、床仕上、天井仕上、壁仕上、建具等の仕様まで6記されている。さらに、この絵図は黄色・藍色・赤色などに色分けされており、凡例は記されていないが、『林家文書』所収「文政五年十二月御茶屋々々御家坪数其外口々書留メ」（以下、『御茶屋書留』）と照合すると黄色は萱葺き、藍色は瓦葺き、赤色は襖戸などの建具を示していることが分かる。



第5図 「筑前穂波郡内野村高石故城之図」にみえる内野宿
（『古戦古城之図』・国立公文書館蔵）



第6図 御茶屋跡発掘調査区位置図 (1/800)

内野宿内における御茶屋の所在位置については、文化～天保年間に秋月藩士の大蔵種周・土井正就により描かれた『古戦古城之図』（以下、『古城図』）の「筑前穂波郡内野村高石故城之図」（巻頭図版1参照）により概ね知ることが出来る。この古城図において高石山城の麓に描かれた内野宿の町並みの中に「御茶屋」と記された屋敷があり、その敷地内には大きな樹木も描かれている。その外にも、この『古城図』には長崎街道などの道筋（朱線）や穂波川（青塗り）、「御茶屋」の東側に現存する内野の大イチョウ（県指定天然記念物）と同定される樹木も描かれている。ここで、前述した『絵図』を参照すると「御式台」の前面に樹木として唯一記されている「銀杏ノ木」があるため、『古城図』に描かれた「御茶屋」敷地内の大きな樹木については、この「銀杏ノ木」と同定される。御茶屋の敷地内にあった「銀杏ノ木」と現存する内野の大イチョウについては、「内野の夫婦銀杏」として云われていたが、御茶屋の敷地内にあった「銀杏ノ木」は昭和10年（1935）に切り倒されている。この「銀杏ノ木」の所在場所については、昭和3年頃の写真や地元の方の証言により特定される^③。この「銀杏の木」の位置、『絵図』と周辺の地形を併せて、御茶屋の位置と範囲を第6図のように推定し、調査計画を立て実施していった。



写真2 内野の夫婦銀杏（昭和3年頃）
（手前中央左：「銀杏ノ木」、中央奥：「内野の大イチョウ」）



写真3 福岡県指定天然記念物 内野の大イチョウ（現在）

【註】

- (1) 丸山雍成 1962「初期本陣に関する一試論」『日本歴史』205号 吉川弘文館
- (2) 安高尚毅・宮本雅明 2006「御茶屋絵図から見た福岡藩御茶屋の空間・意匠構成」『日本建築学会計画系論文集No.603』
安高尚毅・宮本雅明 2006「御茶屋書留から見た福岡藩御茶屋の類型化」『日本建築学会計画系論文集No.621』
- (3) 「銀杏ノ木」跡については、第7次調査により確認された。

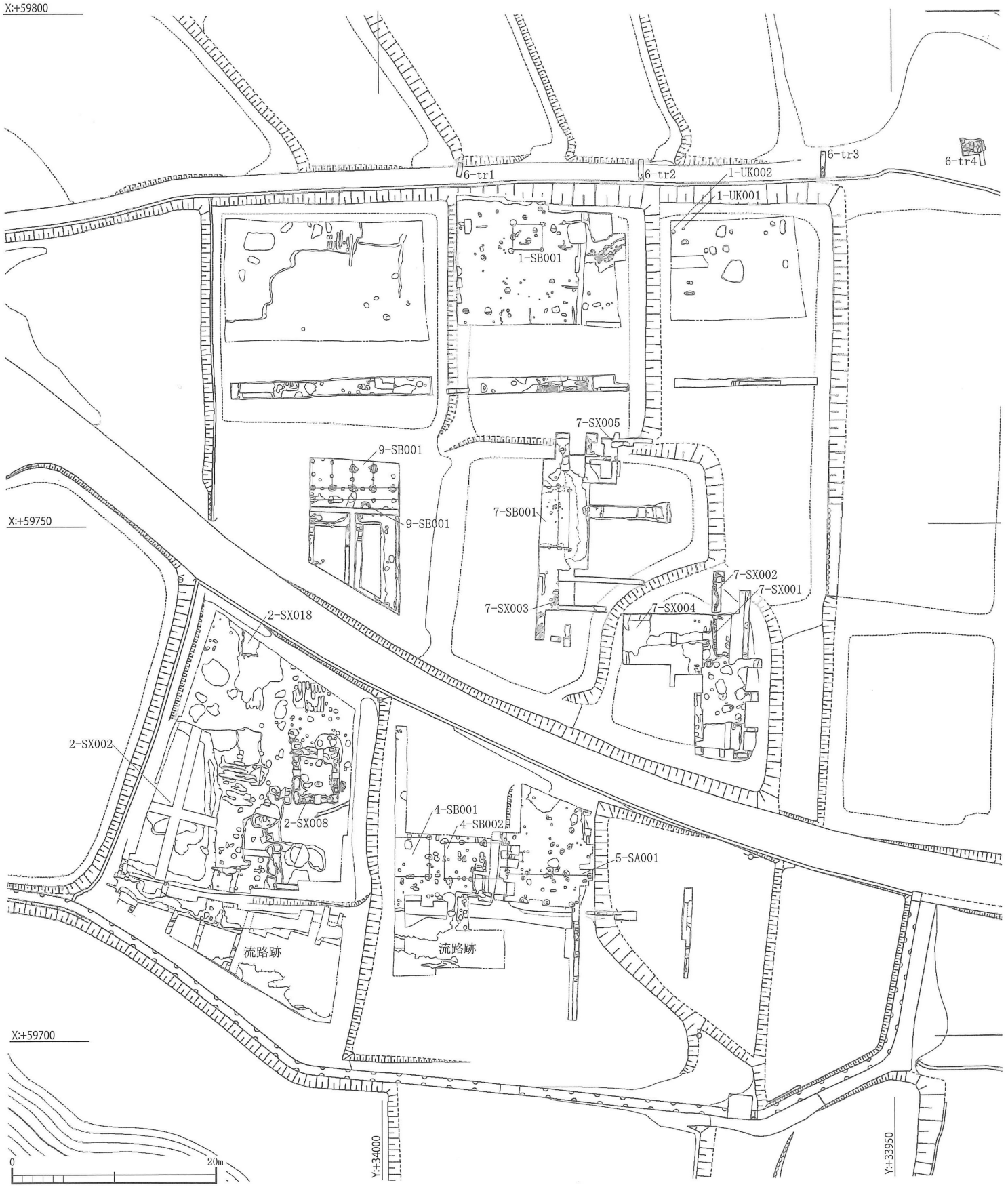
【参考文献】

- 近藤典二 1994「福岡藩の御茶屋と町茶屋」西南地域史研究 第八輯
『福岡県史』通史編 福岡藩（一）1998
『福岡県史』通史編 福岡藩（二）2002
『筑紫野市史』下巻 近世近現代 1999
『新訂黒田家譜』第五巻 1983
『長崎街道』福岡県文化財調査報告書第184集 2003
『筑前秋月城跡Ⅳ』甘木市文化財調査報告書第17集 1984
九州歴史資料館 2012 長崎街道開通四〇〇年記念特別展図録「長崎街道 一世界とつながった道」

X:+59800

X:+59750

X:+59700



第7図 内野宿御茶屋跡遺構配置図 (1/500)

IV. 調査の記録

1. 調査の概要

1) 第1次調査の概要 (図版2、第8図)

調査期間 平成21年5月27日～

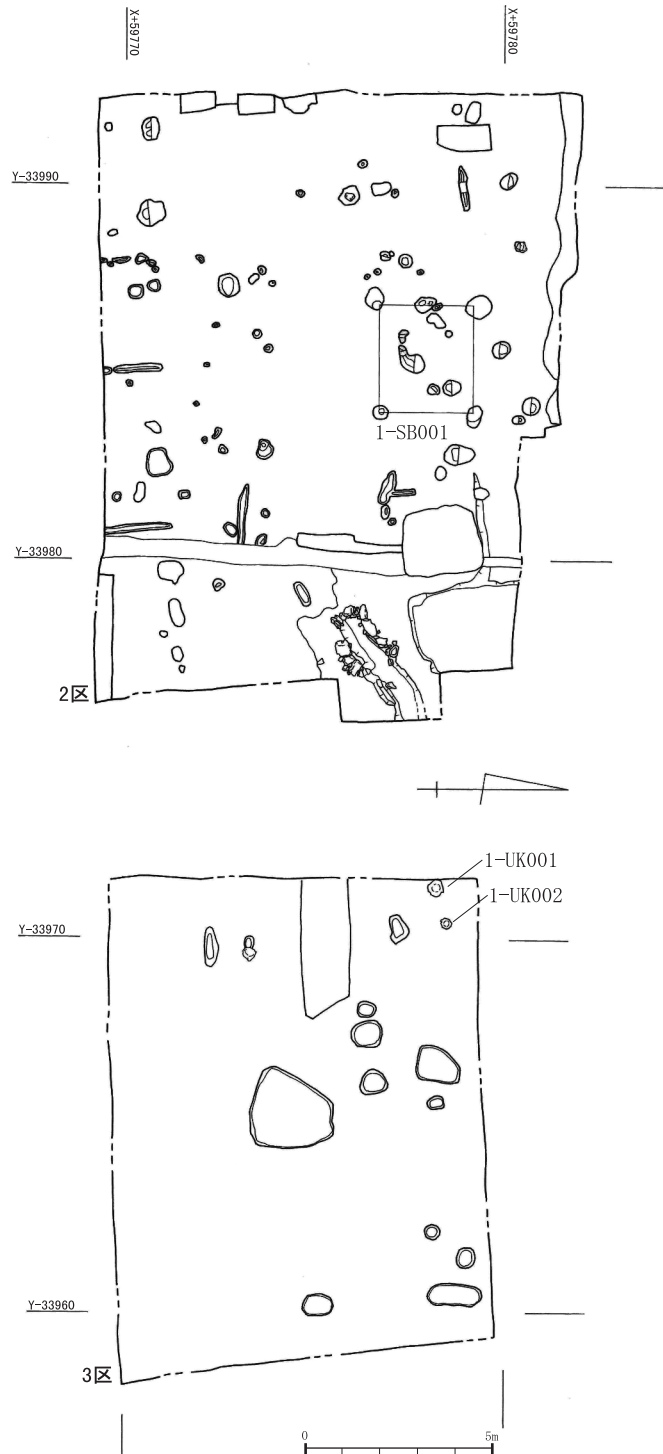
平成21年8月28日

調査面積 554 m²

第1次調査の目的は、『内野御茶屋絵図』(以下、『絵図』)に描かれている御茶屋跡北側に所在する裏御門、番所、圍繞設備としての竹垣・杉生垣を確認し、御茶屋跡の北限を定めることにあった。調査区を3つに分け、西側から東側の調査区にかけて1～3区とした。

調査の結果、御茶屋跡北側については埋土による造成を行ない御茶屋の敷地を構築していたことが判明したが、裏御門と圍繞設備である竹垣・杉生垣については後世の削平による影響と考えられるが確認できなかった。しかし、2区において1間×1間の掘立柱建物跡(1-SB001)を確認し、『絵図』から建物の規模と位置関係から「番所」と同定された。また、2区の調査区北壁沿いに地形の落込みが確認された。この落込みが御茶屋の敷地の北限と考えられた。3区においては全体的に削平されていたが、調査区北西隅において大小一對の埋甕(1-UK001・UK002)の底部が確認され、『絵図』には描かれていないが便所跡と推定された。

1区の遺構について、概要報告(『内野宿御茶屋跡』飯塚市文化財調査報告書第48集2015)ではL字状の溝状遺構を雨落ち溝と考えていたが、第9次調査の成果などと照らし合わせると遺構では無い可能性が高いのでここで訂正しておく。



第8図 第1次調査2・3区遺構配置図(1/200)

2) 第2次調査の概要 (図版2、第9図)

調査期間 平成22年11月16日～平成23年8月11日

調査面積 420 m²

第2次調査の目的は、『絵図』に描かれている御茶屋跡南西側に所在する御道具蔵と池を確認し、御茶屋跡の南西隅の範囲を定めることにあった。

調査の結果、主な遺構として調査区東側中央より布掘り基礎建物跡(2-SX008)、調査区南西側において池跡(2-SX002)を確認した。これらについては『絵図』からその規模、形状、位置関係などから、それぞれ「御道具蔵」「池」と同定された。池跡(2-SX002)については調査前に想定していた規模よりも大きかったため、第3次調査において御茶屋跡の南西隅の確認のための調査を実施することになった。なお、池跡(2-SX002)の埋土から採取した試料については自然科学分析を行なっているので、第V章において詳細を報告する。

3) 第3次調査の概要 (図版3、第9図)

調査期間 平成24年1月26日～平成24年3月31日

調査面積 140 m²

第3次調査の目的は、第2次調査で確認出来なかった池跡(2-SX002)の南西隅を確認するとともに、御茶屋跡の南限と南西隅を定めることにあった。調査の結果、池跡の南限と南西隅を確認し、さらに『絵図』には描かれていなかったが御茶屋跡の南側に東西方向に延びる流路跡(3-SD001)も確認された。この流路跡(3-SD001)の性格や規模などについては今後の調査の課題となった。

4) 第4次調査の概要 (図版3、第10・11図)

調査期間 平成24年12月10日～平成25年3月31日

調査面積 155 m²

第4次調査の目的は、第3次調査で確認された御茶屋跡南側を東西方向にはしると推定される流路跡(3-SD001)、『絵図』に描かれている御茶屋跡南側中央に所在する物置、材木小屋を確認し、御茶屋跡の南限を定めることにあった。

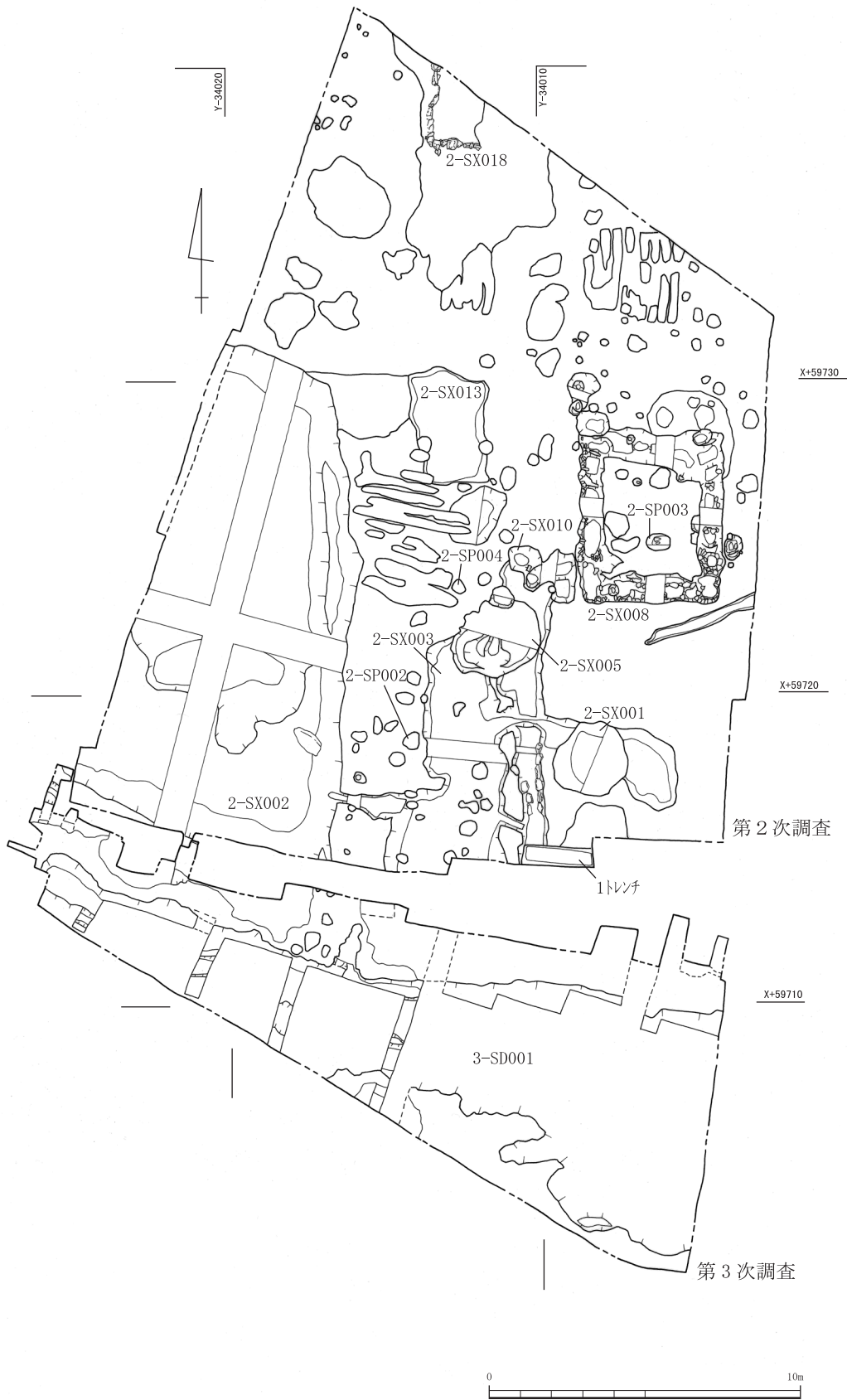
調査の結果、主な遺構として流路跡(3-SD001)の延長と掘立柱建物跡2棟(4-SB001・SB002)が確認され、今回確認された掘立柱建物跡については『絵図』から建物の規模と位置関係から各々「物置跡」と「材木小屋跡」と同定された。今回の調査により御茶屋跡の南限を示す「物置跡」と「材木小屋跡」の位置が判明すると共に、御茶屋跡と流路跡(3-SD001)の位置関係についても明らかとなった。

5) 第5次調査の概要 (図版4、第10図)

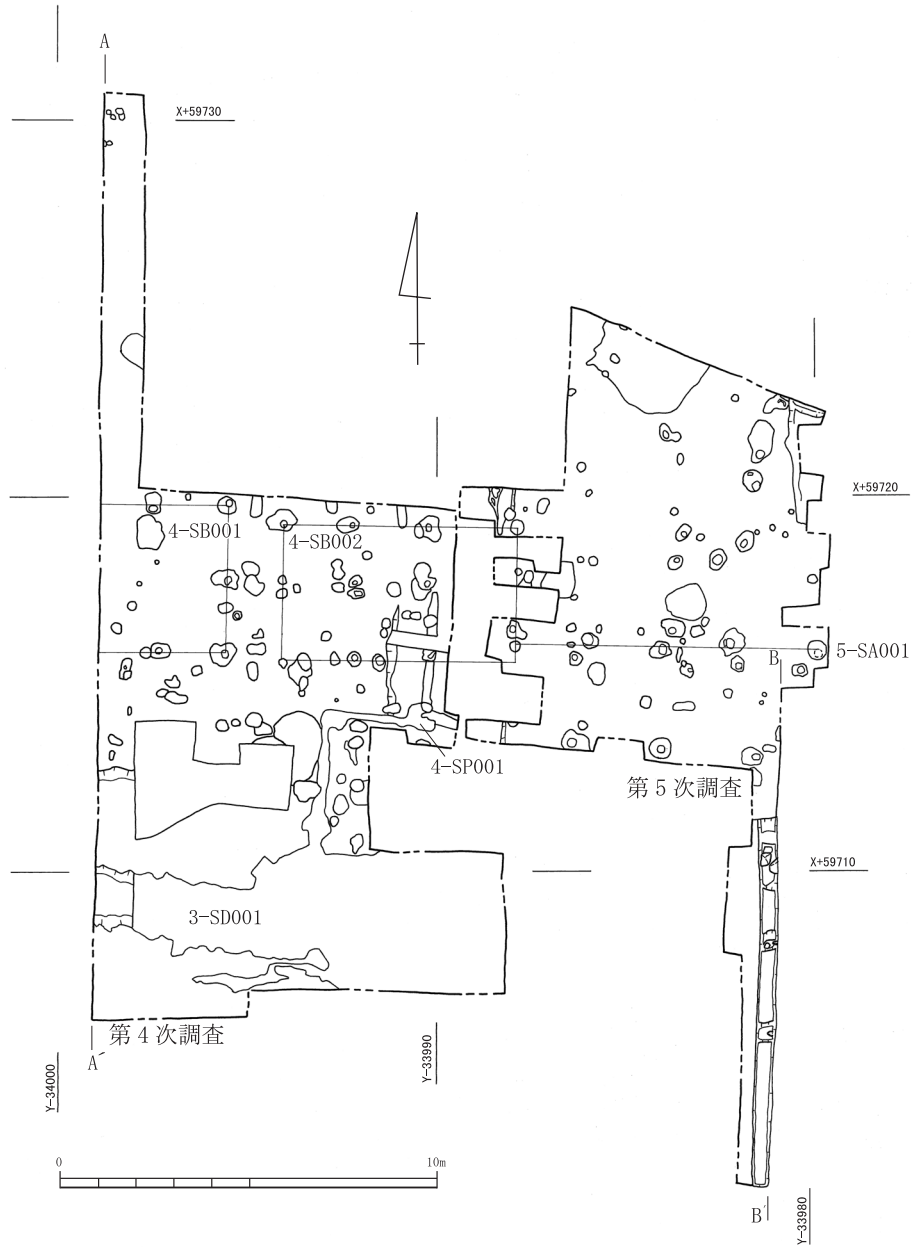
調査期間 平成25年12月4日～平成26年3月31日

調査面積 98 m²

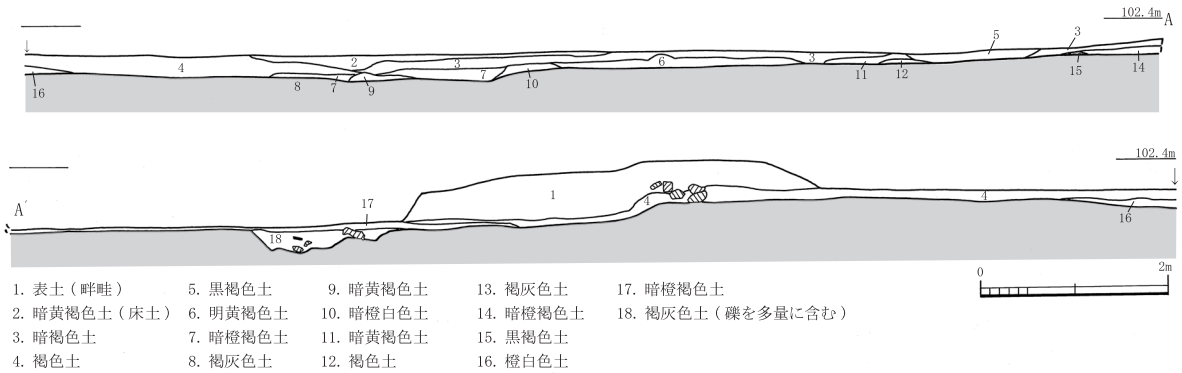
第5次調査の目的は、御茶屋跡の南側にある流路跡(3-SD001)と第4次調査で確認された「材木小屋跡」の規模・構造を明らかにすることにあった。調査の結果、流路跡(3-SD001)の延長部分、「材木小屋跡」として同定された掘立柱建物跡(4-SB002)の延長部分、この建物跡と主軸



第9図 第2・3次調査区遺構配置図 (1/200)



第10図 第4・5次調査区遺構配置図 (1/200)



第11図 第4次調査区西壁土層図 (1/80)

を同じくする柱穴列（5-SA001）が確認された。

流路跡（3-SD001）については、横断面にトレンチを設定し断割り調査を実施した結果、北側の落込み（御茶屋側）は確認できたが、南側については立ち上がりを確認できず、かなりの幅を有する流路跡であると考えられた（第11図）。流路跡の覆土からは径15～20cm程度の礫や瓦片がやや多く確認され、御茶屋廃止後のどの時期かは分からないが埋められたものであろうと判断された。また、今回確認された柱穴列（5-SA001）については、『絵図』から「材木小屋」から延びる練塀に伴うものと推定された。

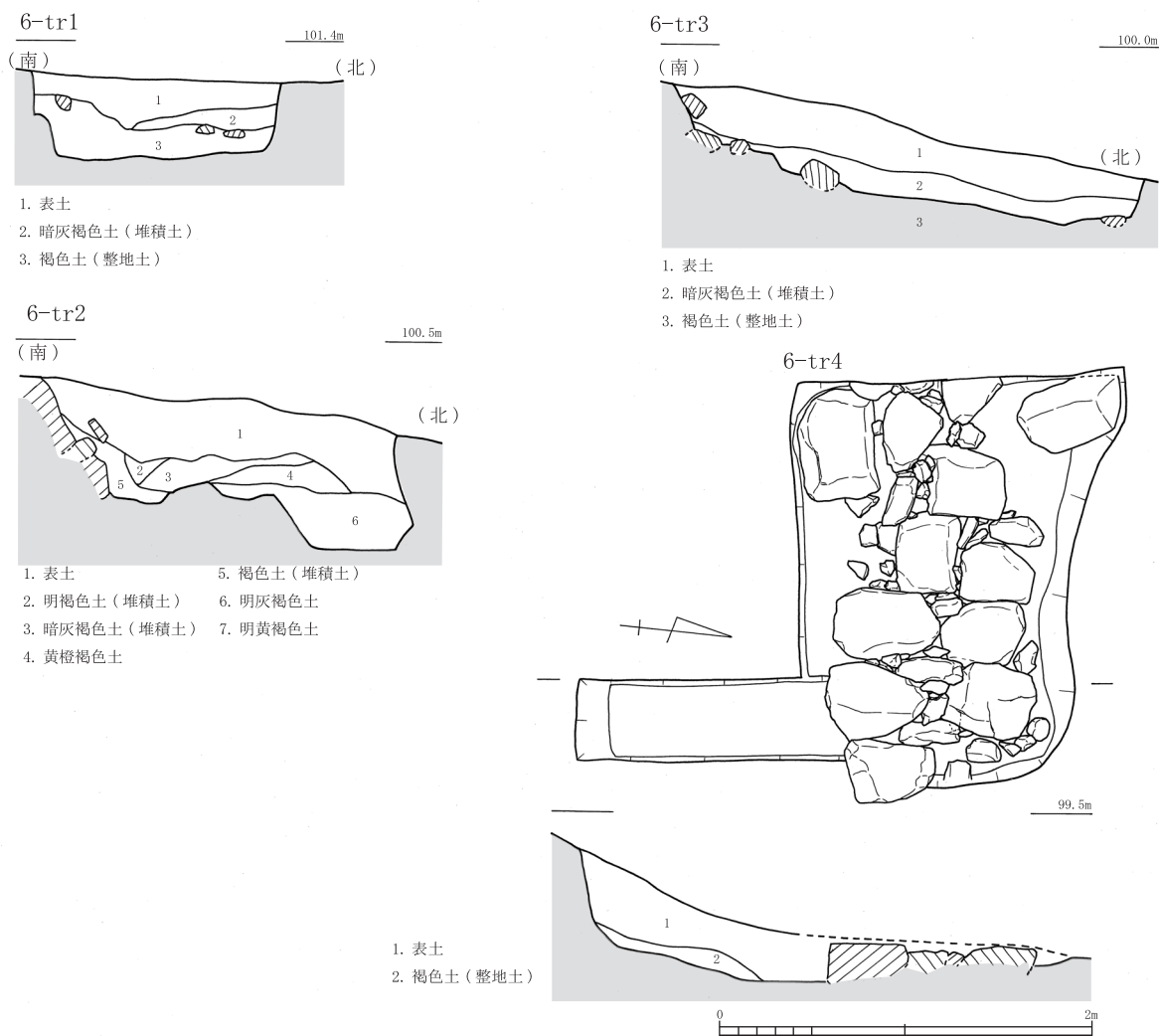
さらに御茶屋跡南東側にあたる部分にも範囲と内容を確認するため、0.8m×8.8m程度のトレンチを設定し調査を実施したが、表土下0.4mで基盤層である黄褐色土層が検出され、流路跡（3-SD001）の落込みは確認出来たものの後世による削平が著しいことが判明した

6) 第6次調査の概要（図版9、第12図）

調査期間 平成28年3月16日～平成28年3月28日

調査面積 6 m²

第6次調査は御茶屋跡北側の農道に調査区を設定し、近世において御茶屋跡の北側に沿って東西



第12図 第6次調査区平面図・土層図（1/40）

方向にはしっていたと推定される道路の確認と御茶屋跡の北限を確定することを目的とした。御茶屋跡北側の道路については、『古戦古城之図』『筑前穂波郡内野村高石故城之図』（以下、『古城図』）において赤線で記されており、『絵図』に描かれている「裏御門」もこの道路に面していたと想定された。現在、この道路は未舗装の農道として利用されている。今回の調査では、この農道を横断する4箇所の調査区（6-tr1～tr4）を設定した。

調査の結果、6-tr1～tr3では道路面として明確なものは確認できず、道路面から御茶屋跡への土層の立ち上がりについても明確に捉えることはできなかった。6-tr4は御茶屋跡の敷地からやや東側に下った場所に設定した調査区で、ここからは表土直下から石畳道が確認された。石畳に使用されている石材は花崗岩が主体で、根石の上に長さ40～50cm、厚さ20cm程度の石を並べている。冷水越の石畳の石材に比べ、大きな石材を使用している。遺存した石畳と地形等から考えると、道幅は約1.8～2.0m程と推定された。

7) 第7次調査の概要（図版4、第13・14図）

調査期間 平成28年12月8日～平成29年3月31日

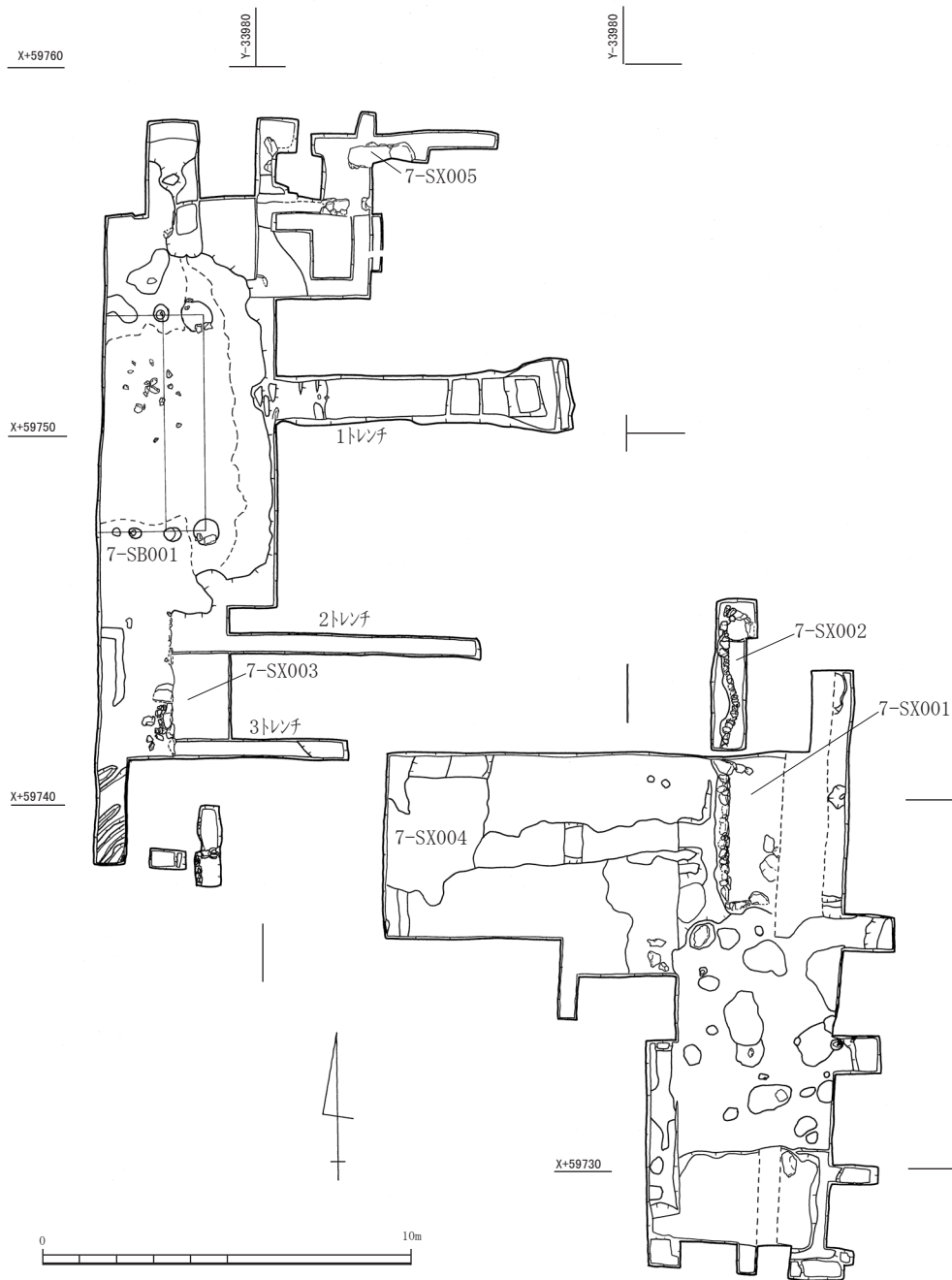
調査面積 200㎡

第7次調査の目的は、御茶屋の中心施設となる主屋の「御式台」付近と主屋前面部分（主屋東側）外郭施設等の位置・構造を確認することにあつた。調査区は東側と西側の2箇所に設定し、地形的に西側調査区（御茶屋主屋側）が東側調査区より現地表面で比べると約1.0m高い。

調査の結果、東側調査区から石積遺構2（7-SX001・SX002）と不明土坑（7-SX004）、西側調査区から建物跡に伴うと考えられる柱穴群等（7-SB001）、石積遺構（7-SX003）、敷石遺構（7-SX005）が確認された。これらの遺構については『絵図』と照合するとその規模、形状、位置関係などから、東側調査区の石積遺構（7-SX001）が「駕籠塀」に伴う石垣、石積遺構（7-SX002）が「腰掛」に伴う石積み、不明土坑（7-SX004）が「銀杏ノ木」跡、西側調査区の柱穴群（7-SB001）が御茶屋主屋の「御式台」、敷石遺構（7-SX005）が「中門」に伴う敷石と同定された。

御式台については、礎石は消失しているが根石と推定される礎を埋土に多く含んだ柱穴（以下、「礎石基礎」とする。）とこれに並ぶ柱穴が確認された。この礎石基礎について第7次調査中は礎石基礎と明確に判断出来なかったが、後述する9次調査で柱礎石を有する礎石基礎が確認されたことによって明らかとなった。この礎石基礎と柱穴の位置と規模から、これらは御式台に伴うものと推定された。

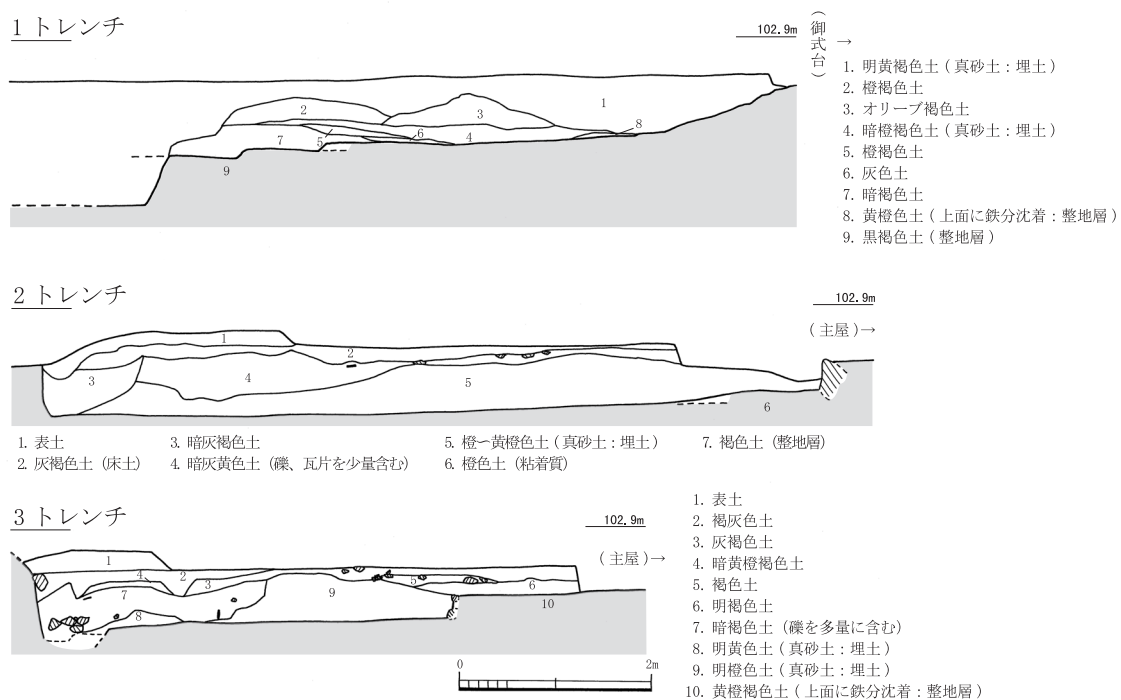
また、御式台の前面部分から東側へ伸ばした1トレンチからは、御式台から東側にかけて緩やかに下るスロープ状の通路が確認された。おそらく御茶屋の主屋（御式台）に向かうための通路と想定され、主屋の東側で『絵図』に記された「腰掛」が所在していた空間より御茶屋の主屋が建っていた部分は50～60cm程度高く造成されていたことが明らかとなった。さらに、御式台南側に設定した2・3トレンチからも、主屋が建っていた区画は周辺より50cm程度高く盛土されていることが明らかとなった。また、その盛土された範囲の周囲は石積遺構（7-SX003）で確認されたような土留石により区画されていたことが明らかとなった。検出された石積遺構の上部は、第9次調査の成果を踏まえると約10cm程度削平されていると推定される。この石積遺構については、『絵図』と照合するとこの部分を区画する練塀の基礎石垣を兼ねていたとも考えられる。



第13図 第7次調査区遺構配置図 (1/200)

西側調査区においては、主屋が建築される範囲のみが固く締まった黒褐色土（白色粒子を多く含む）により造成されていることが明らかとなった。後述する第9次調査で礎石群を検出した遺構検出面のレベルと第7次調査において検出された御式台の遺構検出面（黒褐色土上面）のレベルがほぼ同じであるため、今次調査の西側調査区については後世に殆ど削平されていないことが後の調査で明らかとなった。

不明土坑（7-SX004）からはイチョウの木片が出土し、西側調査区に設定した3トレンチからは



第 14 図 第 7 次調査区土層図 (1/80)

不明土坑 (7-SX004) に近接していたためであろうか、イチョウの炭化した種実類 (種子・内種皮・外種皮) が表土等から多く出土した。これら木片や種実類については、樹種同定や種実同定等の自然科学分析を行なっているので、第 V 章において詳細を報告する。

8) 第 8 次調査の概要 (図版 5、第 15 図)

調査期間 平成 30 年 2 月 8 日～平成 30 年 3 月 31 日

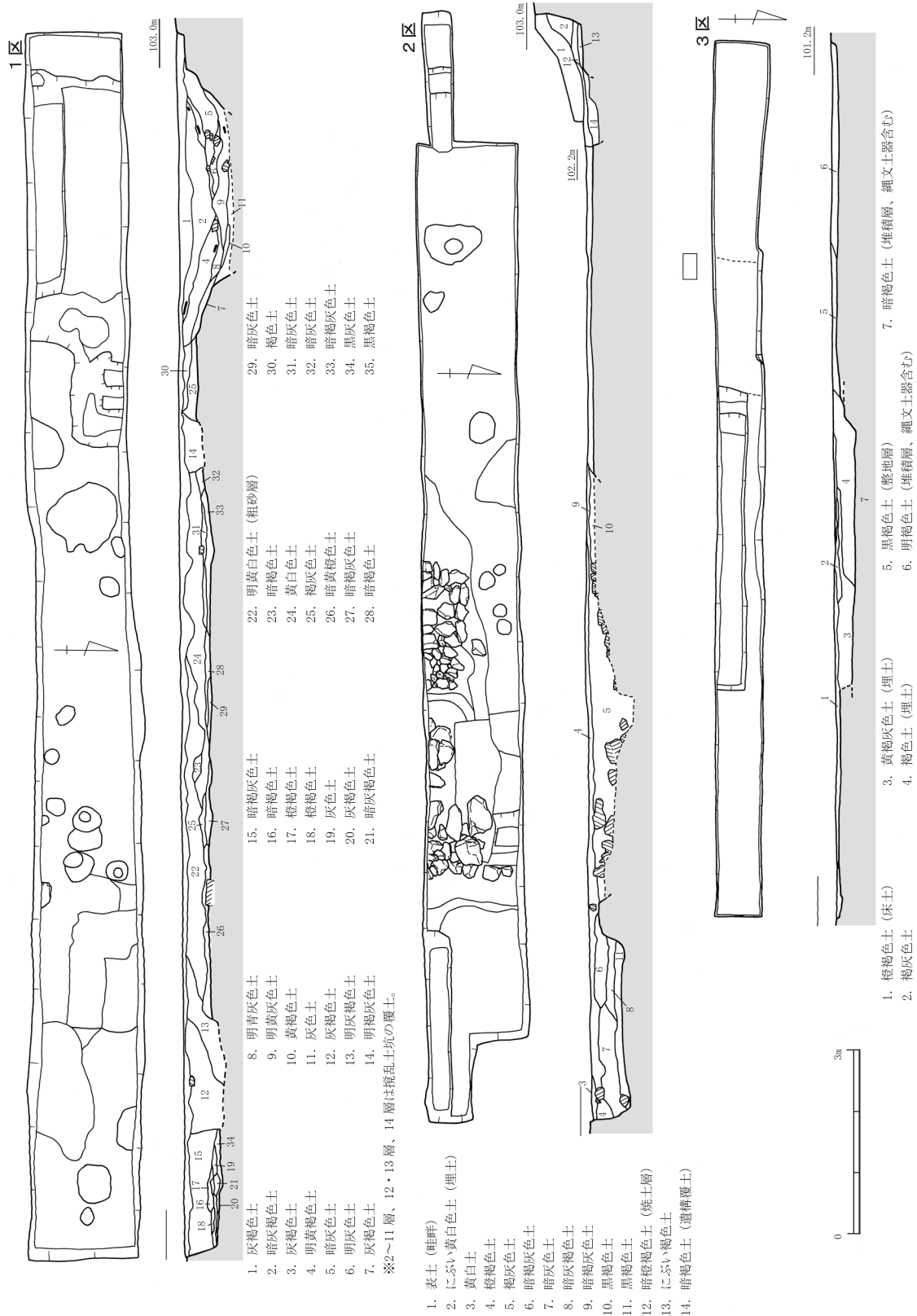
調査面積 72 m²

第 8 次調査の目的は、御茶屋跡中央部を東西方向に横断する様に調査区を設定し、第 7 次調査で明らかとなってきた御茶屋跡敷地内の各空間における高低差を確認することにあつた。西側から東側にかけて低くなる田面 3 段に各々調査区を設定し、西側から東側にかけて 1 区、2 区、3 区と命名して調査を実施した。

調査の結果、主屋部分が御茶屋跡の中で一段高く造成されていることが確認され、第 7 次調査の成果を裏付けることが出来た。しかし、やはり最も低い位置にある東側の田面に設定した調査区 (3 区) においては、第 1 次調査 3 区の調査状況と同様に後世の削平が著しく、縄文時代の遺物片などが採集されるような状況である。

最も上段の調査区 (1 区) からは第 7 次調査の西側調査区で確認された遺構検出面である黒褐色土層が確認されたが、第 7 次調査西側調査区や後述する第 9 次調査区における主屋の遺構検出面より全体的に約 0.3m 低く、後世による削平の影響を受けていることが分かった。そのため礎石や礎石基礎が残っていない状況であった。調査区西端では、後世のものと推定される幅 3.5m を測る攪乱土坑が確認された。

中段の調査区 (2 区) については、調査区の東側半分が後世の影響を受けているのか礫が集められ廃棄されたような土坑が確認された。



第15図 第8次調査区平面図・土層図 (1/100)

9) 第9次調査の概要 (図版5、第16・17図)

調査期間 平成30年12月8日～平成31年3月31日

調査面積 105 m²

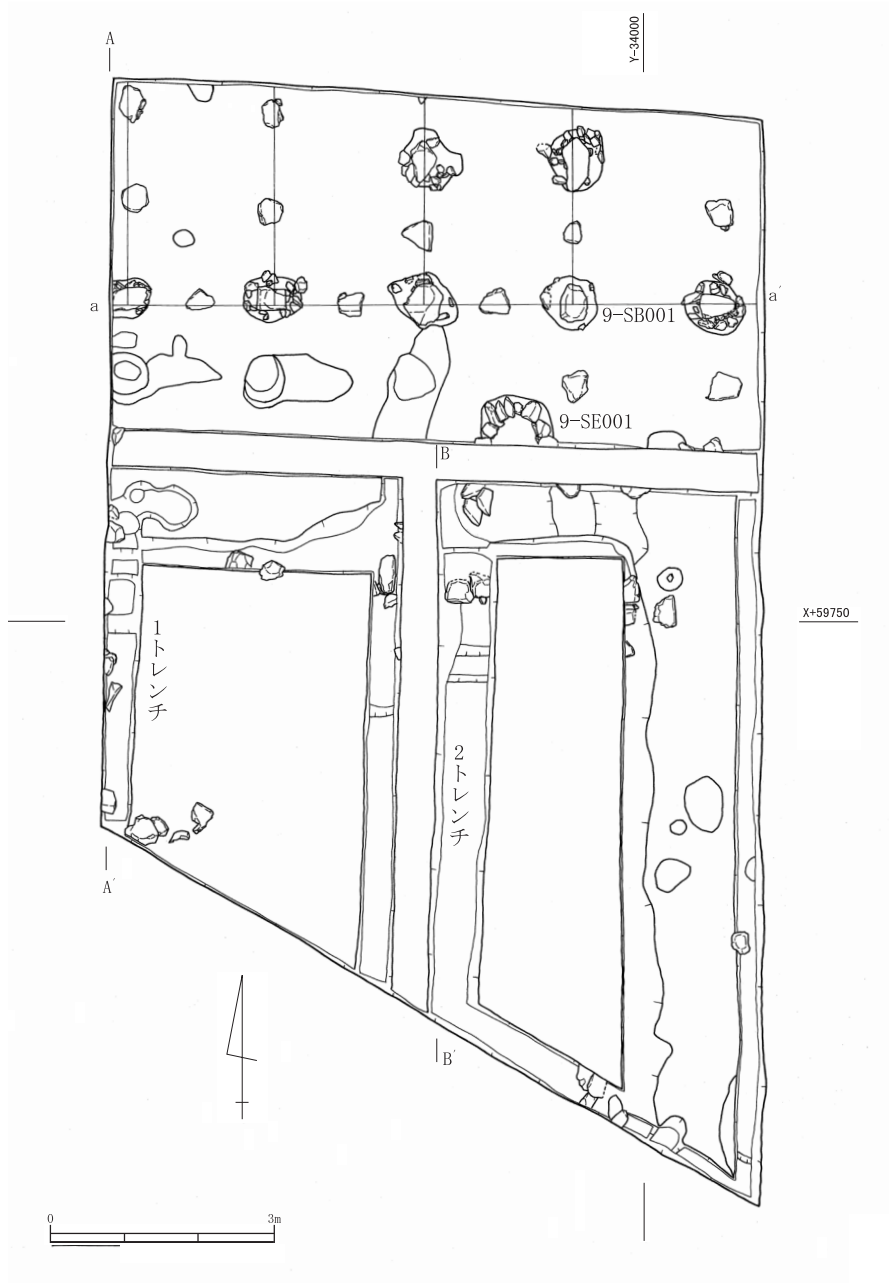
第9次調査の目的は、御茶屋跡主屋西側中央部に調査区を設定し、御茶屋の主屋に係る遺構を確認することにあった。

調査の結果、主屋に伴う礎石群(9-SB001)が調査区の北側半分全体に亘って確認された。この礎石群は柱礎石とやや小さい束礎石からなり、柱礎石間は約2.0m、その中間に束礎石が並んでいる。柱礎石のみ基礎掘方が確認され、柱礎石は基礎掘方に黄褐色土と共に充填された根石(径15～20cm程度の角礫)の上に置かれていることが確認された。一方、束礎石は基礎掘方が確認されず、後述する黒褐色土の造成土に埋め込まれるように置かれている。柱礎石上面の標高値は西から東に向けて僅かずつ下がっていく傾向があり、標高値102.42～102.50mと一連の石列内でも小異が認められる。一方、束礎石上面の標高値は102.36～102.50mと柱礎石よりもばらつきが目立つ。

柱礎石下の遺構検出面である黒褐色土上面の標高値は第7次調査において「御式台」が確認された遺構検出面の標高値とほぼ一致する。また、礎石群が確認された調査区北側半分と調査区南側の調査区東壁付近は、固く締まった黒褐色土(白色粒子を多く含む)により造成されていた。つまり、礎石群はこの黒褐色土による造成後、その上面に据え置かれたと想定された。この黒褐色土による造成土は主屋が建っていたと想定される範囲以外では確認されておらず、主要な建物を建てる際の特別な造成土と考えられる。一方、礎石群が確認されなかった調査区南側(調査区東壁付近を除く)は径20～30cm程度の礫などを含む砂礫土により埋められた状況が確認され、この部分を南北方向に断ち割った1・2トレンチの土層(第17図)を確認したところ、主屋が建っていた遺構検出面より約0.9m低くなっていることが明らかとなった。

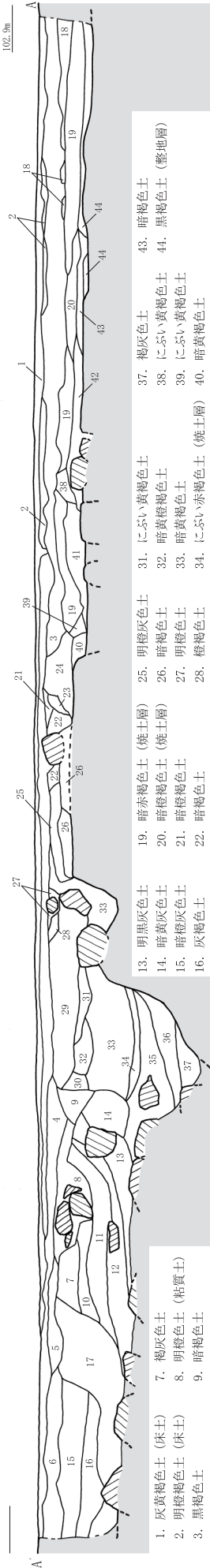
調査区中央においては、内径0.6mを測る小規模な石積みの井戸状遺構(9-SE001)が確認された。井戸としては、非常に小型のため井戸状遺構としている。覆土は完掘せず、検出面より約0.3m下まで掘り下げたところで留めた。この井戸状遺構については、礎石群に非常に近い位置で確認されたが、『絵図』に描かれてなく不明な点が多い。

今回の調査により主屋の基礎が礎石であることがはじめて明らかとなった。また、礎石群が確認された位置を『絵図』と照合すると、概ね主屋北西側の部屋である「御召料」「御水屋」に該当すると思われる。しかし、この礎石群の位置と『絵図』に描かれた「御召料」「御水屋」の柱の位置と照合しないため、『絵図』が描かれた文化年間以降に御茶屋の増改築が行なわれた可能性も考えられる。井戸状遺構については「御水屋」と想定される部屋の南面にほぼ隣接して確認されたため、茶を立てる際に使用された井戸とも考えられる。



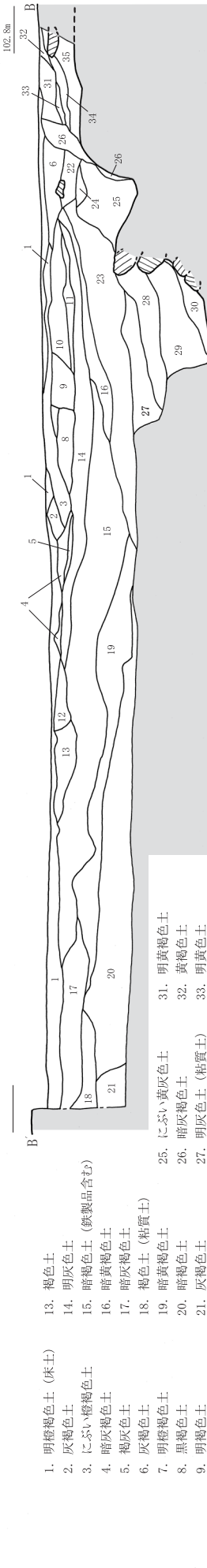
第 16 図 第 9 次調査区遺構配置図 (1/100)

調査区西壁



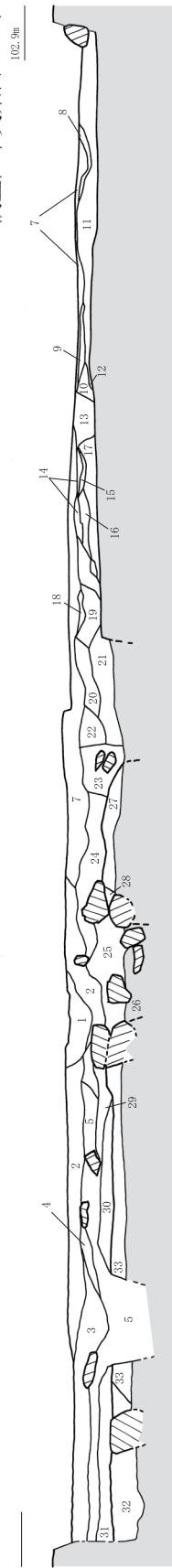
- | | | | | | | | |
|---------------|----------------|-------------|-----------------|-----------|-------------------|-------------|----------------|
| 1. 灰黄褐色土 (床土) | 7. 褐灰色土 | 13. 明黄褐色土 | 19. 暗赤褐色土 (焼土層) | 25. 明橙灰色土 | 31. にぶい黄褐色土 | 37. 褐灰色土 | 43. 暗褐色土 |
| 2. 明橙褐色土 (床土) | 8. 明橙褐色土 (粘質土) | 14. 暗黄灰色土 | 20. 暗橙褐色土 (焼土層) | 26. 暗褐色土 | 32. 暗黄褐色土 | 38. にぶい黄褐色土 | 44. 黒褐色土 (整地層) |
| 3. 黒褐色土 | 9. 暗褐色土 | 15. 暗橙灰色土 | 21. 暗橙褐色土 | 27. 明褐色土 | 33. 暗黄褐色土 | 39. にぶい黄褐色土 | |
| 4. 橙灰色土 | 10. 明灰色土 (細砂層) | 16. 灰褐色土 | 22. 暗褐色土 | 28. 橙褐色土 | 34. にぶい赤褐色土 (焼土層) | 40. 暗黄褐色土 | |
| 5. 灰褐色土 | 11. 暗灰褐色土 | 17. 灰褐色土 | 23. 橙褐色土 | 29. 暗橙褐色土 | 35. 灰黄色土 | 41. 暗黄褐色土 | |
| 6. 明灰褐色土 | 12. 黄褐色土 (細砂層) | 18. にぶい黄褐色土 | 24. 暗橙灰色土 | 30. 黄褐色土 | 36. 明灰黄色土 | 42. 黄褐色土 | |

2 トリフ



- | | | | |
|---------------|-------------------|-----------------|----------------|
| 1. 明橙褐色土 (床土) | 13. 褐色土 | 25. にぶい黄灰色土 | 31. 明黄褐色土 |
| 2. 灰褐色土 | 14. 明灰色土 | 26. 暗灰褐色土 | 32. 黄褐色土 |
| 3. にぶい橙褐色土 | 15. 暗黄褐色土 (鉄製品含む) | 27. 明灰色土 (粘質土) | 33. 明黄色土 |
| 4. 暗灰褐色土 | 16. 暗黄褐色土 | 28. にぶい灰褐色土 | 34. 橙褐色土 (焼土層) |
| 5. 褐灰色土 | 17. 暗灰褐色土 | 29. 明黄灰色土 (粘質土) | 35. 暗褐色土 |
| 6. 灰褐色土 | 18. 褐色土 (粘質土) | 30. 明灰褐色土 | |
| 7. 明橙褐色土 | 19. 暗黄褐色土 | | |
| 8. 黒褐色土 | 20. 暗褐色土 | | |
| 9. 明褐色土 | 21. 灰褐色土 | | |
| 10. 褐色土 | 22. 褐灰色土 | | |
| 11. 黒褐色土 | 23. 灰黄色土 | | |
| 12. 橙褐色土 | 24. 暗橙褐色土 | | |
- ※2~35層は埋土。

調査区中央東西ベルト



- | | | | | |
|----------------|-----------------|-----------|-------------------|---------------|
| 1. 黒灰色土 | 8. 黄褐色土 | 15. 明橙灰色土 | 22. 明橙灰色土 | 29. 暗褐色土 |
| 2. にぶい黄褐色土 | 9. 明黄褐色土 | 16. 暗褐色土 | 23. 暗灰褐色土 | 30. 暗黄褐色土 |
| 3. 黒褐色土 | 10. 褐灰色土 | 17. 暗黄褐色土 | 24. 橙灰褐色土 | 31. 橙黄色土 |
| 4. 暗黄褐色土 | 11. 暗褐色土 | 18. 明黄灰色土 | 25. にぶい橙灰色土 | 32. 褐色土 (整地層) |
| 5. 暗赤褐色土 (焼土層) | 12. 暗黄褐色土 (整地層) | 19. 明褐色土 | 26. 黒灰色土 (焼土含む) | 33. 褐色土 (整地層) |
| 6. 明褐色土 | 13. 暗橙灰色土 | 20. 暗橙褐色土 | 27. 暗褐色土 (整地層) | |
| 7. 暗赤褐色土 (焼土層) | 14. 明褐色土 | 21. 暗褐色土 | 28. 黄褐色土 (井戸裏込め土) | |

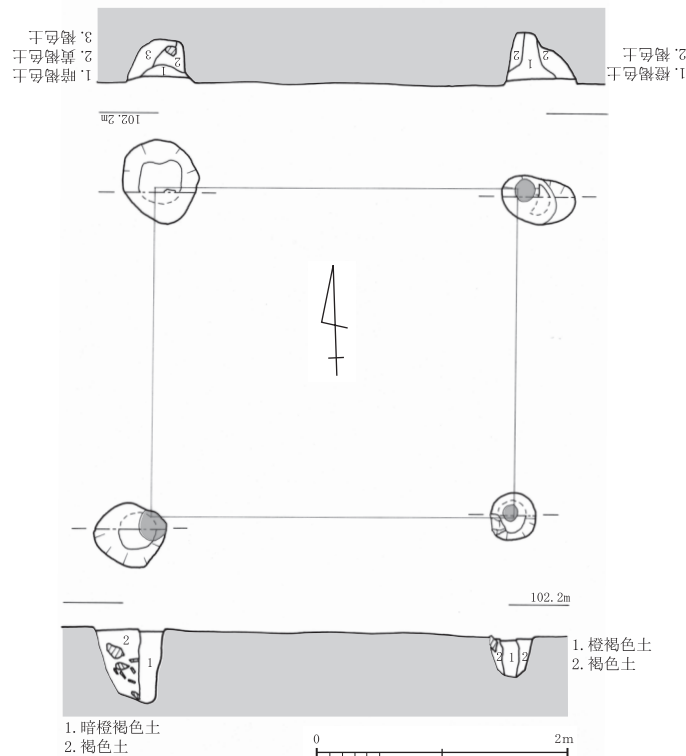
第17図 第9次調査区土層図 (1/40)

2. 検出遺構について

1) 建物跡

番所跡 1-SB001 (図版6、第18図)

第1次調査において、2区の北側中央部で検出された1間×1間の掘立柱建物跡で、建物の規模は東西行2.88mで、南北行2.60mである。東西方向の柱間がやや長いのでこれを主軸と考えると座標北から88°西に振っている。柱掘方は丸形から楕円形を呈し、深さは0.3~0.6m程度で、柱痕跡は径0.14~0.18mである。『絵図』によれば、屋根は茅葺きで建物西面に窓が設けられていたことが分かり、裏御門に付随する番所であったことが分かる。



第18図 番所跡 1-SB001 実測図 (1/60)

物置跡 4-SB001 (図版3、第10図)

第4次調査において検出された掘立柱建物跡で、西側部分は調査区外へと延びるため建物の規模は不明である。しかし、『絵図』を参照するとこの建物は南北方向が梁行、東西方向が桁行と考えられるので、梁行3.9m、建物の主軸は座標北から89°西に振っているとされた。柱掘方は楕円形から隅丸方形を呈し、柱間は1.8~2.0mで、柱痕跡は径0.18m程度である。『絵図』によれば「物置」と「材木小屋」は6間×2間の茅葺きの建物を壁で、2間×2間、4間×2間に仕切り、各々使用されていたようであるが、調査ではそのような状況は確認できなかった。

材木小屋跡 4-SB002 (図版3、第10図)

第4・5次調査において検出された4間×2間の掘立柱建物跡で、桁行6.20mで、梁行3.55mである。主軸は座標北から89°西に振っている。柱掘方は丸形から不整円形を呈し、柱痕跡は径0.17~0.18mである。「物置」の項で説明したとおり、今回確認された「材木小屋」については『絵図』

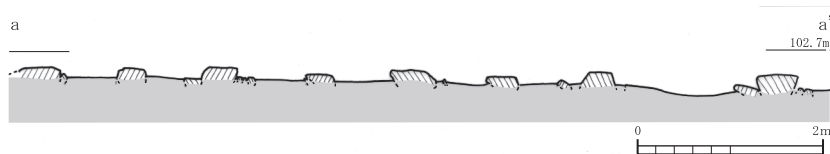
とは違う建物構造であった。

主屋跡（御式台部分） 7-SB001（図版10、第13図）

第7次調査西側調査区において、検出された柱穴群と礎石基礎である。『絵図』と照合すると、主屋の『御式台』の位置と間口寸法がほぼ一致するので、この部分を「御式台」と推定した。礎石基礎跡と柱穴の南北間はそれぞれ5.8mで、この数値が「御式台」の間口幅と考えられ、この南北軸と座標北は直交している。また、礎石基礎跡と柱穴の東西間は1.1mである。この御式台が建っていたと想定される部分のみ、黒褐色土による造成が確認される。

主屋跡 9-SB001（図版12、第16・19図）

第9次調査において、検出された御茶屋の主屋に伴うものと推定される礎石群である。礎石群は柱礎石とやや小さい束礎石からなり、柱礎石間は約2.0m、その中間に束礎石が並んでいるので、柱礎石と束礎石の間は約1.0mを測る。柱礎石・束礎石の石材は、自然石の花崗岩が主体であるが、一部に片岩系のものも使用している。束礎石については、自然石の花崗岩を人為的に割って、柱礎石より半分程度の大きさにしたものを使用しているようである。『絵図』と照合すると、主屋の北西側にあたる「御召料」、「御水屋」と記された部屋の位置に該当する。しかし、この礎石群の位置と『絵図』に描かれた「御召料」「御水屋」の柱の位置とは照合しないため、『絵図』が描かれた文化年間以降に増改築が行なわれた可能性も考えられる。



第19図 主屋跡9-SB001 礎石跡東西断面図（1/80）

道具蔵跡 2-SX008（図版7、第20図）

第2次調査において調査区東側で検出された布掘り基礎建物跡で、南北に長い長方形を呈する布掘りの掘方を有する。『絵図』と照合すると、遺構の位置や形状から「御道具蔵」に該当する。この掘方の南北検出長が5.4m前後、東西検出長が4.6m前後である。主軸は座標北とほぼ一致する。この掘方の幅は0.7~1.0mで、深さは検出面から0.18~0.3m下である。掘方内には根石と推定される礫が環状に置かれており、本来は大きな石がこの根石の上に置かれ、布掘りの掘方内には大きな基礎石で充填されていたと想定された。この基礎構造からも、上屋としては土蔵などの重量のある建物が想定されるので、本遺構は御道具蔵の基礎構造として間違いなからう。

2) 柱穴列

5-SA001（第10図）

第5次調査において調査区南側で検出された東西方向に延びる練塀に伴うと考えられる柱穴列で、東端については材木小屋（SB003）と接続していると考えた。柱掘方は円形を呈し、柱痕跡は確認出来るもので径0.25m程度である。主軸は座標北から89°西に振っている。柱間は西側より1.9m、2.0m、1.8m、2.3mであり、最も東側の柱穴と隣接する西側の柱穴の間のみが広がっており、さらにこの2つの柱穴の南側に別の柱穴が各々付随することから、この間は『絵図』に描かれている練塀の「戸」の跡と推定された。

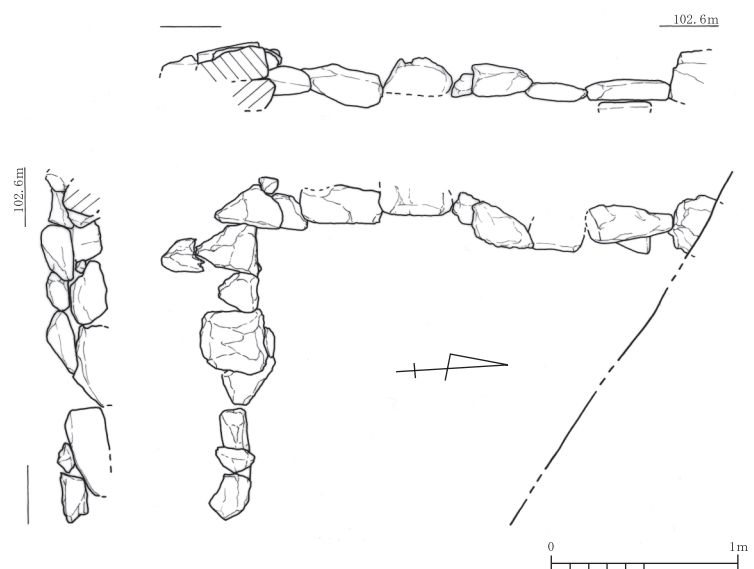


第20図 道具蔵跡 2-SX008 実測図 (1/60)

3) 石積遺構

2-SX018 (図版7、第21図)

第2次調査において調査区北側で検出された石積遺構で、北側部分は調査区外へと延び、西側部分は石が抜かれているため規模は不明である。石積みは現状で1～2段程度残っている状況で確認された。石材は花崗岩、流紋岩、片岩系のものが混在している。石積みの南北軸は座標北から2°西に振っている。この遺構の掘方については、明瞭でなく検出できなかった。『絵図』と照合すると、遺構の位置から「下仕廻所」に該当するので、この施設に係る遺構と推定される。



第21図 石積遺構 2-SX018 実測図 (1/40)

7-SX001 (図版 10、第 22 図)

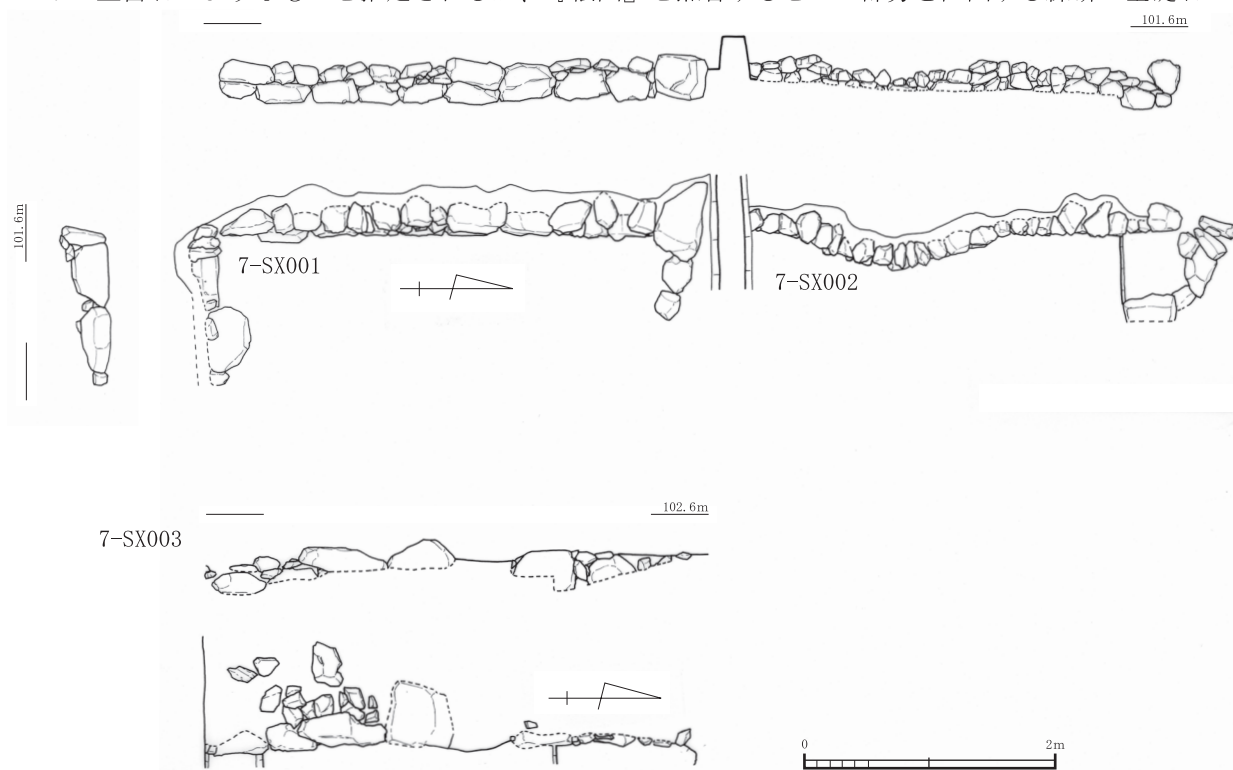
第 7 次調査調査区東側で検出された石積遺構で、石積遺構 7-SX002 と隣接する。石積みは現状で 2 段程度残っている状況で、概ね 1 段目に 40 cm×30 cm 程度の石を置き、その上に小ぶりの石を積んでいる。本遺構の石積みは南側で東側に直角に折れ、北側は北接する石組遺構 7-SX002 との接点に大きな石材を据え置いている。この北接する石積遺構 7-SX002 との接点に置かれた大きな石材の東側で、床面に入り込んだ 2 つの石が検出されたが、本遺構に係るものか否かは調査時において判断出来なかった。石積遺構の南北間は約 4.0m で、この南北軸は座標北とほぼ一致する。石積の石材は花崗岩や流紋岩が混在しており、全体的に白色系の石材を選んで使用していると考えられた。『絵図』と照合すると、遺構の規模や位置から「駕籠塀」に係る基礎石垣と推定される。

7-SX002 (図版 10、第 22 図)

第 7 次調査調査区東側で検出された南北に延びる石積遺構で、石積遺構 7-SX001 と隣接する。石積みは現状で 2～3 段程度残っている状況で、一部孕んでいる箇所も見受けられた。隣接する石積遺構 7-SX001 と比較すると、石材は全体的に小ぶりで、積み方もやや粗く、花崗岩、流紋岩、片岩等が混在している。石積みの北側は石材が転落して往時の姿を留めていないが、現状で石積みの南北間は約 3.7m、この南北軸は座標北とほぼ一致する。また、この転落した石材の一部に壁土と推定されるものが付着していた。『絵図』と照合すると、遺構の位置から「腰掛」と記されている外郭施設に該当するので、これに係る遺構とも推定される。

7-SX003 (図版 11、第 22 図)

第 7 次調査調査区西側の主屋御式台部分 (7-SB001) 南側で検出された石積遺構である。主屋が建っていた区画は周辺より 20～30 cm 程度高く盛土されているため、その範囲を区画し、保護するための土留石のようなものと推定されるが、『絵図』と照合するとこの部分を区画する練塀の基礎石



第 22 図 石積遺構 7-SX001～SX003 実測図 (1/60)

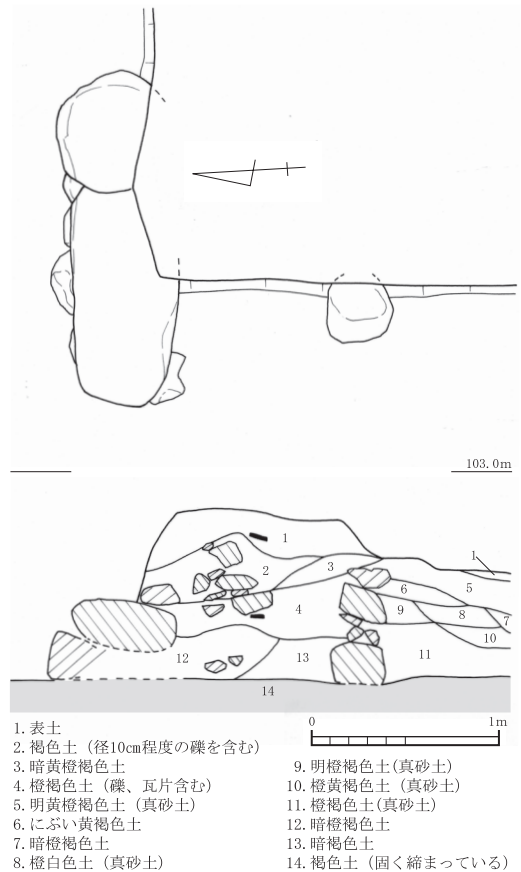
垣を兼ねていたとも考えられる。本遺構の石積みは東側に石面を有しているが、調査では石面の全てを検出しておらず、石面の前面には覆土がかぶったままの状況で調査を終えている。本遺構は御式台付近から南側に伸びるものと推定されるが、その南北軸は座標北とほぼ一致する。石材は花崗岩、片岩で、石面は石材を加工して平坦面をつくり出したものと自然の平坦面を利用したものが混在している。

4) 敷石遺構

7-SX005 (図版 11、第 23 図)

第 7 次調査調査区西側の北端において、畦畔を断ち割った際に検出された敷石遺構である。敷石は概ね 2 つの石材を用いており、幅 65 cm、厚さ 40 cm 程度の石材と幅 120 cm、厚さ 25 cm の板状の石材を合わせて構築されている。また、板状の石材の下には角礫を置いて安定させると共に隣り合うもう一つの石材との高さを調整している。石材はすべて花崗岩である。本遺構は、幅 1.75m、奥行き 0.55m、高さ 0.4m を測り、敷石の軸は座標北とほぼ直交している。

『絵図』と照合すると、遺構の規模や位置から「中門」付近に該当するので、これに係る敷石と推定される。中門は主屋の御式台北側から一旦北側に延びて東側へと直角に折れる練塀に開かれた北面する門であるが、本遺構の敷石が置かれている遺構面（第 23 図：土層 14 上面）が主屋部分の遺構面より約 40 cm 低い構造となっているため、中門付近では練塀基礎を約 40 cm 高くしていると想定される。そのため、中門において段差が生じるため、この部分にのみ敷石を設置しているものと想定された。土層断面の観察から土層 1～4 は畦畔部分、土層 5～11 は御茶屋廃棄後の後世の埋土（真砂土主体）、土層 12・13 は練塀基礎の盛土と判断した。



第 23 図 敷石遺構 7-SX005 実測図 (1/40)

5) 池跡

池跡 2-SX002 (図版 7、第 24 図)

第 2 次調査の際に調査区南西側で検出され、第 3 次調査において南限と南西隅が確認された。形状は南北に長い台形状を呈し、南北検出長 15.4m、東西検出長は最も長いところで 9.0m、深さは最も深い部分で 1.2m であった。土層の堆積状況より上層（1～25 層）、中層（26～38 層）、下層（39～41 層）に区分した。上層は瓦片や陶磁器類を多く含む土層の堆積状況から御茶屋廃絶後の埋土、中層以下はシルト層を主体としているため池の堆積土と判断された。中層より下位については、砂層（29・30・38 層）を境として中層と下層に分け、掘削作業と遺物の取上げをおこなった。出土

池跡 2-SX002



- | | | | |
|--------------------|----------------------|-----------------|-----------------|
| 1. 明褐色土 | 22. 褐色土 | 29. 黄橙褐色土 (砂層) | 36. 暗灰色土 (シルト層) |
| 2. 暗橙褐色土 | 23. 暗褐色土 (黄褐色土アマガ含ま) | 30. 黄白色土 (砂層) | 37. 灰褐色土 |
| 3. 明橙褐色土 | 24. 極暗褐色土 | 31. 明黄色土 (シルト層) | 38. 明灰色土 (細砂層) |
| 4. 褐色土 | 25. 明灰褐色土 | 32. 褐色土 (シルト層) | 39. 明灰色土 (シルト層) |
| 5. 明橙褐色土 | 26. 灰褐色土 (粗砂層) | 33. 明黄褐色土 | 40. 暗褐色土 (シルト層) |
| 6. 極暗褐色土 | 27. 暗黄褐色土 (シルト層) | 34. 明灰色土 (シルト層) | 41. 褐色土 (シルト層) |
| 7. 褐色土 (橙褐色土アマガ含む) | 28. 明灰色土 (シルト層) | 35. 明橙白色土 | |
- ※1~25層：近代以後の埋土、26~41層：自然堆積

流路跡 3-SD001 (第5次調査)



- | | | | |
|----------------------|----------------------|---------------------|--------------------|
| 1. 表土 | 15. 暗灰色土 (粗砂を多量に含む) | 22. 橙褐色土 | 29. 褐色土 |
| 2. 橙褐色土 (床土) | 16. 暗灰色土 | 23. 灰褐色土 (粗砂を多量に含む) | 30. 暗褐色土 |
| 3. 暗褐色土 | 17. 黒灰色土 (炭片を多量に含む) | 24. 黒褐色土 | 31. 褐色土 (灰褐色土を含む) |
| 4. 暗橙褐色土 | 18. 灰褐色土 (粗砂を含む) | 25. 黒灰色土 | 32. 褐色土 (粗砂を多量に含む) |
| 5. 暗灰褐色土 | 19. 明灰褐色土 | 26. 灰褐色土 | 33. 暗褐色土 (シルト層) |
| 6. 暗橙褐色土 (黄褐色土アマガ含む) | 20. 暗灰褐色土 | 27. 暗黄褐色土 | 34. 褐色土 |
| 7. 褐色土 (橙褐色土アマガ含む) | 21. 明灰褐色土 (粗砂を多量に含む) | 28. 明灰色土 | 35. 明青灰色土 (シルト層) |

第24図 池跡 2-SX002・流路跡 3-SD001 土層図 (1/80)

遺物は殆どが上層からの出土で、中層以下からの遺物の出土は稀少であったが、下層出土遺物よりこの池は17世紀前半頃に造られたものと考えられる。また、土層確認用のベルトと調査区西壁の崩壊を防ぐため池跡の南側のみ完掘し、北側は下層上面までの掘削とした。池の取水施設については不明であるが、排水については池跡の南東側から溝跡が東側へ延びており、これにより池の水位がある程度上昇すると自然に池外へ流れ出ていたと推定される。『絵図』に拠ると、この池は御茶屋の台所等といった家政向きの空間に近接しているため庭園等に付随する鑑賞用のものではないと推定される。

6) 流路跡

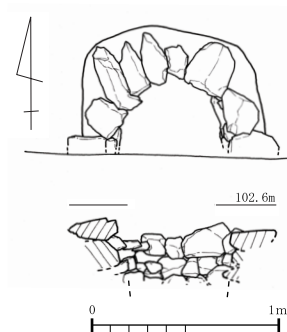
3-SD001 (図版8・9、第24図)

第3～5次調査において検出された御茶屋跡の南側を東西方向にはしる流路跡で、西側から東側へ傾斜している。そのため、第3・4次調査において各調査区の西側では後世の削平の影響を強く受け、遺存状況が悪く流路の検出幅が狭くなり、深さも浅くなっている。第5次調査において流路跡の断割り調査を行なった。北側(御茶屋側)の落込み上端から9.8m程南側までトレンチを拡張したが、南側の立ち上がりを確認出来なかったため、かなりの幅を有することが明らかとなった。深さについては御茶屋跡の遺構検出面から流路跡の底面まで0.5m程度で、御茶屋側に護岸施設は確認されなかった。御茶屋跡の南限を示す「物置(4-SB001)」、「材木小屋(4-SB002)」とこの流路跡の間は約5m程度で、御茶屋南側の練塀には南側へ抜ける戸口が『絵図』に描かれているため、この空間には通路があったと推定される。この流路跡は御茶屋廃止後に人為的に埋められたと考えられ、埋土中から瓦片、陶磁類や人頭大の礫が多く確認された。

7) 井戸状遺構

9-SE001 (図版13、第25図)

第9次調査の調査区中央において、検出された井戸状遺構である。規模として内径0.6m、掘方の平面プランは円形で径1.0m、井戸としては非常に小型のため井戸状遺構とした。覆土は完掘せずに、検出面より約0.3m下まで掘り下げたところで留めた。この井戸状遺構については、絵図』に描かれてなく不明な点が多い。ただし、「御水屋」と想定される部屋の南面にほぼ隣接して確認されたため、茶を立てる際に使用された井戸とも考えられる。

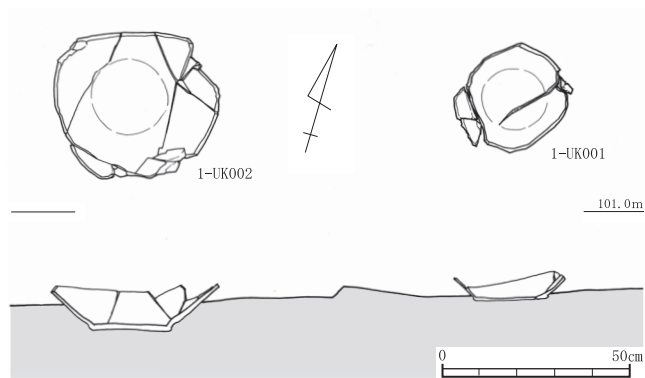


第25図 井戸状遺構
9-SE001 実測図 (1/40)

8) その他の遺構

1-UK001・UK002 (図版6、第26図)

第1次調査の3区から検出された大小2つの埋甕である。埋甕は瓦質土器の甕で、いずれも底部付近のみの残存で胴部より上位は削平されている。これら埋甕の掘方については、明確に分からなかった。2つの埋甕は現状で60cm程度離れて設置されており、両者の埋甕を比べると各々外底が19cm(1-UK001)と22.5cm(1-UK002)を測り、器壁の厚さも1-UK002が厚くなっていることから、大小の差が見受けられる。以上のことから、この2つの埋甕については便所跡(大・小)で、小が

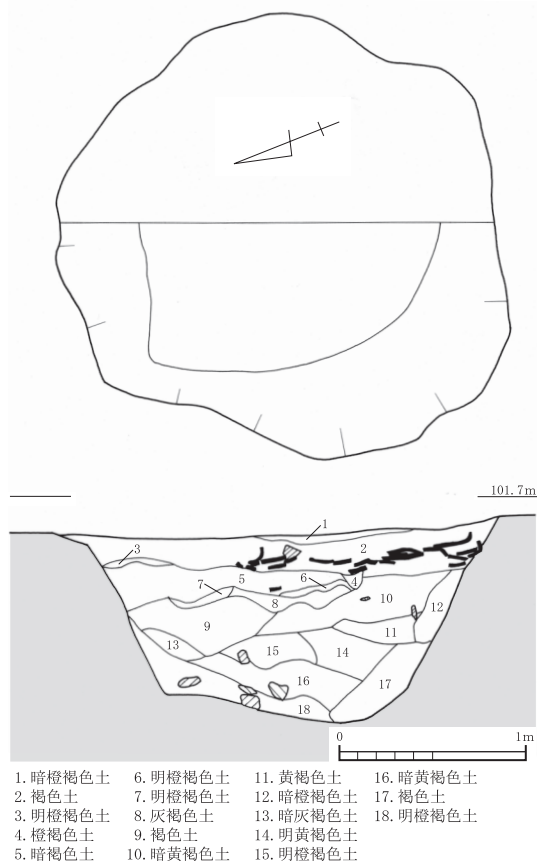


第 26 図 埋甕 1-UK001・UK002 実測図 (1/20)

1-UK001、大が 1-UK002 と推定された。この埋甕の並びは座標軸とも合致しておらず、『絵図』にも描かれていないため簡易な一時的なものとも想定される。

2-SX001 (図版 8、第 27 図)

第 2 次調査の調査区南東側から検出された土坑である。検出面での平面形態は不整円状で、径 2.3 m を測る。遺構の深さは検出面より約 1.0 m とやや深い。遺構の掘削については、西側半分のみを半裁するに留めた。上層より陶磁器と混じって瓦類が多量に出土した。後世の廃棄土坑とも考えられる。



第 27 図 土坑 2-SX001 実測図 (1/40)

3. 出土遺物について

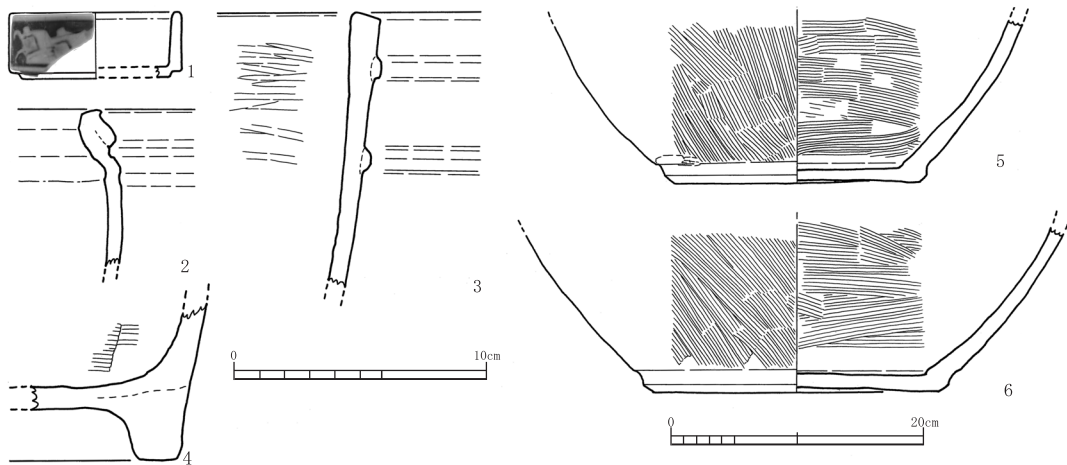
調査の目的が御茶屋跡の範囲と内容の確認であったため、遺構掘削は最小限に留めて検出に終始した。そのため出土遺物は遺構に明確に伴うものが殆どなく、一括性に乏しい。しかしながら、第2次調査において、整地層中から出土した陶磁器や池跡(2-SX002)下層出土の陶磁器などから御茶屋の成立時期を窺い知れる資料も確認されている。

以上のような調査状況であるが、本報告では土器・陶磁器類に関しては調査区別に、その他の瓦類・金属製品類・石器類・土製品などは種別毎に掲載することとした。なお、土器・陶磁器類については、観察表を掲載しているのので、付記すべき事項についてのみ記述する。

1) 土器・陶磁器類

第1次調査 (図版14、第28図)

1～4はいずれも表土等から出土したものである。1は色絵段重で、やや小型のものである化粧品入れであろうか。2は上野・高取系陶器片口の口縁部で、口縁部内外面は無釉で、他は灰釉が掛かる。3は瓦質土器の火鉢片である。内面調整はミガキ。4は土師質土器の焜炉もしくは火鉢の脚部である。5・6はそれぞれ1-UK001と1-UK002の埋甕である。いずれも瓦質土器の甕で、器面はよく燻され黒色を呈す。内外面の調整はハケ目である。内底の径、器壁の厚さを比べると、6(1-UK002出土)の方が大きい。



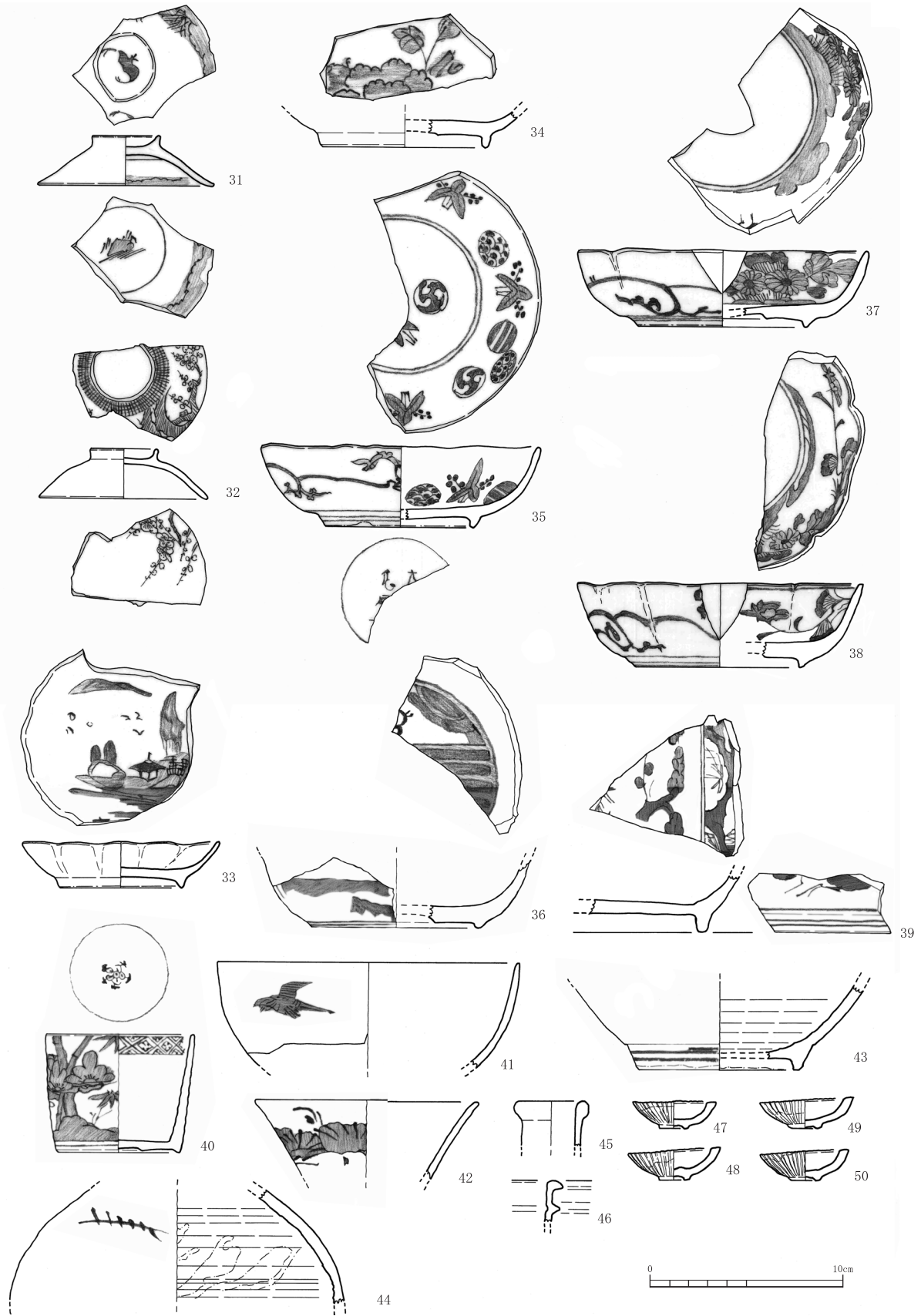
第28図 第1次調査出土土器・陶磁器実測図(1～4:1/3、他:1/6)

第2次調査 (図版14～17、第29～37図)

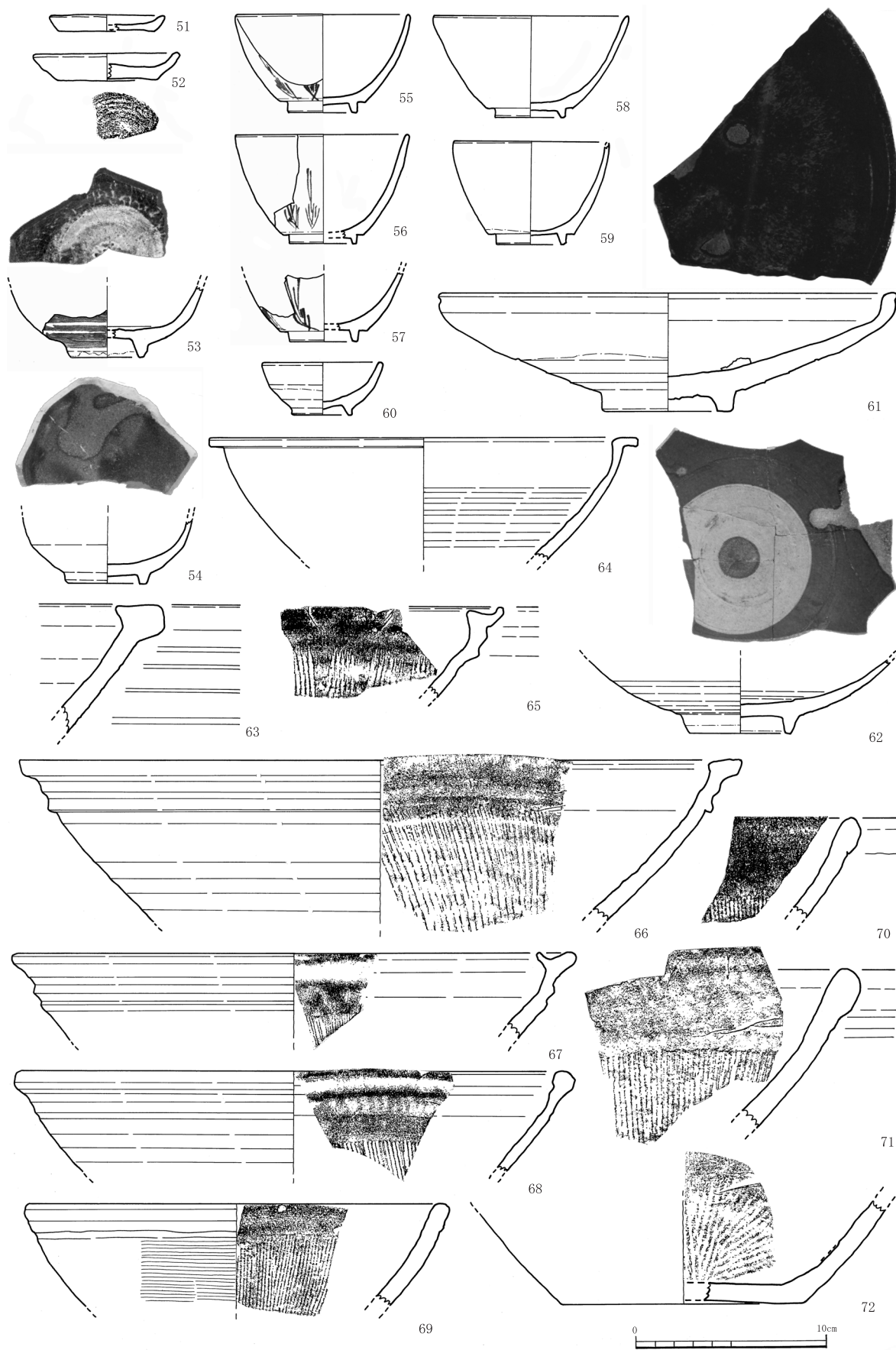
第29～33図は池跡2-SX002上層(一部、中層も含む)からの出土土器・陶磁器類で、池を廃棄する際の埋土に混入していたものと考えられる。土器・陶磁器類については、基本的に江戸時代後期のものが多く出土している。出土した磁器は肥前、陶器は上野・高取系のものが主流であるが、須恵焼の染付皿(第30図37・38)や外底に「一つ巴文」と「田」と判読される銘款が見られ田香焼の可能性が高い花生(第32図74)も出土しており、旧筑前国産や隣接する旧豊前国産の陶磁器類も僅かに出土している。なお、須恵焼の染付皿(第30図37)については底部の中央が欠損しているが、高台内の中央に一部呉須が僅かに残っており文字銘入りであった可能性が高い。



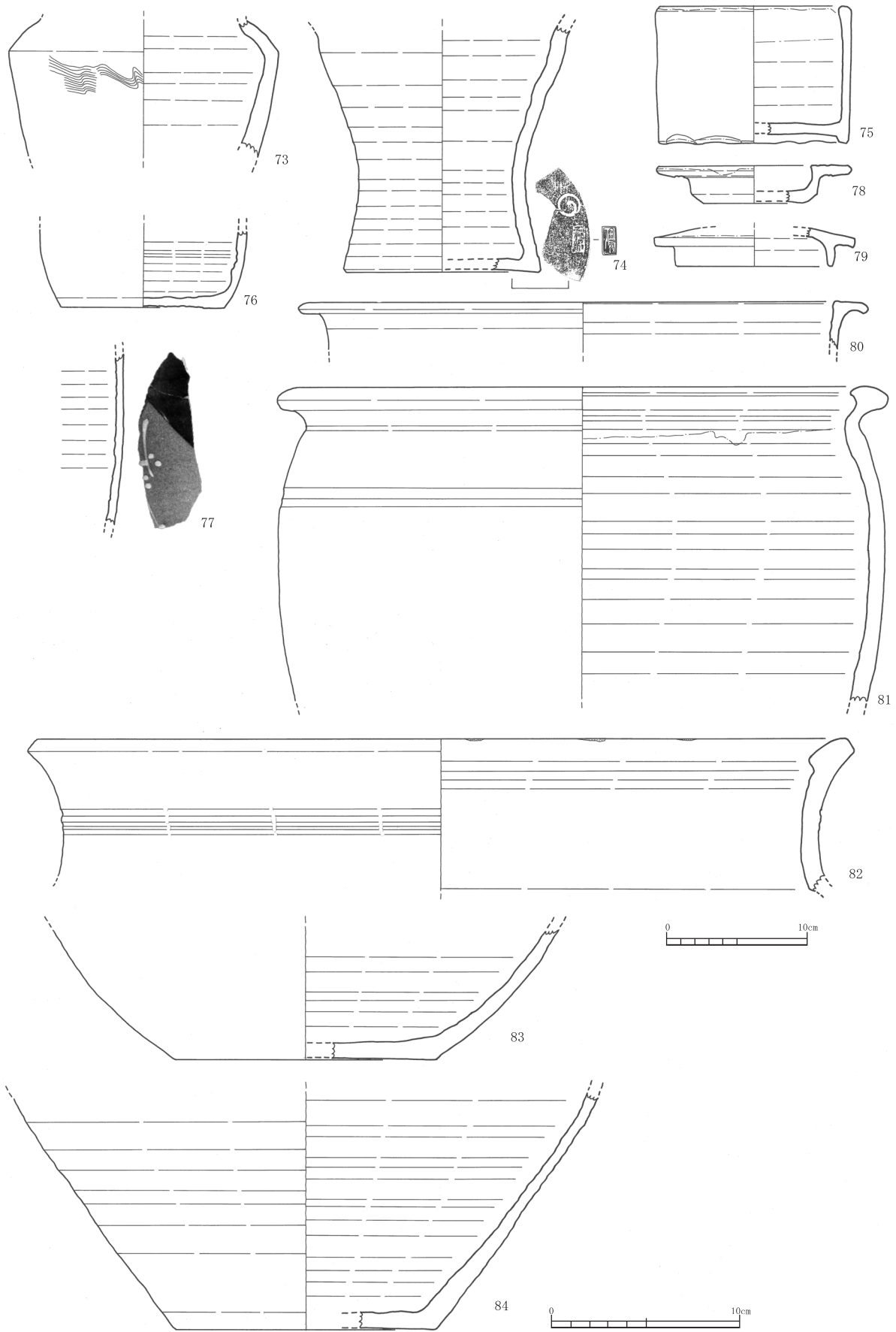
第 29 图 池迹 2-SX002 上層出土土器・陶磁器実測図 1 (1/3)



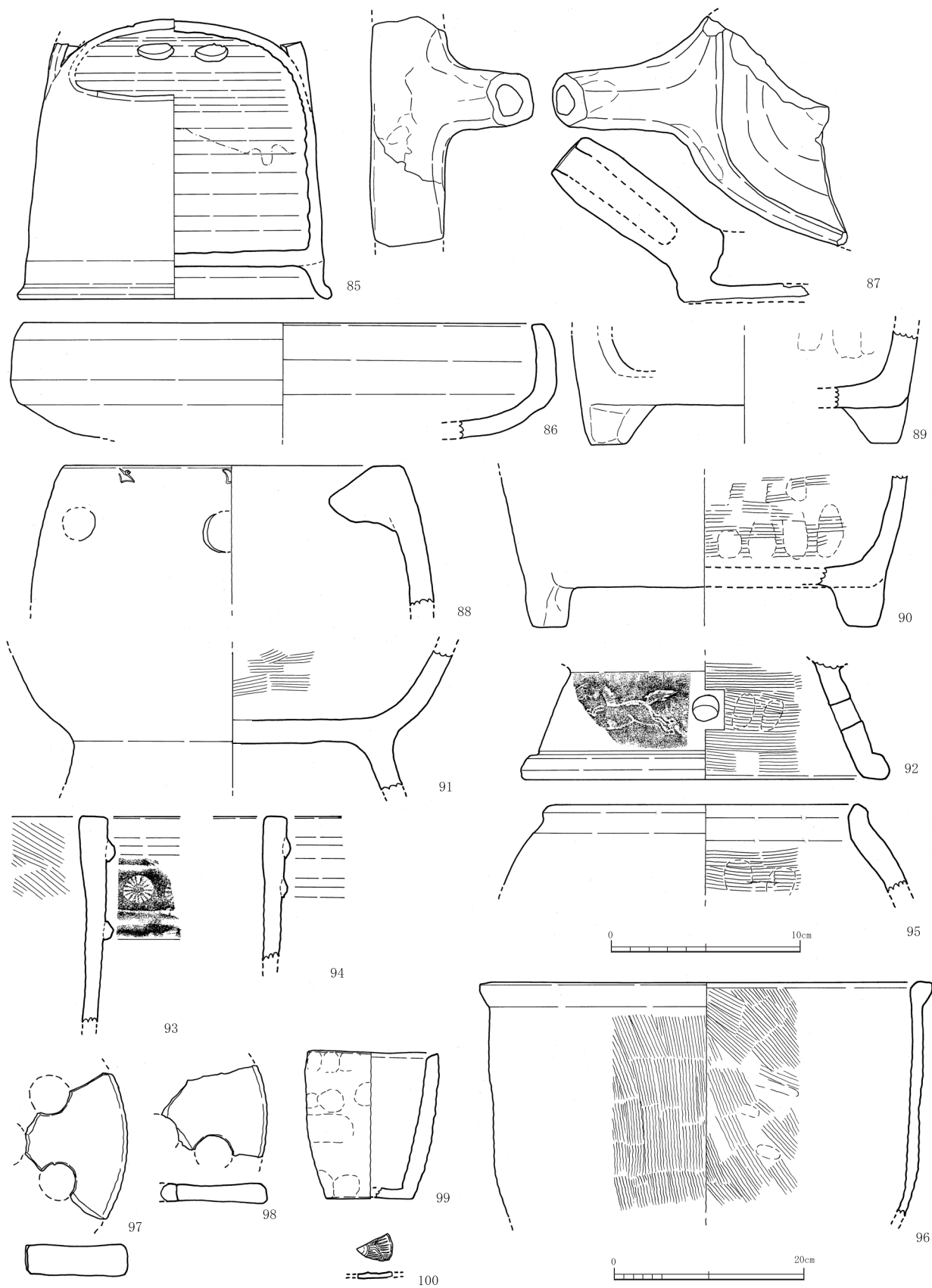
第30图 池迹2-SX002 上层出土土器·陶磁器实测图2 (1/3)



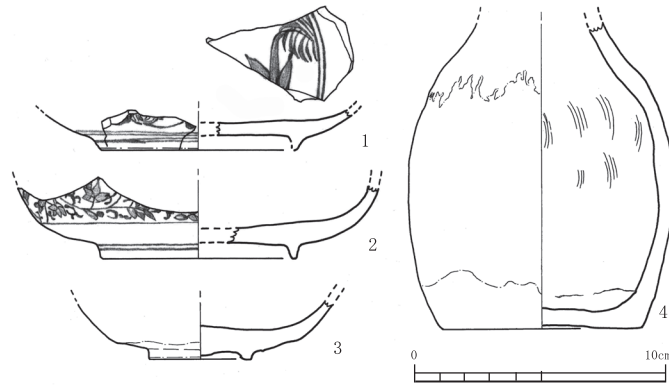
第31图 池跡2-SX002 上層出土土器・陶磁器実測図3 (1/3)



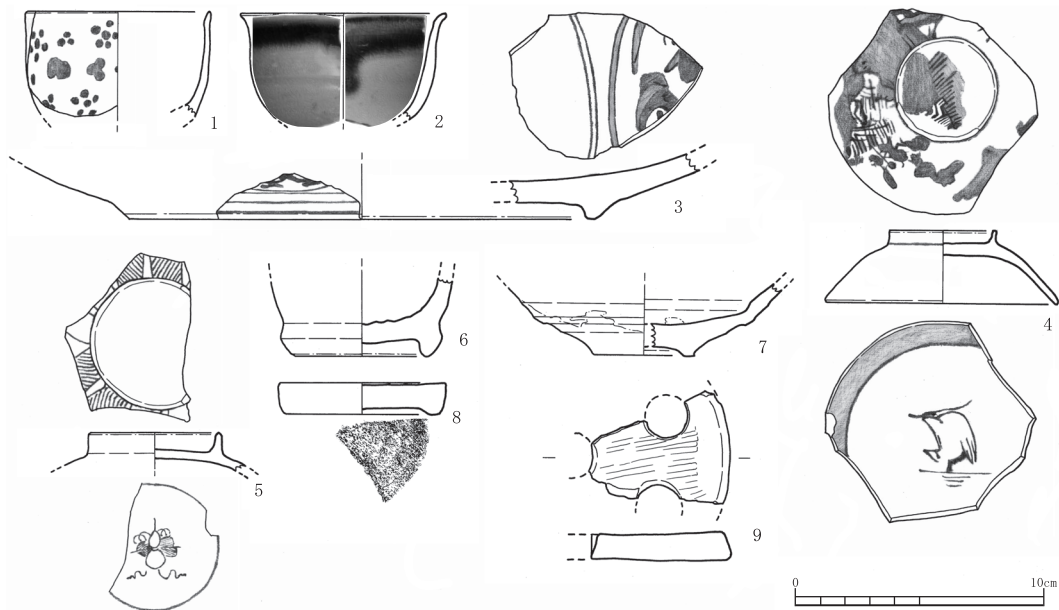
第 32 図 池跡 2-SX002 上層出土土器・陶磁器実測図 4 (82:1/4、他:1/3)



第33图 池跡2-SX002 上層出土土器・陶磁器実測図5 (96:1/6、他1/3)



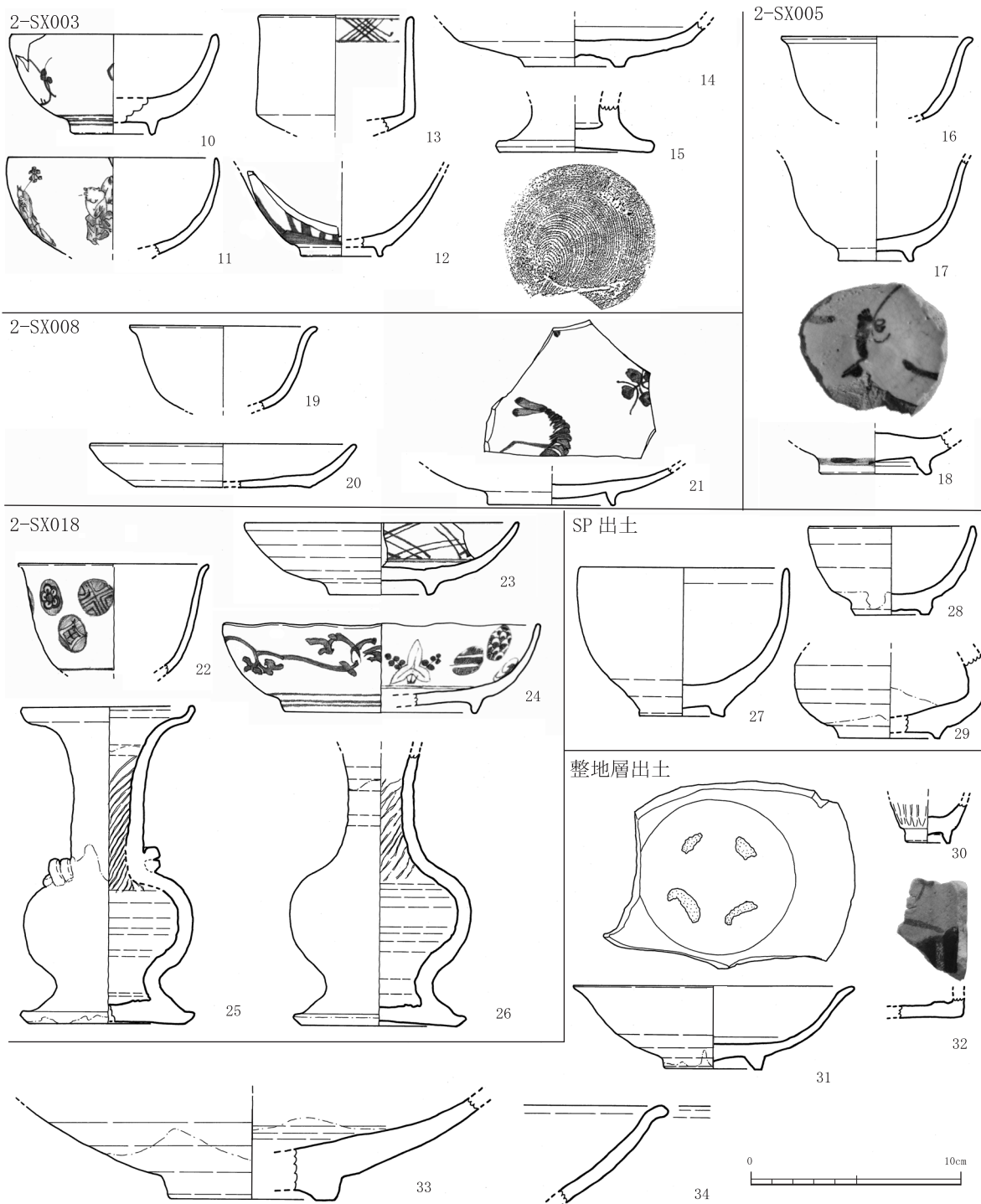
第34図 池跡2-SX002 下層出土土器・陶磁器実測図 (1/3)



第35図 第2次調査土坑等出土土器・陶磁器実測図1 (1/3)

第34図は池跡2-SX002 下層出土土器・陶磁器類である。1は明染付皿（景德鎮窯）で16世紀代のものである。2は肥前染付鉢で、18世紀代のものである。3・4は上野・高取系陶器の皿と瓶で、いずれも17世紀前半頃のものである。1は伝世品の可能性が高いと考えられるが、3・4からこの池跡については17世紀前半頃には既に築かれていたと推定される。

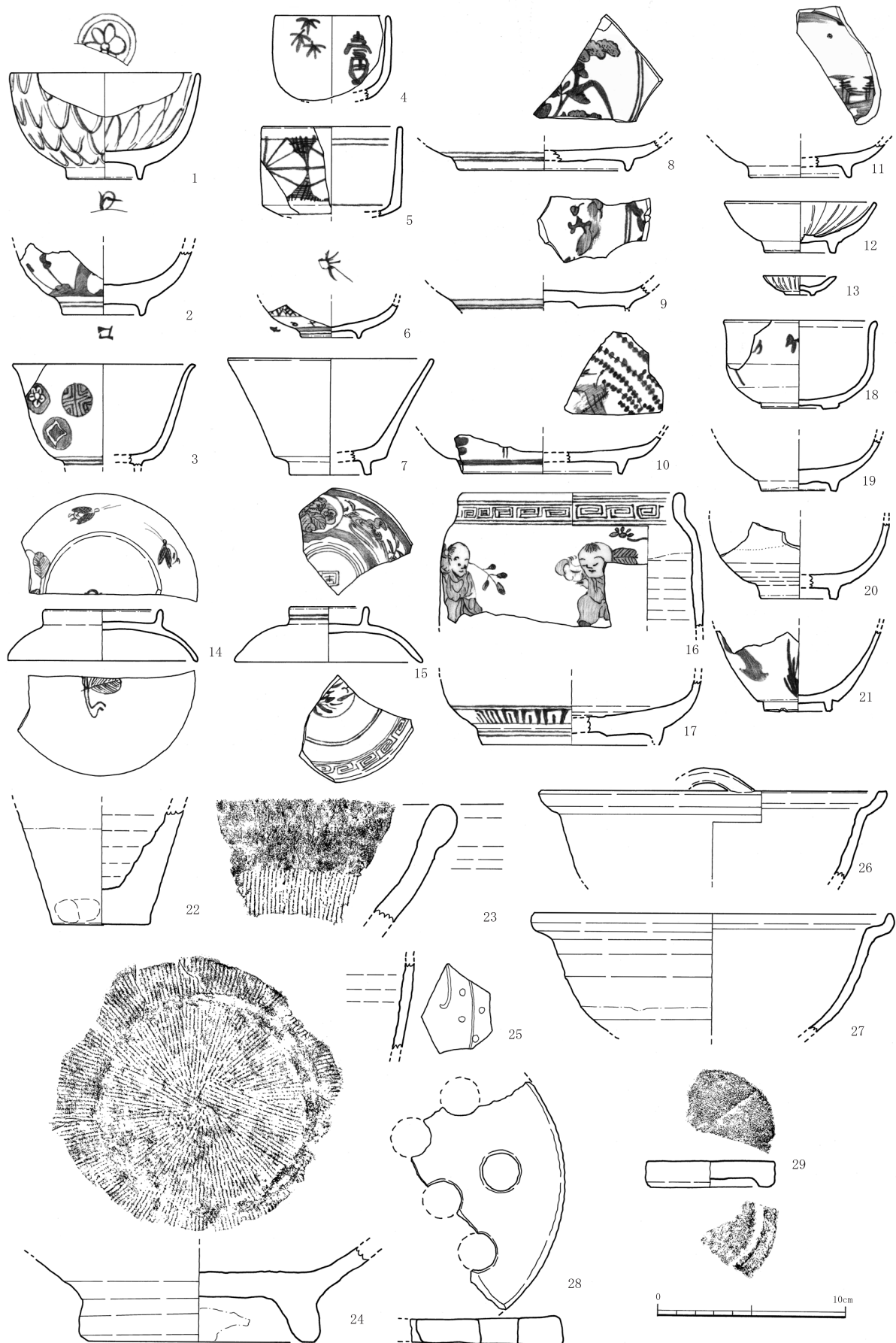
第35図と第36図10～29は、土坑・ピットから出土した土器・陶磁器類である。第35図は2-SX001から出土したもので、17世紀前半～19世紀代のものが見られる。その他の土坑から出土したもの（第36図10～26）も同じで、時期としては17世紀前半～19世紀代の土器・陶磁器類が出土している。これらは遺構に伴うものではなく、むしろ遺構を廃棄した際の埋土に含まれていたものと考えられる。その一方、ピットから出土したもの（第36図27～29）は、陶器のみであるが17世紀前半のもので占められる。27は上野・高取系の陶器碗で、内外面に鉄釉を全面施釉後、体部外面上位から内面に白色の藁灰釉を掛けている。高台内に僅かであるが兜巾が残っている。28は上野・高取系の陶器小碗で、内面と体部外面上位に緑褐釉を掛けている。高台内に僅かであるが兜巾が残っている。胎土の砂粒はやや多い。29は上野・高取系の陶器小壺で内底の一部と体部外面上位に藁灰釉が掛かる。これらピットの性格については不明であるが、出土した陶器類は御茶屋の成立時期を



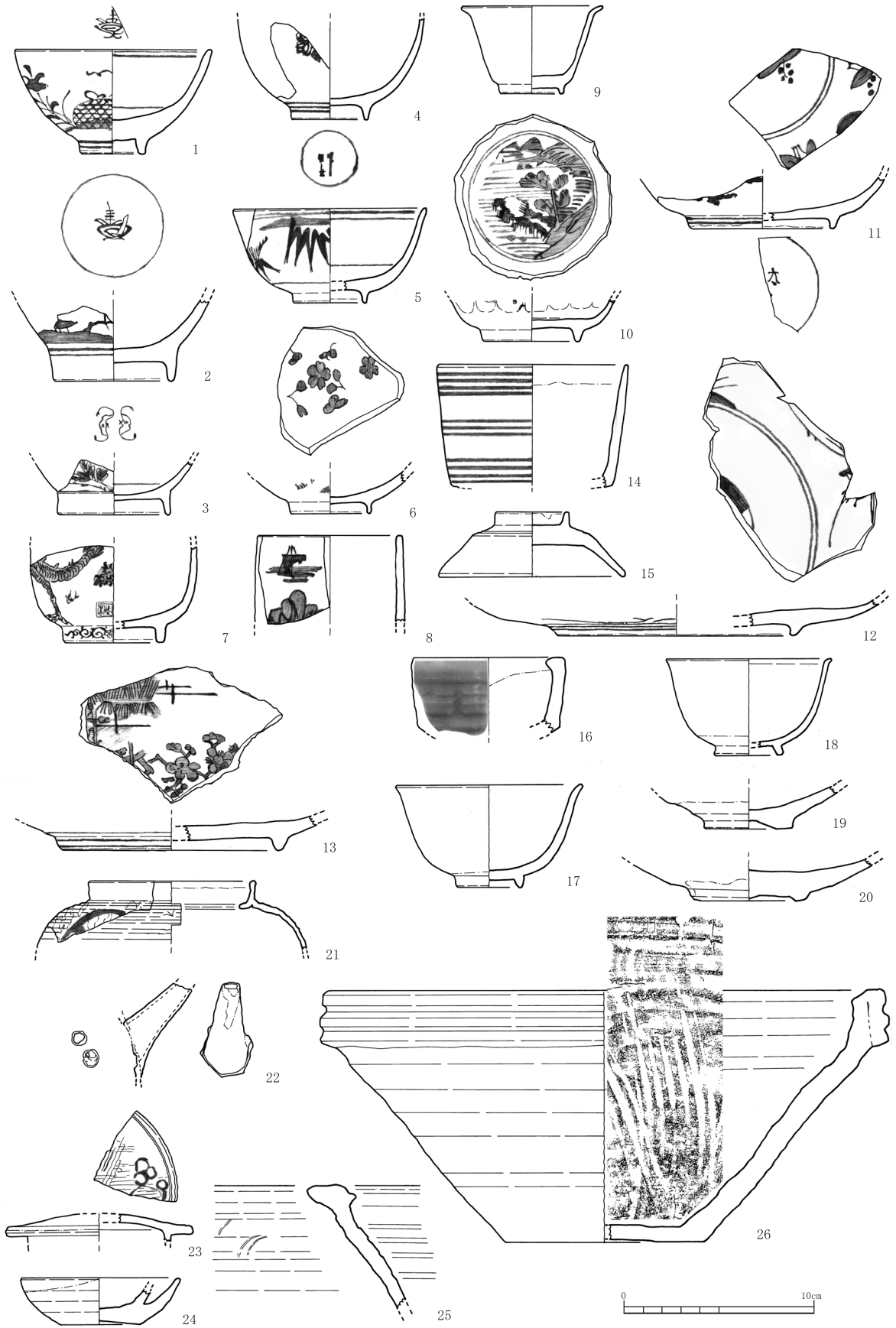
第36図 第2次調査土坑等出土土器・陶磁器実測図2 (1/3)

考える上での一助になりえると考えられる。

第36図30～34は整地層を断ち割った際(第2次調査1トレンチ)、整地層中から出土した土器・陶磁器類である。30は白磁小坏で、体部外面にヘラによる縦筋文が施されている。高台内に兜巾が見られる。31は陶器皿で、内外面に灰釉が施釉されている。高台内は露胎で、兜巾が見られる。見込みに砂目が4ヶ所見られ、内底と体部の境に段が見受けられる。32は織部の向付で濃緑釉と鉄絵文が見られる。見込みに布目痕が残る。33は上野・高取系の陶器大皿で、内外面に鉄釉を施釉後、藁灰釉を流し掛けしている。34は上野・高取系の陶器鉢で、内面と体部外面上位に褐釉が掛けられている。いずれも17世紀初頭～17世紀前半頃のもので、御茶屋の成立時期を知る上で貴重な資料である。



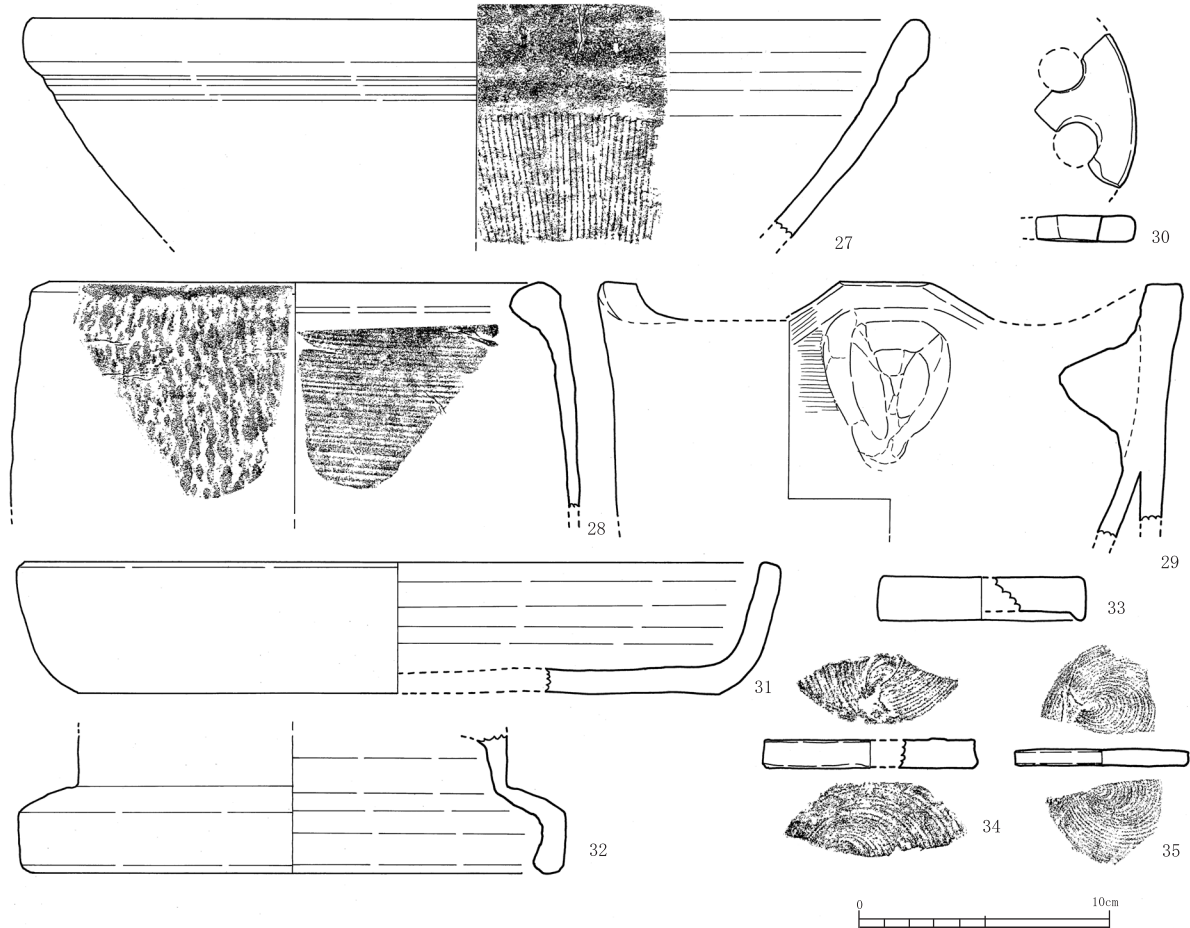
第 37 図 第 2 次調査その他の出土土器・陶磁器実測図 (1/3)



第38図 第3次調査出土土器・陶磁器実測図1 (1/3)

第3次調査（図版 17、第 38・39 図）

31～33 は流路跡 3-SD001 出土、それ以外はすべて表土等からの出土である。6 は色絵碗の底部である。見込みに桜文、体部外面には緑色で文様が描かれているが不明である。13 は肥前陶胎染付皿で、内外面に大きな貫入が入る。見込みには柴垣文と梅文がみられ、高台内には呉須による圏線が入る。16 は青磁香炉の破片、外面に算木文が施されている。体部内面は無釉。31 は土師質土器の焙烙。32 は瓦質土器の火鉢の脚台であろうか。33 は土師質で、焼塩壺の蓋であろうか、内外面ともに摩滅が著しい。34・35 はハマ。



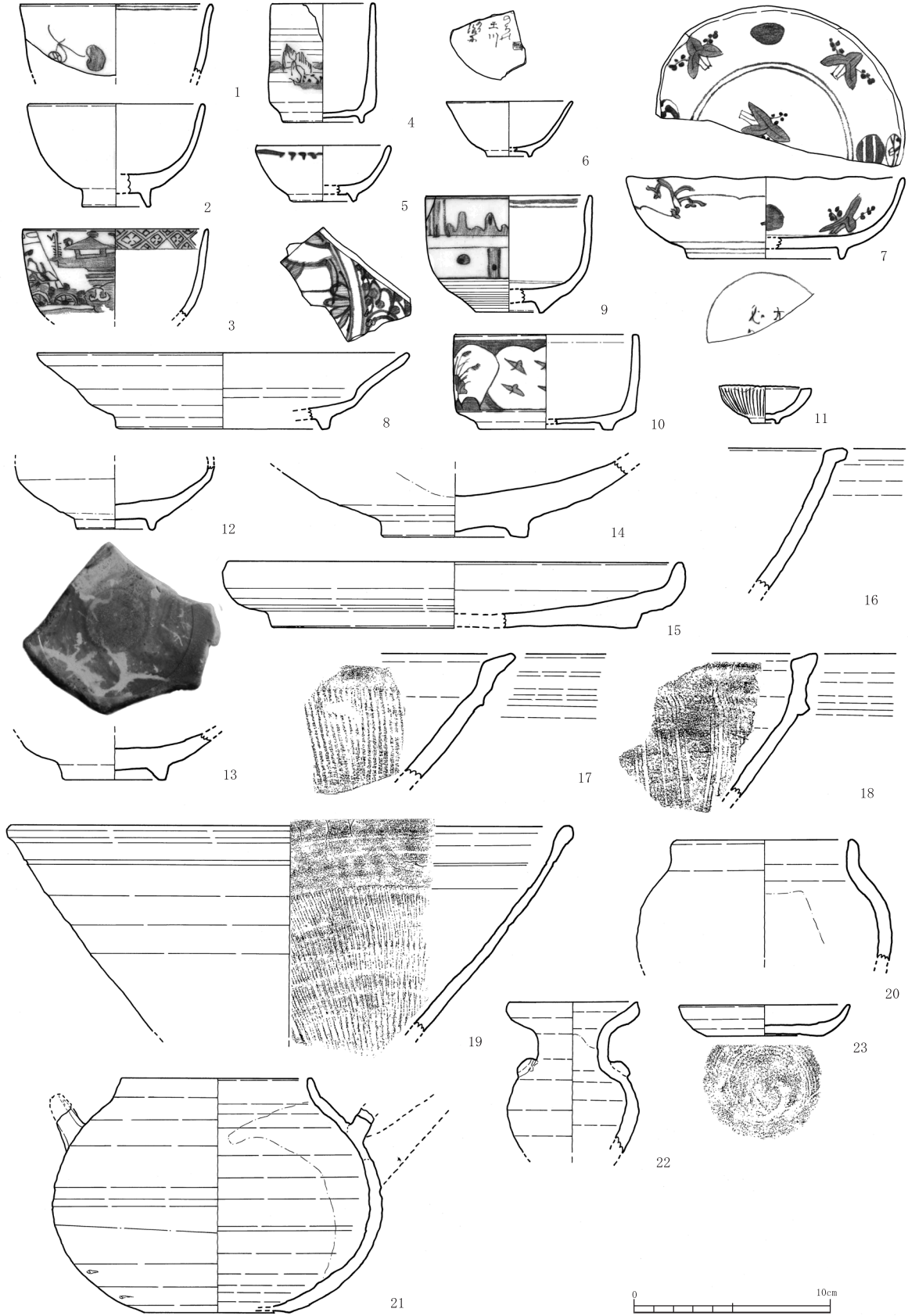
第 39 図 第 3 次調査出土土器・陶磁器実測図 2（1/3）

第4・5次調査（図版 17・18、第 40・41 図）

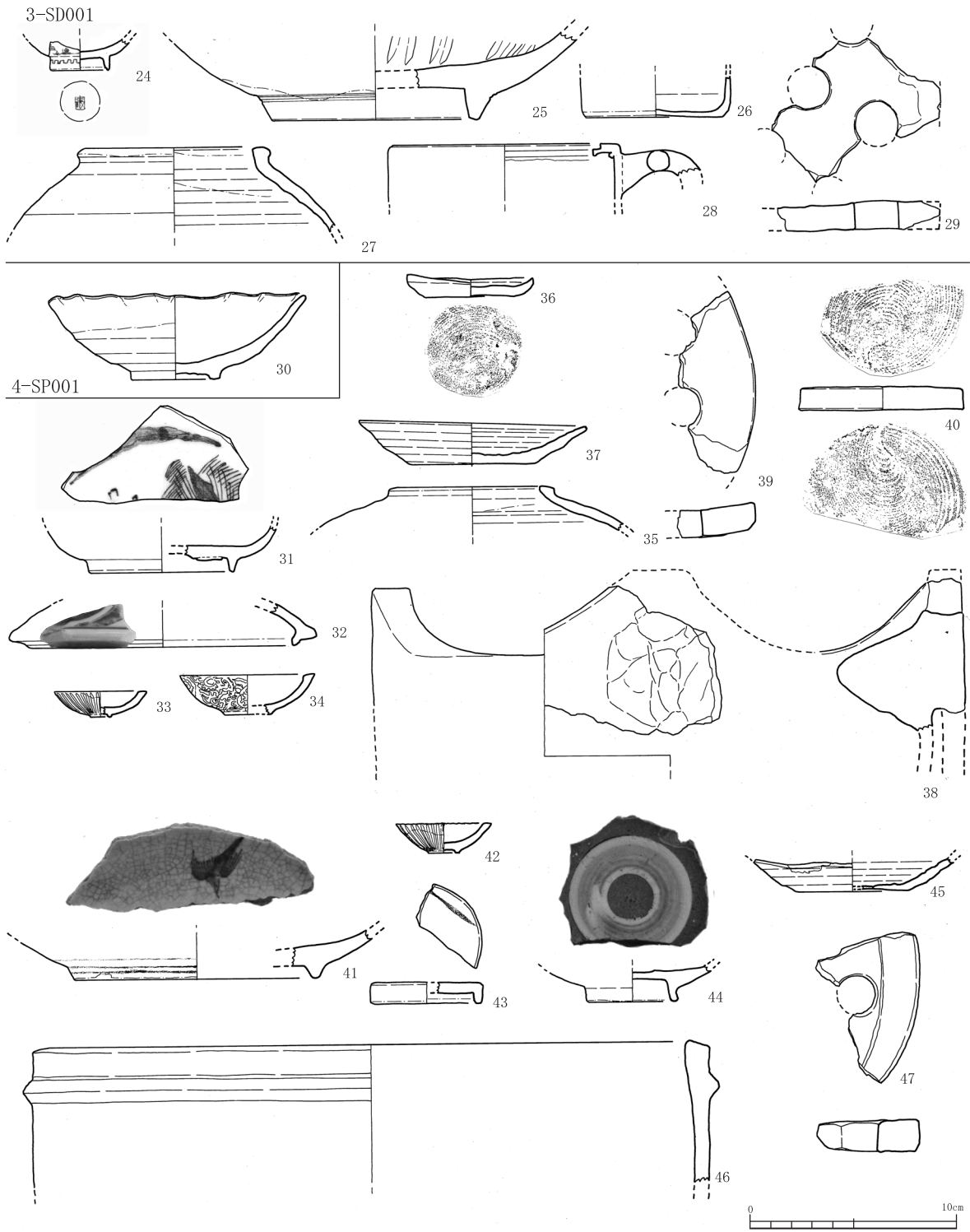
1～29 は流路跡 3-SD001 出土で、1～23 は第 5 次調査時、24～29 は第 4 次調査時に出土したものである。30 は 4-SP001 出土のものである。31～47 は表土等からの出土である。

流路跡 3-SD001 は御茶屋廃止後に人為的に埋められたと考えられるので、出土遺物はその際の埋土に混入していたものと考えられる。出土した土器・陶磁器類の時期は、17 世紀前半から 19 世紀代と時期的には幅広いが、17 世紀前半のものが一定量出土していることが分かる。これらの土器・陶磁器類については直接的に遺構に伴うものではないが、立地的に考えてもやはり御茶屋で使用され廃棄されたものと推定される。そのため、流路跡 3-SD001 出土の土器・陶磁器類の時期幅の上限は御茶屋の成立時期を示すものと推定される。

3-SD001



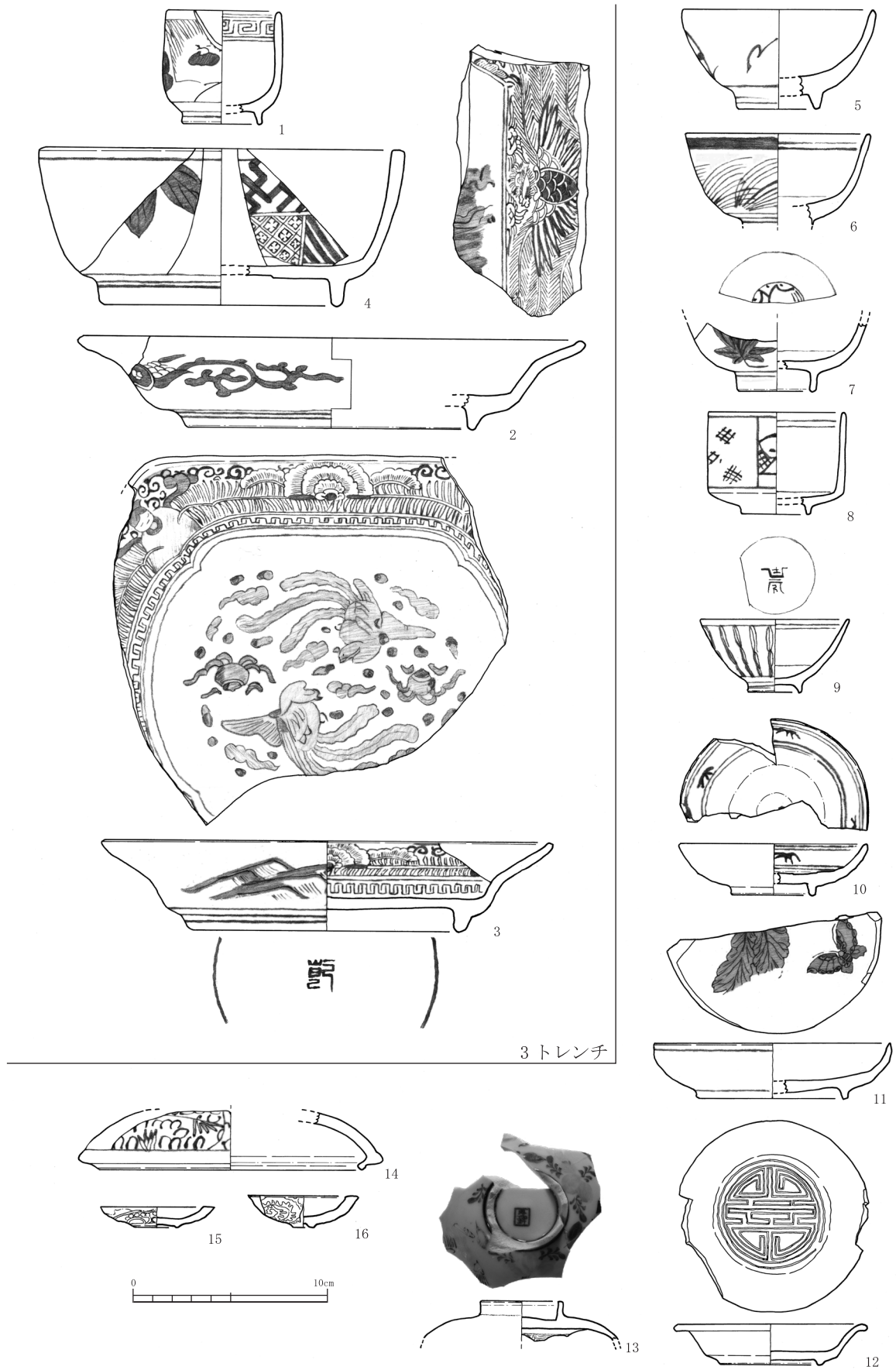
第40図 第4・5次調査出土土器・陶磁器実測図1 (1/3)



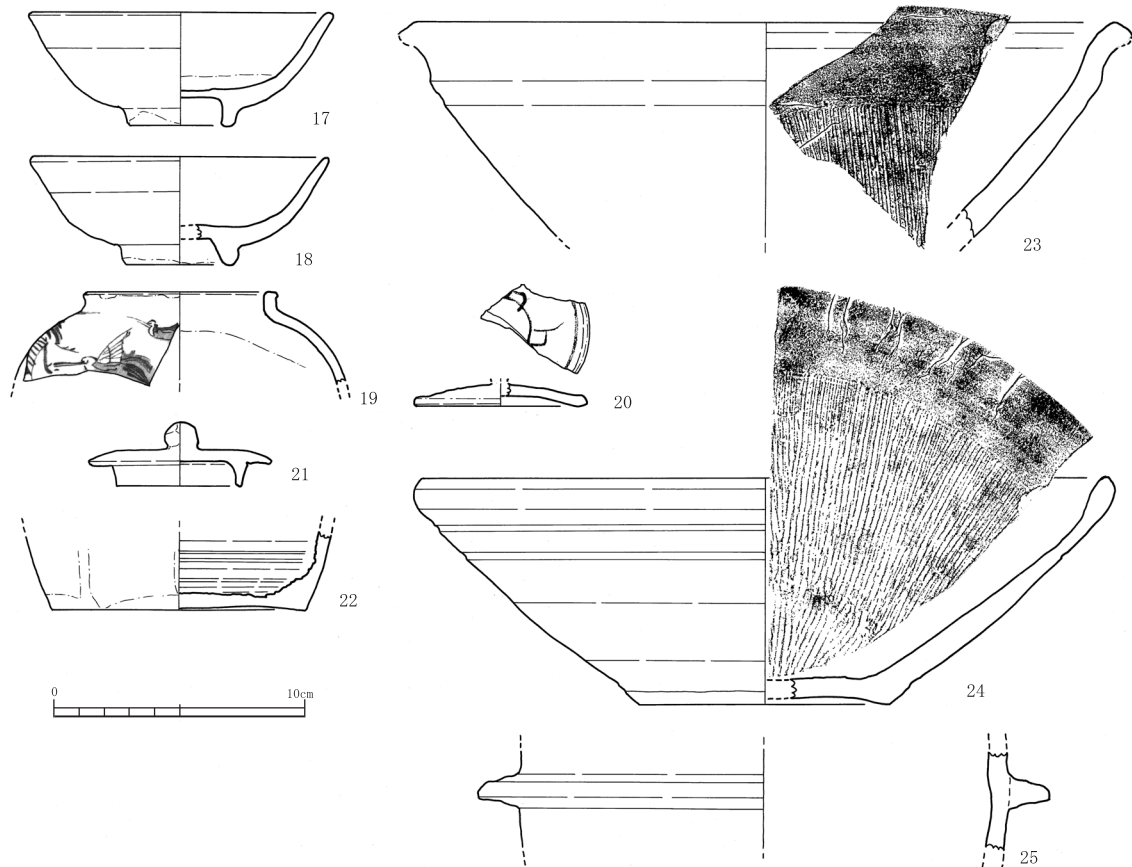
第41図 第4・5次調査出土土器・陶磁器実測図2 (1/3)

第7次調査 (図版18、第42・43図)

すべて表土等からの出土である。1～4は西側調査区の御式台南側に設定した3トレンチの7層(第14図)から出土したものである。2・3は染付角皿で、いずれも全面施釉で、畳付けのみ釉剥ぎを施している。3の高台内には「乾」の銘がみられる。



第 42 図 第 7 次調査出土土器・陶磁器実測図 1 (1/3)



第43図 第7次調査出土土器・陶磁器実測図2 (1/3)

2) 瓦類

発掘調査では、パンケース 60 箱程度の瓦類が出土した。出土した瓦は軒丸瓦、軒平・軒棧瓦、丸瓦、平瓦、棧瓦、目板瓦、雁振瓦、文字瓦で、ここでは種別毎に報告するとともにその種別の中で分類が出来たものについては、各分類を代表するものを抽出して記載する。

軒丸瓦 (図版 19、第 44 図)

軒丸瓦の瓦当文様については三巴文が主体で、それ以外の瓦当文様については藤巴文 (6) が 1 点出土したのみである。三巴文については巴文の尾の長さ・巻き方向、珠文数等で、以下のとおりに 4 つに分類できる。

- ・ I 類 (1・2) : 巴文 (尾長/左巻き) + 珠文 14。1 は第 9 次 2 トレンチ出土。2 は 7-SX004 出土。
- ・ II 類 (3) : 巴文 (尾中/左巻き) + 珠文 14。第 5 次表土等出土。
- ・ III 類 (4) : 巴文 (尾中/左巻き) + 珠文 9。第 7 次 1 トレンチ出土。
- ・ IV 類 (5) : 巴文 (尾長/右巻き) + 珠文 19。2-SX002 中層出土。

この三巴文を有する軒丸瓦については破片資料が多いため分類の難しい資料もあるが、分類可能なものは 14 点で、そのうち内訳は I 類 6 点、II 類 3 点、III 類 3、IV 類 1 点である。分類できる資料数が限られているが、主体となる軒丸瓦は I 類であろうと推定される。なお、I 類の 1 と 2 は同範である。6 は黒田家の定紋である藤巴を有するもので、藤巴は左巻き、中央に三枚の葉を配する。藤巴文瓦については 1 点のみの出土である。2-SX002 上層出土。

軒平・軒棧瓦 (図版 19・20、第 45 図)

軒平・軒棧瓦については瓦当文様の中心飾りにより、半裁花菱文、花菱文、桔梗文、梅文、下向三葉文、菊文、笹文と分類した。中心飾りが半分以上残存する資料で出土点数を集計すると、半裁花菱文 (5 点)、花菱文 (21 点)、桔梗文 (3 点)、梅文 (6 点)、下向三葉文 (3 点)、菊文 (2 点)、笹文 (1 点) となり、軒棧瓦は花菱文が主体という傾向が見受けられる。

1～4 は半裁花菱文を中心飾りに配し、その両脇に上向き唐草が 2 連続で施され、さらに第 1 唐草の上位と第 2 唐草の下位に子葉が施される軒平瓦である。軒平瓦はこのタイプのみである。1～3 は肉厚な半裁花菱文を有するのに対し、4 は瓦当文様が潰れ文様の凹凸が明瞭ではなく、瓦当の高さも低い。1・2 は 2-SX002 上層出土。3 は第 7 次表土等出土。4 は第 2 次表土等出土。

5～11 は花菱文を中心飾りに配し、その両脇に上向き唐草が 2 連続で施され、さらに第 1 唐草の上位と第 2 唐草の下位に子葉が施される。いずれも左棧瓦。本遺跡で最も多出するタイプで、さらに文様構成などから以下のとおり、3 つに細分される。

- ・花菱文Ⅰ類 (5) : 唐草と子葉がいずれも離れて配されて、線描も細いもの。
- ・花菱文Ⅱ類 (6～9) : 第 1 唐草の上位にある子葉と第 2 唐草の尾尻が接するもの。
- ・花菱文Ⅲ類 (10・11) : 脇区文様はⅡ類と同じだが、中心飾りが潰れ、唐草の頭部が球状となり、子葉も幅広となるもの。

5・7・8 は 2-SX001 出土。6 は 2-SX002 上層出土。9・10 は第 7 次表土等、11 は第 5 次 3-SD001 出土。

12 は桔梗文を中心飾りに配し、その両脇に 2 反転唐草を施し、さらに飛び唐草を施す。桔梗の五葉は星形の肉彫りで、僅かに花卉の芯が認められる。出土したこのタイプの軒棧瓦は左棧瓦で、外面は黒灰色を呈するが焼成が悪いため胎土は橙褐色である。出土量は少ない。2-SX002 上層出土。

13 は梅文を中心飾りに配し、その両脇に 2 反転唐草を施し、さらに子葉を施す。梅は線描である。このタイプの軒棧瓦は左棧瓦で、いずれも焼成不良のため内外面ともに胎土の色調が白色系を呈する。出土量は少ない。2-SX002 上層出土。

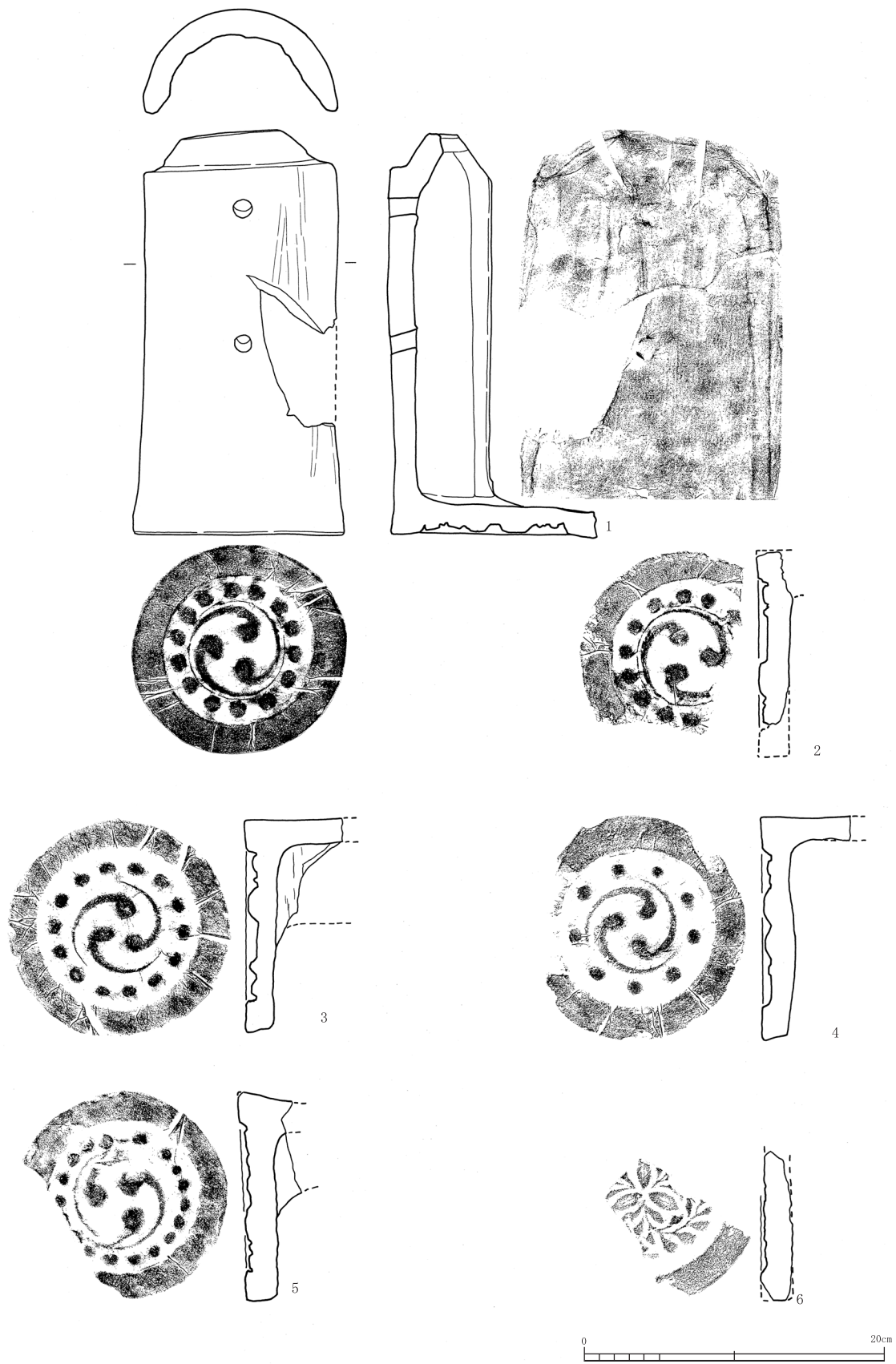
14 は下向三葉文を中心飾りに配し、その両脇に上向き唐草が 2 連続で施され、さらに第 1 唐草と第 2 唐草の間に線囲みの子葉が施される。このタイプも左棧瓦である。出土量は少ない。第 7 次表土等出土。

15 は菊文を中心飾りに配するもの。破片資料 2 点のみのため詳細は不明であるが左棧瓦である。2-SX018 出土である。

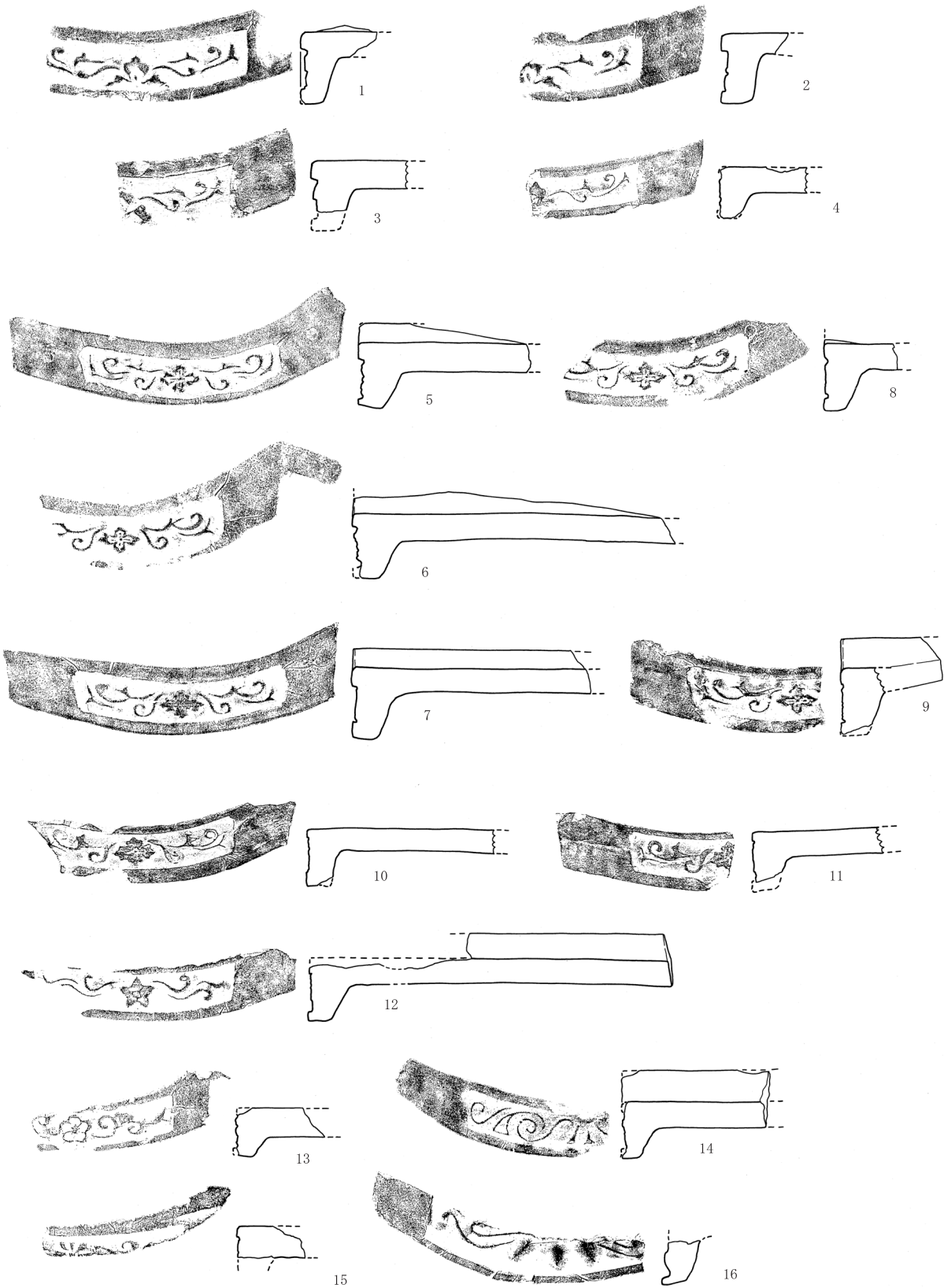
16 は笹文を中心飾りに配し、その両脇に 2 反転唐草を施すもの。破片資料 1 点のみの出土のため詳細は不明である。第 7 次 3 トレンチ出土。

丸瓦 (図版 20、第 46・47 図)

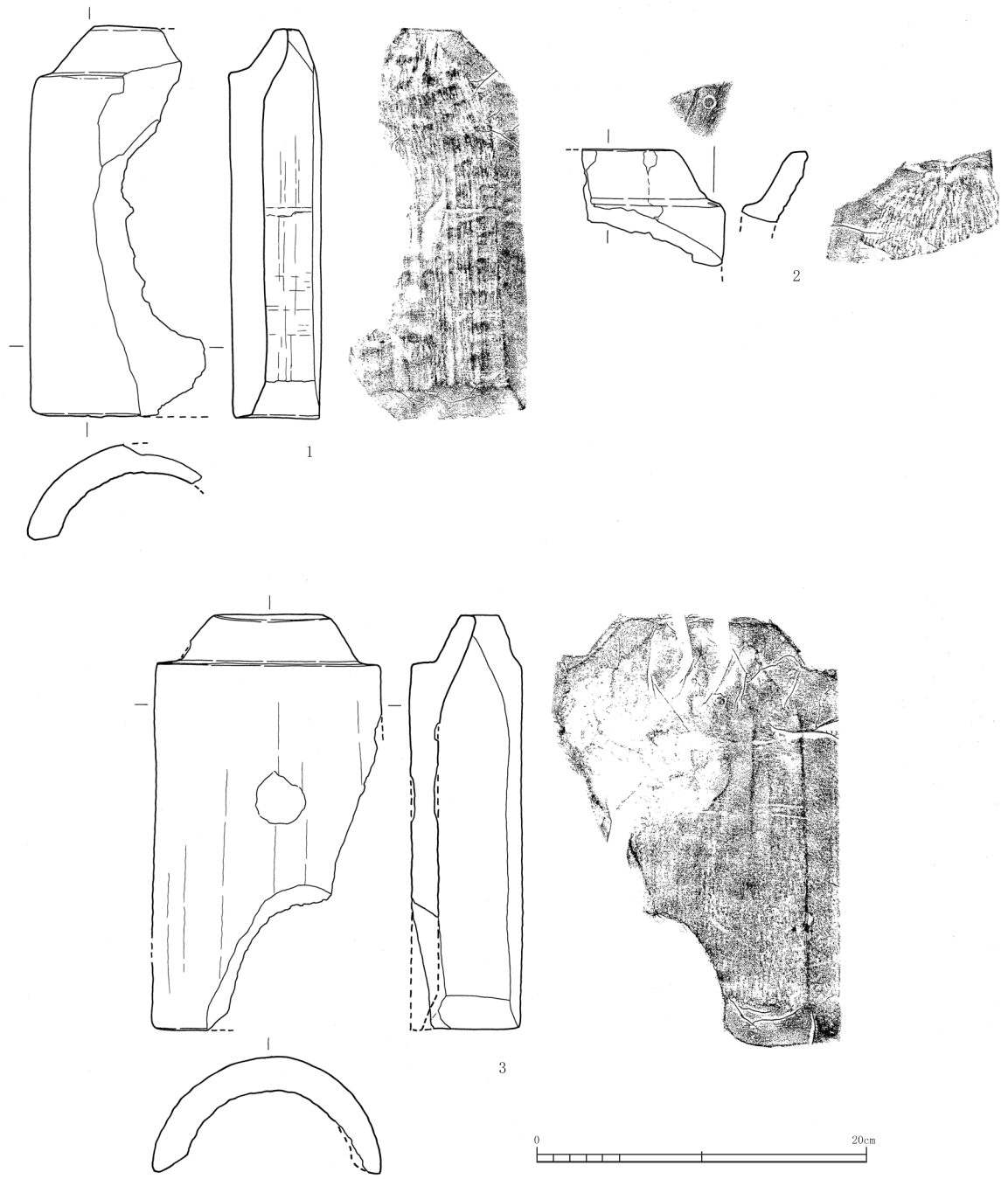
丸瓦については完形に近い資料が少なく、調整方法や法量の差で分類を試みたが困難で、分類番号を付けるには躊躇われた。そのため、ここでは一応分類した中で、完形資料に近いものを中心に報告するに留めておく。1・2 は上方からみると体部と玉縁の境がやや不明瞭で、玉縁の側縁部・端部の面取りが見られないタイプ、いずれも第 7 次表土等出土。1 は一方の側面を欠く。全長 23.4cm で、他の丸瓦と比べるとやや小さい。凹面はコビキ B の痕跡が明瞭で、ゴザ目痕がみられる。2 は玉縁の破片。体部と玉縁の境の段外面に「○」の刻印を有する。3 は玉縁の側縁部に面取りを施す



第 44 図 軒丸瓦実測図 (1/4)

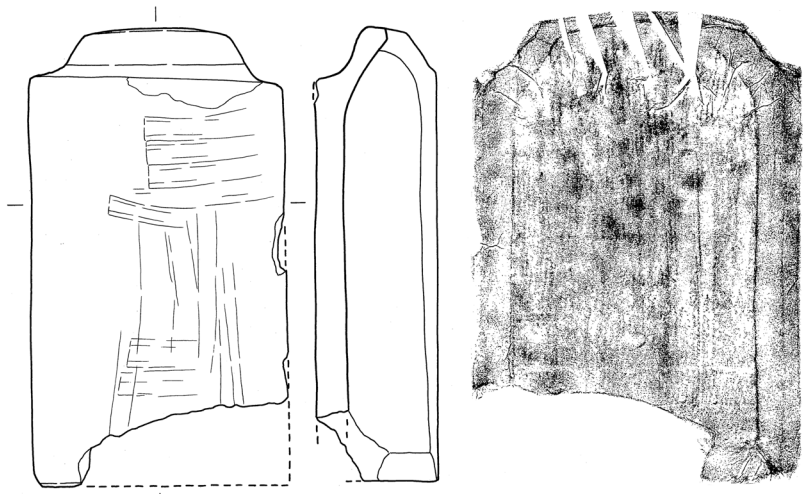


第 45 図 軒平・軒棧瓦実測図 (1/4)

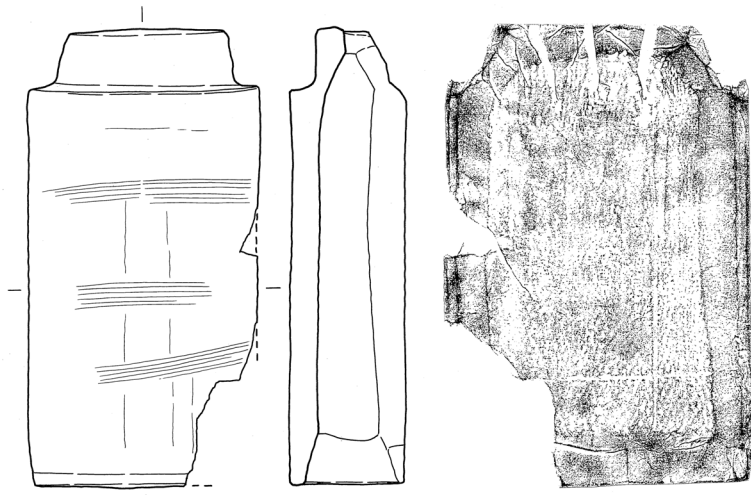
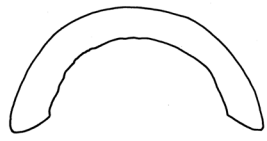


第46図 丸瓦実測図1 (1/4)

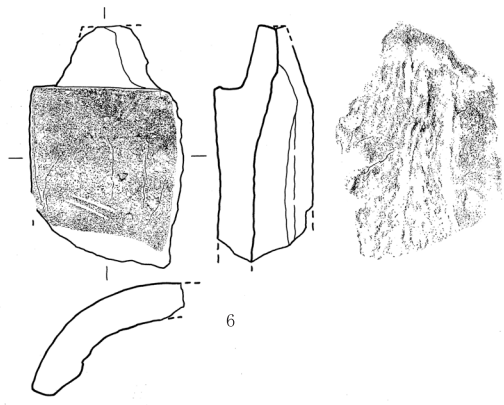
が、端部には施さないタイプ。全長 25.0cm で、体部の前端部の一部を欠く。凸面には縦方向のナデ、凹面にはコビキBの痕跡、粗い編み物の痕跡、幅広い縦方向の圧痕がみられる。2-SX001 出土。4・5は玉縁の側縁部・端部ともに面取りを施すものであるが、玉縁端部の面取りの幅が狭いタイプ(4)、玉縁端部の面取りの幅が広いタイプ(5)に細分できる。4・5ともに全長 24.6cm、凸面に横方向のナデを部分的に施す。凹面にはコビキBの痕跡、粗い編み物の痕跡、縦方向の圧痕がみられる。4は第7次表土等出土。5は2-SX002 出土。6は分類不可能な破片資料で、体部外面に「二」の篋書きを有する。これ以外に2点確認されている。第8次攪乱土出土。



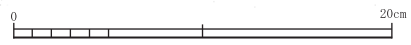
4



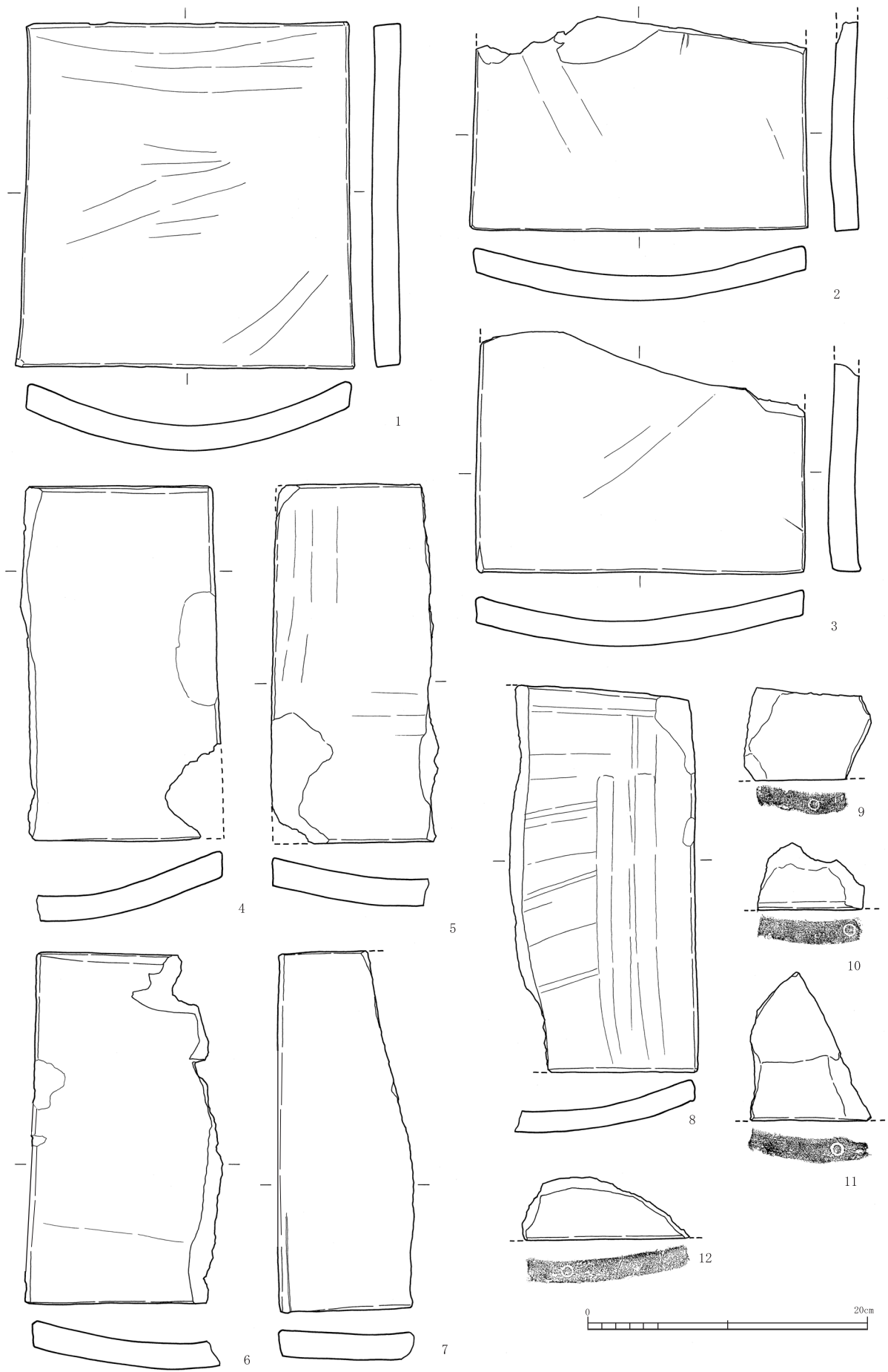
5



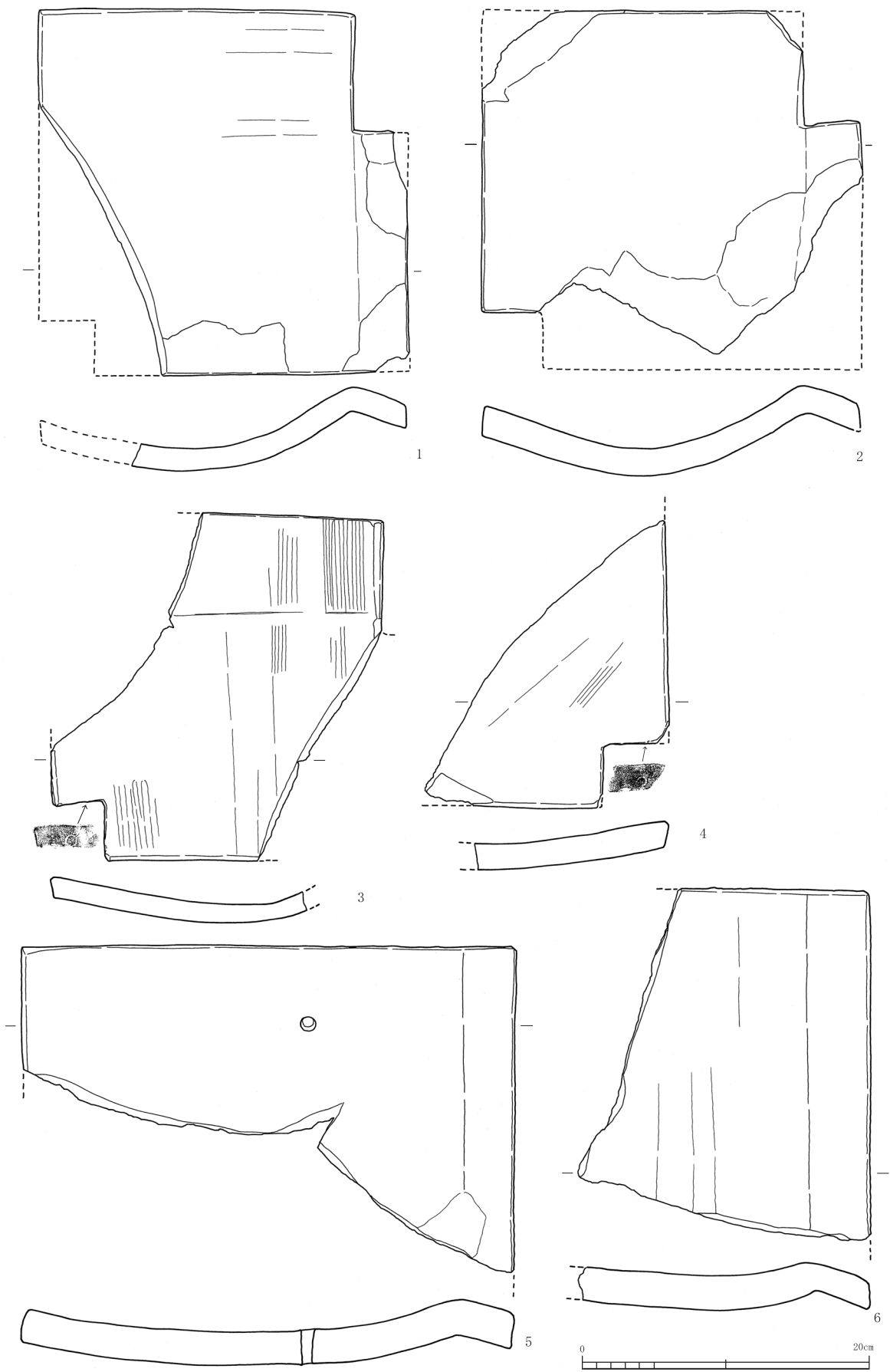
6



第47图 丸瓦実測图2 (1/4)



第 48 图 平瓦实测图 (1/4)



第 49 図 棧瓦実測図 (1/4)

平瓦 (図版 20、第 48 図)

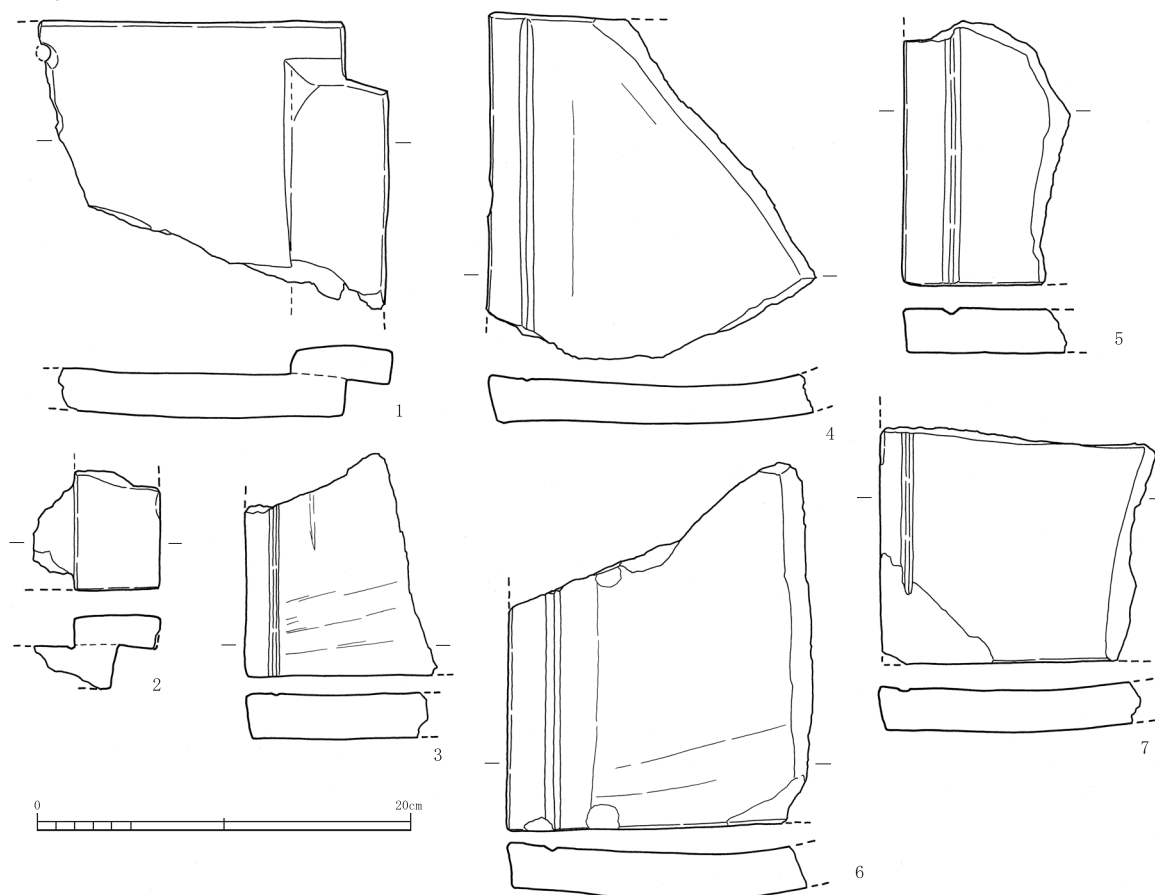
1 は平瓦の完形品で、広端幅 24.0cm、狭端幅 22.8cm、長さ 24.4cm、厚さ 1.9cm を測る。重量 1.75g。狭端の小口部分の凹部のみ面取りを施す。2-SX002 出土。4～8 は熨斗瓦であろうか。平瓦が縦半分に分れたものである。4～7 は長さ 25cm 前後、8 は長さ約 27cm である。4・6 は第 7 次表土等、5 は 3-SD001、7 は第 5 次表土等、8 は第 8 次攪乱土出土。9～12 は小口部分に「○」の刻印を有するものである。9・10 は第 7 次表土等、11 は第 1 次表土等、12 は 2-SX002 出土。

棧瓦 (図版 20、第 49 図)

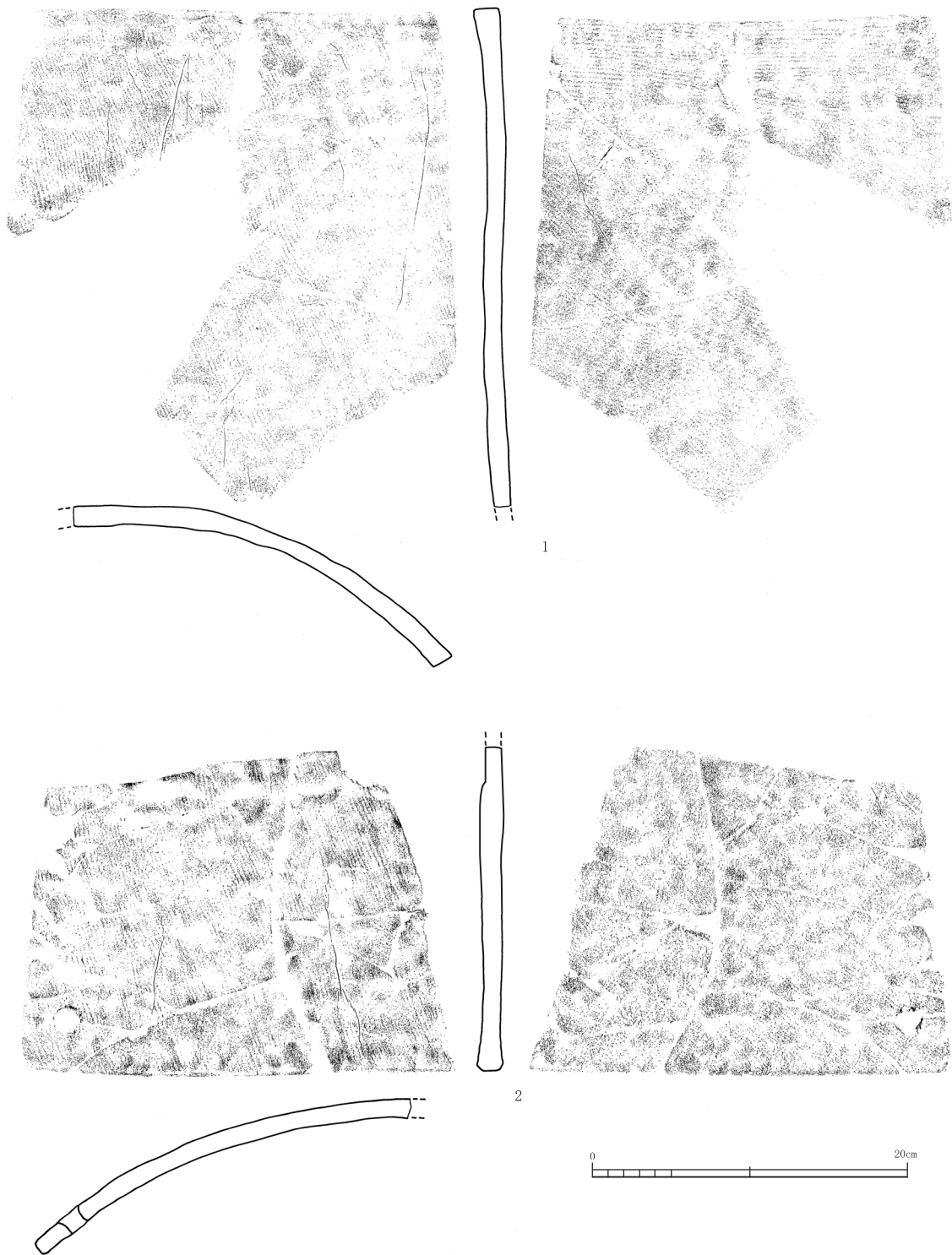
1～3 は平部、棧部ともに切り込みを設けるもので、左棧瓦である。棧部の方が切り込みは長いようである。1 は全長 25.0cm、推定全幅 25.4cm。2 は推定全長 24.6cm、全幅 26.2cm。3 の棧部は失われているが、平部の切り込みの小口に「○」の刻印を有する。いずれも 2-SX002 出土。4 は平部の切り込みのみが確認できる破片資料であるが、切り込みの位置から右棧瓦のものと推定される。第 7 次表土等出土。5・6 は大型の棧瓦で、塀瓦であろうか。このタイプは出土量としては少ない。5 は全幅 34.0cm、厚さ 2.4cm を測り、釘穴を有する。第 1 次表土等出土。6 は 3-SD001 出土。

目板瓦 (図版 21、第 50 図)

目板瓦は塀などの屋根に葺かれるものである。1・2 は板状瓦の側面に棧（目板）が残るもの。4～7 は棧（目板）が付けられる反対側の側面部に当たる破片で、いずれも一条の沈線が入れている。1・5 は第 2 次表土等、2 は 3-SD001、3・6 は 2-SX002、4・7 は第 1 次表土等出土である。



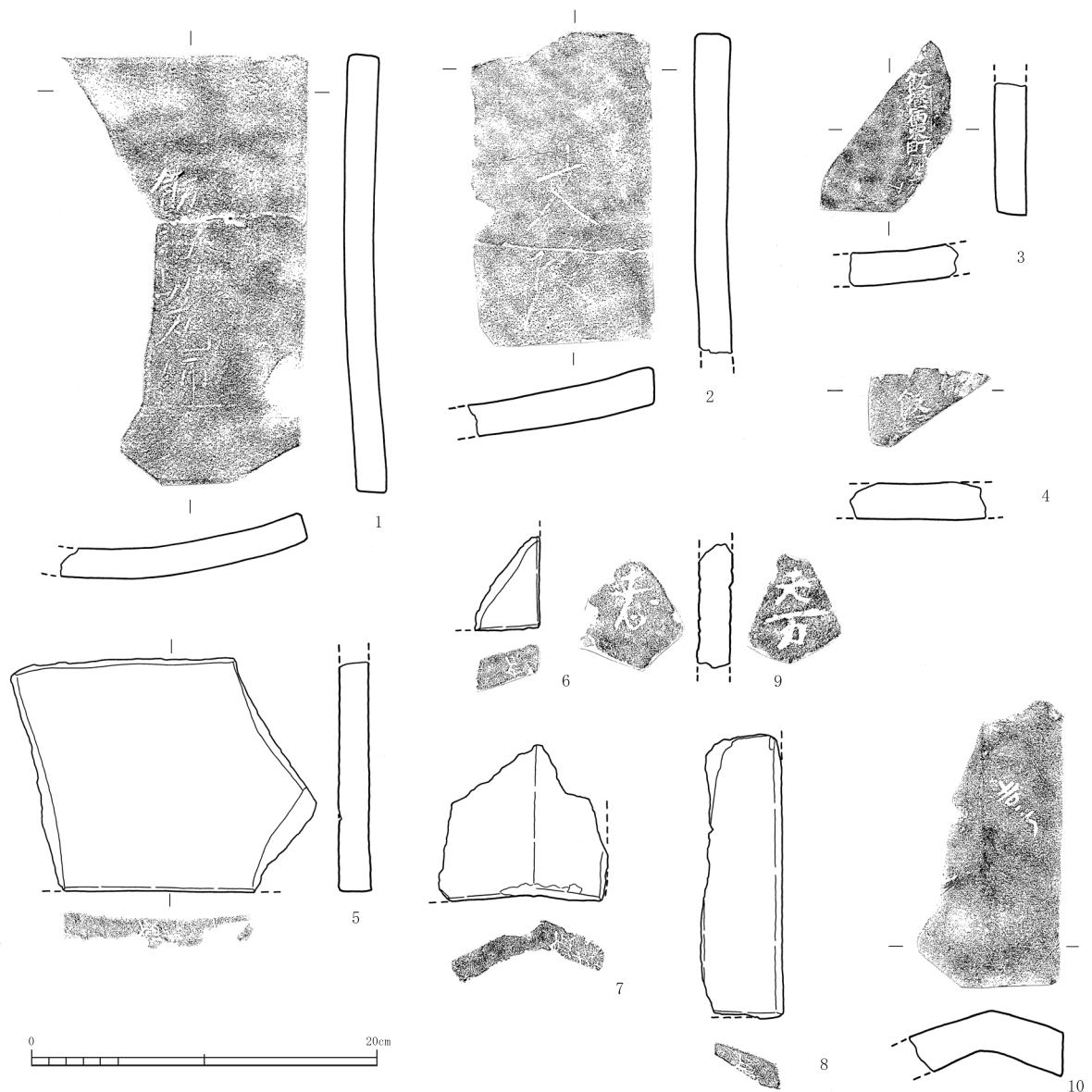
第 50 図 目板瓦実測図 (1/4)



第51図 雁振瓦実測図 (1/4)

雁振瓦 (図版 21、第 51 図)

雁振瓦は茅葺き屋根の棟に乗せるように葺かれた土師質もしくは瓦質の瓦で、凸面を上面、凹面を下面にして用いられる。1・2ともに凹凸面に粗い刷毛目が見られ、凸面の小口端部を肥厚させている。2は隅部に穴が穿かれている。1は2-SX003出土。2は第1次表土等出土。



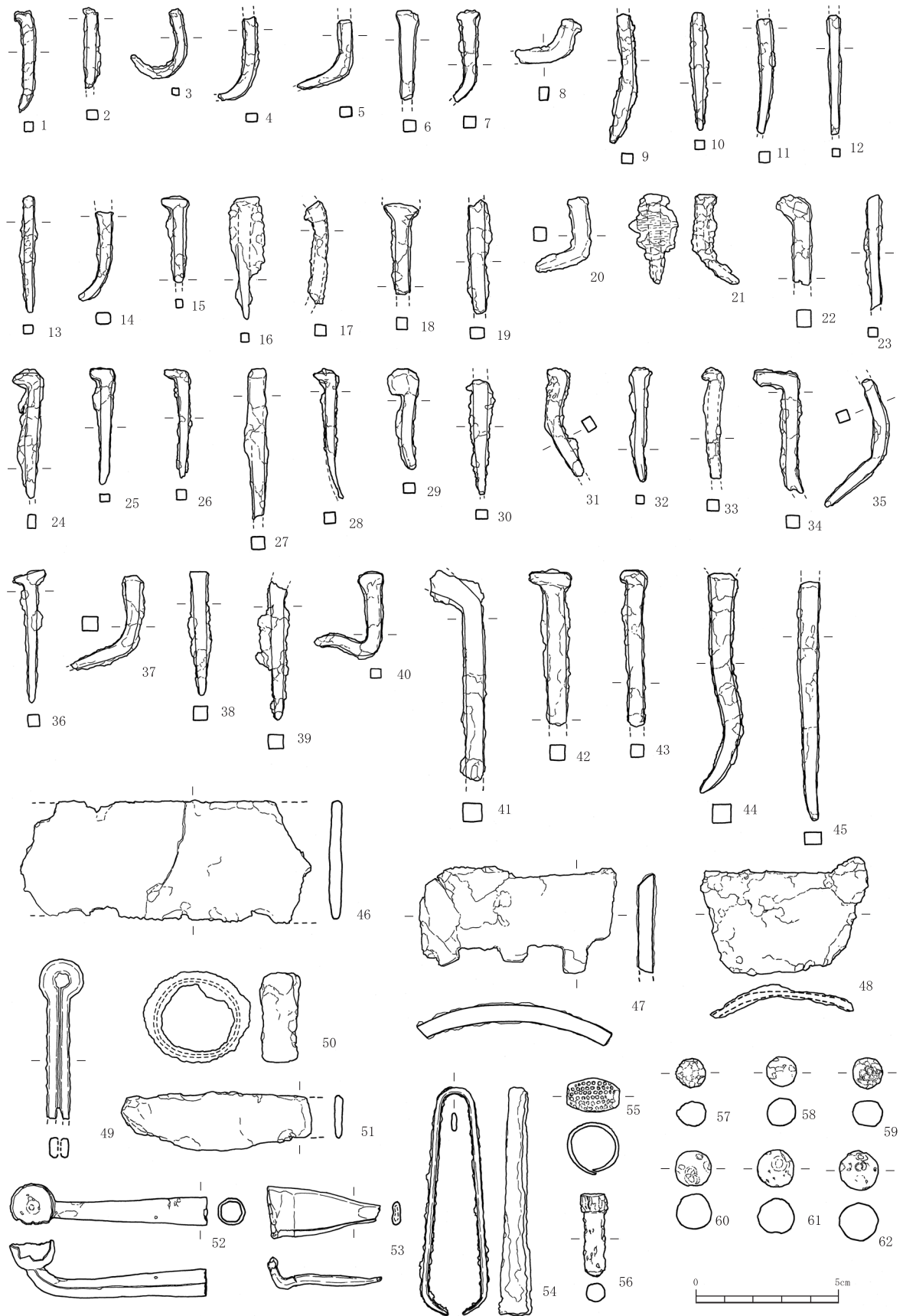
第 52 図 文字瓦実測図 (1/4)

文字瓦 (図版 21、第 52 図)

1・2 は平瓦で、凹面にそれぞれ「飯塚駅瓦師」「文政」の篋書き文字が見られる。いずれも 2-SX002 出土。3・4 は凹面にそれぞれ「飯塚宿東町彌…」 「飯…」の刻印。いずれも第 7 次表土等出土。5～8 は小口部分に「飯」「飯」の刻印がみられる。いずれも瓦の生産地である飯塚を示すものであろう。7 は第 7 次表土等出土で、その他は 2-SX002 上層出土。9 は両面に文字が見られ、凹面に「尫？」(焼成後に刻書)、凸面に「天万？」(焼成前に篋書き)であろうか。意味不詳。池跡 SX002 上層出土。10 は大型の棧瓦の棧部外面に「吉口」刻印を有する。第 7 次表土等出土。

3) 金属製品類 (図版 22、第 53 図)

1～45 は鉄釘である。すべて角釘である。46 は鉄製の鋸。47～51 は不明鉄製品。51 は火打金の可能性も考えられ、X線CTスキャナで撮影を試みた結果、火打金でないことが明らかとなった。52～56 は青銅製品で、52・53 はそれぞれ煙管の雁首と吸口。53 は扁平に潰れている。54 は毛抜き、



第53図 金属製品実測図 (1/2)

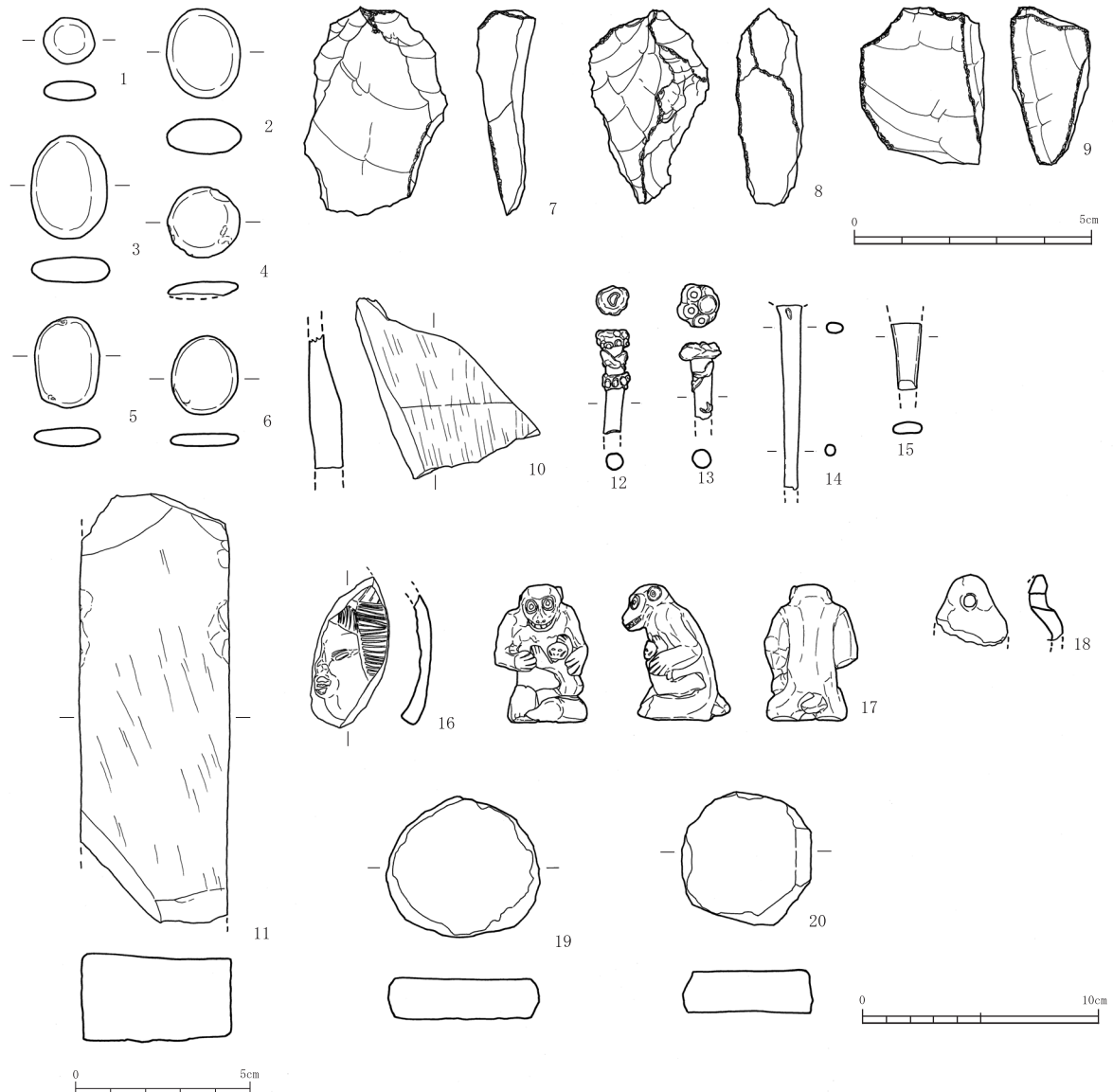
1, 7, 10, 16, 18, 21, 32, 36, 38~40 : 8次表土 / 2, 14, 20, 34, 48, 49 : 2次表土 / 3, 11, 15, 19, 22, 30, 37, 41, 45, 50 : 7次表土
 4, 60 : 3-SD001 / 5, 8, 17, 23, 31, 33, 43, 51~53, 62 : 1次表土 / 6, 12, 13, 24, 29, 35, 55 : 3次表土 / 9 : 9次2トツ
 25, 44, 58 : 2-SX002 / 26, 28, 42 : 9次表土 / 27, 46, 54, 61 : 5次表土 / 47 : 7次3トツ / 56, 59 : 4次表土 / 57 : 2-SX001

55は指貫である。56は不明である。57～62は火縄銃の玉で、重量はそれぞれ4.38g、5.77g、5.33g、9.87g、10.1g、11.3g。

4) 石製品・ガラス製品・土製品 (図版22、第54図)

1～6は基石でいずれも石製である。1・2が白石、3～6が黒石である。7～9は火打石で、詳細については第VI章にて述べる。10は赤間石の硯の破片である。11は砥石で、仕上用であろうか。12～15はガラス製の簪である。12～14は青緑色を呈し、断面は丸形。15はやや透明度の高い明緑色を呈し、断面は扁平形である。16は土師質の土器人形の型である。器面に女性の顔が型押しされている。17は猿の土人形である。左手に子猿を抱いている。18は土師質の土鈴の破片である。19・20は瓦の破片を転用した円盤状製品である。用途については不明である。

出土銭貨については、量的に少なく、いずれも錆付が著しく図化できなかつたため写真図版(図版22右下)のみの報告となる。1～3はいずれも寛永通寶である。1は背「佐」がみられる佐渡銭。3は2枚が重なって付着したものである。



第54図 石製品・ガラス製品・土製品実測図 (7～9: 2/3、16～20: 1/3、他: 1/2)

(1: 4次表土 2: 7次表土 3, 5, 6, 11: 9次表土 4, 8, 12～16, 18, 20: 2-SX002 7: 2-SD002 9, 19: 3次表土 10: 2次表土 17: 5次表土)

表 1 出土土器・陶磁器観察表 1

挿図番号 図版番号	出土地点	器種	法量 (cm) ※ () は推定値			素地・胎土	釉調	文様の特徴	推定産地	推定年代	備考
			口径	器高	底径						
28図1 図版14	表土等 第1次調査	色絵段重	(6.8)	2.55	(5.8)	精良	透明釉	外面に赤・青・緑による文様	肥前	18c末～19c代	口唇部上端から口縁部内面釉剥ぎ、体部下段釉剥ぎ
28図2 図版14	表土等 第1次調査	陶器片口	—	—	—	細粒を含む・胎土褐色	—	口縁内外面無釉、体部内外面灰釉	上野・高取系	17c前半	
28図3	表土等 第1次調査	瓦質火鉢	—	—	—	精良	—	—	産地不明	—	
28図4	表土等 第1次調査	土師質焔炉 (火鉢)	—	—	—	細粒を含む	—	—	産地不明	—	焔炉 (火鉢) の脚
28図5	1-UK001 第1次調査	瓦質甕	—	—	19.0	細粒を含む	—	—	—	—	内外面黒色、胎土は橙褐色
28図6	1-UK002 第1次調査	瓦質甕	—	—	22.5	細粒を含む	—	—	—	—	内外面黒色、胎土は橙褐色
29図1 図版14	2-SX002 上層	染付小碗	(8.9)	4.1	(3.4)	精良	透明釉	外面山水文	肥前	19c代	焼成不良、畳付釉剥ぎ
29図2 図版14	2-SX002 池跡上層	染付小碗	(9.1)	4.6	3.3	精良	透明釉	外面山水文、見込み岩波文	肥前	19c代	畳付釉剥ぎ
29図3	2-SX002 池跡中層	染付小碗	—	—	(3.2)	精良	透明釉	外面窓絵、見込み文様不明	肥前	19c代	酸化のため呉須が黒色化
29図4	2-SX002 池跡上層	染付小碗	—	—	(4.0)	精良	透明釉	外面二重格子目文、見込み虫文	肥前	19c代	畳付釉剥ぎ
29図5	2-SX002 池跡上層	染付小碗	(6.6)	—	—	精良	透明釉	外面二重格子目文	肥前	19c代	
29図6	2-SX002 池跡上層	染付碗	—	—	—	精良	透明釉	外面唐草文、見込み花卉文	明 景德鎮	16c～17c前半	
29図7 図版14	2-SX002 池跡上層	染付碗	(9.8)	5.8	4.0	精良	透明釉	外面滝文・竹文	肥前	18c	焼成不良、畳付釉剥ぎ
29図8 図版14	2-SX002 池跡上層	染付碗	(10.2)	5.3	(3.8)	精良	透明釉	外面菊花文、高台内「渦福」	肥前	18c中葉	焼成不良、畳付釉剥ぎ
29図9	2-SX002 池跡	染付碗	—	—	(3.6)	精良	透明釉	外面松竹梅文	肥前	18c	畳付釉剥ぎ
29図10	2-SX002 池跡上層	染付碗	(10.0)	4.6	(3.8)	精良	透明釉	外面若松文	肥前	18c後半	畳付釉剥ぎ
29図11	2-SX002 池跡上層	染付碗	(11.3)	—	—	精良	透明釉	外面仙芝祝寿文	肥前	18c後半	
29図12	2-SX002 池跡中層	染付碗	—	—	(6.1)	精良	透明釉	外面龍文、高台内「富貴□春」文字	肥前	18c末～19c初	畳付釉剥ぎ
29図13 図版14	2-SX002 池跡上層	染付広東碗	—	—	(6.0)	精良	透明釉	外面山水文・四方禪文、見込み火炎宝珠文	肥前	18c末～19c初	畳付釉剥ぎ
29図14	2-SX002 池跡上層	染付広東碗	—	—	(6.4)	やや精良	透明釉	外面土坡・草花文	肥前	19c前半	畳付釉剥ぎ
29図15	2-SX002 池跡	染付広東碗	—	—	(6.3)	良	透明釉	外面山水文か	肥前	18c末～19c初	畳付釉剥ぎ
29図16 図版14	2-SX002 池跡上層	染付端反碗	(10.6)	5.9	4.4	精良	透明釉	外面山水文、見込み岩波文	肥前	19c前半	畳付釉剥ぎ
29図17 図版14	2-SX002 池跡上層	染付端反碗	10.6	5.9	4.3	精良	透明釉	外面法螺貝文・宝文、見込み岩波文	肥前	19c前半	畳付釉剥ぎ
29図18 図版14	2-SX002 池跡上層	染付碗	(9.4)	5.7	(3.8)	精良	透明釉	外面草文、体部外面下半にヘラ彫り沈線文	肥前	19c代	畳付釉剥ぎ
29図19	2-SX002 池跡中層	染付碗	—	—	4.1	精良	透明釉	見込み墨はじきによる文様	肥前	19c代	畳付釉剥ぎ
29図20	2-SX002 池跡上層	色絵小碗	—	—	2.6	精良	透明釉	外面線段文 (赤)、見込み山水文か (赤・緑・黒)	肥前	19c代	見込み文様は上絵付け剥落のため不鮮明、畳付釉剥ぎ
29図21 図版14	2-SX002 池跡上層	染付筒形碗	6.5～7.2	5.15	(3.3)	精良	透明釉	外面草花文	肥前	18c後半	焼け至み、畳付釉剥ぎ
29図22 図版14	2-SX002 池跡上層	染付筒形碗	7.5	6.2	3.7	精良	透明釉	外面花文、見込み五弁花文 (コンニャク印判)	肥前	18c後半	口縁内面四方禪文、高台脇不明文様、畳付釉剥ぎ
29図23	2-SX002 池跡上層	染付筒形碗	(8.3)	5.9	3.7	精良	透明釉	外面菊文、見込み五弁花文 (手書き)	肥前	18c後半	口縁内面四方禪文、焼成不良、畳付釉剥ぎ
29図24	2-SX002 池跡上層	染付筒形碗	(6.9)	—	—	精良	透明釉	外面菊文	肥前	18c後半	
29図25	2-SX002 池跡上層	染付筒形碗	—	—	3.5	精良	透明釉	外面花文	肥前	18c後半	畳付釉剥ぎ
29図26	2-SX002 池跡中層	染付筒形碗	—	—	(3.4)	精良	透明釉	外面梵字文、見込み五弁花文 (手書き)	肥前	18c後半	高台脇に鋸歯文、畳付釉剥ぎ
29図27	2-SX002 池跡上層	染付青磁碗	(10.2)	6.4	(3.5)	精良	透明釉 緑灰釉	口縁内面四方禪文	肥前	18c後半	見込み崩れた五弁花文 (コンニャク印判)、畳付釉剥ぎ
29図28	2-SX002 池跡上層	染付青磁碗	(7.3)	5.4	3.6	精良	透明釉 緑灰釉	口縁内面四方禪文	肥前	18c後半	見込み崩れた五弁花文 (コンニャク印判)、畳付釉剥ぎ
29図29	2-SX002 池跡上層	染付青磁碗	(8.1)	—	—	精良	透明釉 緑灰釉	口縁内面四方禪文	肥前	18c後半	焼成不良
29図30	2-SX002 池跡上層	染付青磁碗	(7.8)	—	—	精良	透明釉 緑灰釉	口縁内面四方禪文	肥前	18c後半	
30図31	2-SX002 池跡上層	染付蓋	(9.0)	2.6	つまみ径 (3.5)	精良	透明釉	つまみ内に蝙蝠文、内天井部に岩波文	肥前	19c前半	つまみ端部釉剥ぎ
30図32	2-SX002 池跡上層	染付蓋	(8.6)	2.55	つまみ径 3.3	精良	透明釉	内外面梅文	肥前	19c前半	つまみ端部釉剥ぎ
30図33	2-SX002 池跡上層	染付皿 (輪花形)	(10.1)	2.3	6.2	精良	透明釉	見込み山水文	肥前	19c代	型打成形、畳付釉剥ぎ
30図34	2-SX002 池跡上層	染付皿 (なます皿)	—	—	(8.4)	精良	透明釉	見込み牡丹文	肥前	18c後半	蛇の目凹形高台

表 2 出土土器・陶磁器観察表 2

挿図番号 図版番号	出土地点	器種	法量 (cm) ※ () は推定値			素地・胎土	釉調	文様の特徴	推定産地	推定年代	備考
			口径	器高	底径						
30図35	2-SX002 池跡	染付皿 (輪花形)	(14.3)	4.1	7.5	精良	透明釉	外面唐草文、内面立ち沢渦文・丸文	肥前	18c前半	高台内「大口□化年□」文字、型打成形、墨付釉剥ぎ
30図36	2-SX002 池跡中層	染付皿	—	—	(8.4)	精良	透明釉	外面文様不明、見込み窓文	肥前系	19c代	蛇の目凹形高台、外面は呉須の滲みのため文様不鮮明
30図37 図版14	2-SX002 池跡上層	染付皿 (輪花形)	(14.9)	3.9	(8.6)	精良	透明釉	外面糸唐草文、内面菊文・雲文	須恵焼	18c後半	型打成形、蛇の目凹形高台、内外面ともに呉須が滲む
30図38	2-SX002 池跡中層	染付皿 (輪花形)	(14.6)	4.3	(8.3)	精良	透明釉	外面糸唐草文、内面菊文・雲文	須恵焼	18c後半	型打成形、蛇の目凹形高台、内外面ともに呉須が滲む
30図39	2-SX002 池跡上層	染付長皿	—	—	—	精良	透明釉	外面文様不明、内面松竹梅文	肥前か	19c代	糸切り細工成形、墨付釉剥ぎ
30図40 図版15	2-SX002 池跡上層	染付猪口	7.5	6.0	6.1	精良	透明釉	外面松竹梅文、口縁内面四方禪文	肥前	18c後半	見込み五弁花文(手書き)、蛇の目凹形高台
30図41 図版15	2-SX002 池跡上層	染付鉢	(15.4)	—	—	精良	透明釉	外面鳥文	肥前	18c代	
30図42	2-SX002 池跡上層	染付鉢	(11.4)	—	—	精良	透明釉	外面草花文か	肥前	19c代	
30図43	2-SX002 池跡上層	染付瓶 (徳利)	—	—	(8.2)	精良	透明釉	高台外面に2条の圈線	肥前	19c代	内面無釉、墨付釉剥ぎ、粗製品
30図44	2-SX002 池跡中層	染付瓶	—	—	—	精良	透明釉	外面笹文	肥前	19c代	内面肩部以下無釉
30図45	2-SX002 池跡上層	磁器瓶 (徳利)	3.8	—	—	精良	透明釉	—	肥前	19c代	
30図46	2-SX002 池跡中層	磁器 器種不明	—	—	—	精良	土灰釉	—	産地不明	—	口縁部内外面ともに施釉
30図47	2-SX002 池跡上層	白磁紅皿	4.3	1.3	1.3	精良	透明釉	型押し成形で、外面菊花状	肥前	19c代	内面と口縁部付近のみ施釉
30図48	2-SX002 池跡上層	白磁紅皿	4.7	1.3~ 1.6	1.4	精良	透明釉	型押し成形で、外面菊花状	肥前	19c代	内面と口縁部付近のみ施釉
30図49	2-SX002 池跡上層	白磁紅皿	4.8	1.3~ 1.6	1.4	精良	透明釉	型押し成形で、外面菊花状	肥前	19c代	内面と口縁部付近のみ施釉
30図50	2-SX002 池跡中層	白磁紅皿	4.5	1.3~ 1.6	1.4	精良	透明釉	型押し成形で、外面菊花状	肥前	19c代	内面と口縁部付近のみ施釉
31図51	2-SX002 池跡上層	土師器小皿	(6.0)	0.8	(5.0)	精良	—	—	—	—	外底に糸切り痕
31図52	2-SX002 池跡上層	土師器小皿	(7.6)	1.4	(5.3)	細粒を含む	—	—	—	—	外底に糸切り痕
31図53 図版15	2-SX002 池跡上層	陶器碗	—	—	(3.7)	良質・胎土暗赤褐色	透明釉	内外面に白土による刷毛目	肥前 (唐津系)	18c後半	見込み蛇の目釉剥ぎ
31図54	2-SX002 池跡中層	陶器碗	—	—	(4.0)	精良・胎土黄褐色	—	胎軸総掛け後、内面に藁灰釉を流し掛け	小石原	19c前半	胴部中位からくびれる形状を呈する。墨付は釉剥ぎ
31図55 図版15	2-SX002 池跡上層	陶器碗 (杉形)	(9.1)	5.1	3.4	良質・胎土淡黄色	灰釉	外面に鉄絵による若杉文	信楽系	18c末~19c初	高台脇より下位は無釉
31図56	2-SX002 池跡上層	陶器碗 (杉形)	(9.0)	5.7	(3.4)	良質・胎土淡黄色	灰釉	外面に鉄絵による若杉文	信楽系	18c末~19c初	高台脇より下位は無釉
31図57	2-SX002 池跡上層	陶器碗 (杉形)	—	—	3.4	良質・胎土淡黄色	灰釉	外面に鉄絵による若杉文	信楽系	18c末~19c初	高台脇より下位は無釉
31図58	2-SX002 池跡上層	陶器碗 (杉形)	(10.1)	5.2	(3.5)	良質・胎土淡黄色	灰釉	—	信楽系	18c末~19c初	高台脇より下位は無釉
31図59	2-SX002 池跡	陶器碗 (杉形)	(8.1)	5.3	3.4	良質・胎土浅黄色	灰釉	—	信楽系	18c末~19c初	高台脇より下位は無釉
31図60	2-SX002 池跡上層	陶器小坏	(6.2)	2.7	(3.2)	良質・胎土浅黄褐色	—	口縁外面~内面に淡緑釉	関西系	—	軟質施釉陶器
31図61	2-SX002 池跡上層	陶器皿	(23.8)	6.1	(6.4)	細粒を含む・胎土灰色	—	外面上半~内面に緑褐釉	上野・高取系	17c前半	見込みに胎土目
31図62	2-SX002 池跡上層	陶器鉢	—	—	(5.2)	精良・胎土浅黄色	—	鉄軸総掛け後、内面に藁灰釉を流し掛け	小石原	18c~19c	見込み蛇の目釉剥ぎ
31図63	2-SX002 池跡上層	陶器盤	—	—	—	細粒を含む・胎土浅黄色	—	胎軸に藁灰釉を流し掛け	上野・高取系	19c代	
31図64	2-SX002 池跡上層	陶器鉢	(22.0)	—	—	良質・胎土橙色	—	内外面に褐釉	上野・高取系	—	
31図65	2-SX002 池跡上層	陶器播鉢	—	—	—	細粒を含む・胎土明褐色	—	—	上野・高取系	17c代	焼締め
31図66	2-SX002 池跡上層	陶器播鉢	(37.4)	—	—	細粒を含む・胎土明褐色	—	内外面に鉄釉	上野・高取系	17c後半~18c	
31図67	2-SX002 池跡	陶器播鉢	(29.2)	—	—	細粒を含む・胎土暗灰黄色	—	内外面に鉄釉	上野・高取系	18c代	櫛目の上端をヨコナデで揃える
31図68	2-SX002 池跡	陶器播鉢	(29.0)	—	—	良質・胎土灰黄色	—	内外面に鉄釉	上野・高取系	18c後半~19c	櫛目の上端をヨコナデで揃える
31図69	2-SX002 池跡上層	陶器播鉢	(22.0)	—	—	砂粒を含む・胎土黒褐色	—	内外面に鉄釉	上野・高取系	18c末~19c	櫛目の上端をヨコナデで揃える
31図70	2-SX002 池跡上層	陶器播鉢	—	—	—	砂粒を含む・胎土褐灰色	—	内外面に鉄釉	上野・高取系	19c代	櫛目の上端をヨコナデで揃える
31図71	2-SX002 池跡	陶器播鉢	—	—	—	砂粒を含む・胎土黄褐色	—	内外面に鉄釉	上野・高取系	19c代	櫛目の上端をヨコナデで揃える
31図72	2-SX002 池跡上層	陶器播鉢	—	—	(12.4)	砂粒を含む・胎土明赤褐色	—	内外面に鉄釉	上野・高取系	18c代	
32図73	2-SX002 池跡上層	陶器水指?	—	—	—	砂粒を含む・胎土橙色	外面に施釉	外面に櫛目による波状文	唐津系	18c代	生焼けのため釉は白色を呈する
32図74 図版15	2-SX002 池跡上層	陶器花生	—	—	(10.4)	精良・胎土浅黄色	—	内面に透明釉	上野系 (田香焼?)	19c代	外底に「一つ巴文」と銘款

表 3 出土土器・陶磁器観察表 3

挿図番号 図版番号	出土地点	器種	法量 (cm) ※ () は推定値			素地・胎土	釉調	文様の特徴	推定産地	推定年代	備考
			口径	器高	底径						
32図75 図版15	2-SX002 池跡上層	陶器灰吹	(10.3)	7.2	(10.0)	精良・胎土灰 色	高台内～口縁部内面に白化粧土後、体部 外面～口縁部内面に施釉	関西系?	19c代	口縁上端面は釉が剥落してい る。貫入が氷裂状に入る	
32図76	2-SX002 池跡上層	陶器瓶 (徳利)	—	—	(8.6)	良質・胎土灰 色	内外面に鉄釉	上野・高取系	19c代	外底部に離れ砂が付着	
32図77	2-SX002 池跡	陶器瓶 (徳利)	—	—	—	良質・胎土灰 白色	外面に鉛釉・イッチン描きによる文様 (白化粧土)、内面に鉄釉	上野・高取系	18c後半		
32図78	2-SX002 池跡	陶器土瓶蓋	(10.2)	2.0	(5.3)	良質・胎土赤 褐色	外面に緑褐釉	肥前 (唐津系)	18c末～19c代		
32図79	2-SX002 池跡上層	陶器土瓶蓋	(8.3)	—	—	細粒を含む・ 胎土橙色	天井部外面に緑褐釉	上野・高取系	19c代		
32図80	2-SX002 池跡上層	陶器植木鉢	(30.0)	—	—	良質・胎土浅 黄色	内外面に鉄釉後、薬灰釉を掛ける	上野・高取系	19c代		
32図81 図版15	2-SX002 池跡上層	陶器甕	(32.0)	—	—	細粒を含む・ 胎土灰黄褐色	鉄釉総掛け後、口縁部内面～外面に褐釉 を施釉後、薬灰釉を流し掛け	上野・高取系	19c代		
32図82	2-SX002 池跡	陶器甕	(58.3)	—	—	精良・胎土暗 赤褐色	内外面に 鉄釉	頸部外面に3条の凹線	肥前	19c代	口縁部上面に目跡が4ヶ所
32図83	2-SX002 池跡上層	陶器甕	—	—	(13.6)	精良・胎土灰 白色	外面に鉄釉後、薬灰釉を流し掛け 内面 に薬灰釉後、緑褐釉を流し掛け	上野・高取系	19c代	外底部釉剥ぎ	
32図84	2-SX002 池跡上層	陶器甕	—	—	(13.6)	精良・胎土浅 黄色	内外面に鉄釉総掛け後、薬灰釉を流し掛 け	上野・高取系	19c代		
33図85 図版15	2-SX002 池跡上層	陶器火もらい甕	—	14.6	16.4	精良・胎土浅 黄褐色	外面と内面の一部に淡緑色釉掛け後、外 面に薬灰釉と緑色釉を流し掛け	産地不明	—	把手付き	
33図86	2-SX002 池跡上層	土師質焙烙	(27.2)	—	—	砂粒を含む	—	—	産地不明	—	底部内外面に煤付着
33図87 図版15	2-SX002 池跡上層	土師質焙烙	—	—	—	細粒を含む	—	—	産地不明	—	把手は中空 内底と体部内面 に煤付着
33図88	2-SX002 池跡	土師質焔炉	(17.8)	—	—	細粒を含む	—	—	—	—	
33図89	2-SX002 池跡上層	土師質火鉢 (七厘)	—	—	—	細粒を含む	—	—	—	—	
33図90	2-SX002 池跡上層	土師質火鉢 (七厘)	—	—	—	砂粒を含む	—	—	—	—	
33図91	2-SX002 池跡中層	土師質火鉢	—	—	—	砂粒を含む	—	—	—	—	内底と高台内が黒色化
33図92 図版15	2-SX002 池跡	瓦質火鉢	—	—	(19.2)	砂粒を含む	—	脚台外面に馬の印刻文	—	—	脚台内面は土師質
33図93	2-SX002 池跡上層	土師質火鉢	—	—	—	砂粒を含む	—	口縁部外面に菊文スタンプ	—	—	
33図94	2-SX002 池跡上層	土師質火鉢	—	—	—	砂粒を含む	—	—	—	—	
33図95	2-SX002 池跡上層	瓦質火消壺	(17.0)	—	—	良質	—	—	—	—	
33図96	2-SX002 池跡上層	瓦質甕	(47.2)	—	—	細粒を含む	—	—	—	—	大型の瓦質甕
33図97	2-SX002 池跡	土師質サナ	—	—	—	砂粒を含む	—	—	—	—	
33図98	2-SX002 池跡中層	土師質サナ	—	—	—	砂粒を含む	—	—	—	—	
33図99 図版15	2-SX002 池跡上層	土師質焼塩壺	6.7	7.7	4.5	砂粒を含む	—	—	—	18c～	
33図100 図版15	2-SX002 池跡上層	朱泥陶器小皿?	—	—	—	精良	—	内底に菊花状の文様(型押し)	常滑?	18c末～19c初	
34図1	2-SX002 池跡下層	染付皿	—	—	(7.6)	精良	透明釉	内外面文様不明	明 景德鎮	16c代	
34図2	2-SX002 池跡下層	染付鉢	—	—	(7.5)	精良	透明釉	外面花唐草文	肥前	18c代	畳付釉剥ぎ
34図3 図版16	2-SX002 池跡下層	陶器皿	—	—	4.0	砂粒を含む・ 胎土黄灰色	外面上半～内面に薬灰釉	上野・高取系	17c前半	高台内に兎巾が残る	
34図4 図版16	2-SX002 池跡下層	陶器瓶	—	—	7.8	良質・胎土灰 白色	外面全体に鉄釉を施釉後、薬灰釉掛け	上野・高取系	17c前半	内面は無釉で同心円叩き痕が 残る	
35図1	2-SX001	染付小碗	(7.4)	—	—	精良	透明釉	外面梅花文	肥前	19c代	
35図2	2-SX001	磁器小碗	(8.2)	—	—	精良	透明釉、口縁部内外面に銅緑釉	肥前	19c代		
35図3	2-SX001	染付大皿	—	—	(18.6)	精良	透明釉	外面唐草文、内面窓文	肥前	18c代	畳付釉剥ぎ
35図4	2-SX001	染付蓋	(9.2)	2.8	つまみ径 4.2	精良	透明釉	外面山水文、内天井部に鶯文	肥前	18c末～19c	つまみ端部釉剥ぎ
35図5	2-SX001	染付蓋	—	—	つまみ径 5.2	精良	透明釉	外面に蕉葉文、内天井部に瓢箪と軍配文	肥前	18c末～19c初	つまみ端部釉剥ぎ
35図6	2-SX001	青磁仏花瓶	—	—	(5.4)	精良	緑灰釉	体部内面無釉	肥前	18c	竹節高台
35図7	2-SX001 上層	陶器折縁皿	—	—	(4.0)	精良・胎土明 橙褐色	口縁部外面～内面に灰釉掛け	肥前系	17c前半	内面見込みに砂目痕	
35図8	2-SX001	土師質焼塩壺(蓋)	(6.6)	1.2	(6.2)	細粒を含む	—	—	—	—	蓋下面に布目痕
35図9	2-SX001	土師質サナ	—	—	—	砂粒を含む	—	—	—	—	
36図10	2-SX003	染付碗	(9.8)	4.6	(4.0)	精良	透明釉	外面雪輪草花文	肥前	18c後半～19c 初	

表 4 出土土器・陶磁器観察表 4

挿図番号 図版番号	出土地点	器種	法量 (cm) ※ () は推定値			素地・胎土	釉調	文様の特徴	推定産地	推定年代	備考
			口径	器高	底径						
36図11 図版16	2-SX003	色絵碗	(9.8)	—	—	精良	透明釉	外面に赤・薄黒による唐子文	肥前	19c代	
36図12	2-SX003	染付小碗	—	—	(3.8)	精良	透明釉	外面木賊文	肥前	18c後半	
36図13	2-SX003	染付青磁碗	(7.4)	—	—	精良	透明釉 緑灰釉	口縁内面四方禪文	肥前	18c後半	
36図14	2-SX003	陶器皿	—	—	(4.8)	精良・胎土灰色	—	口縁部外面～内面に緑釉掛け	上野・高取系	17c前半	高台内に兜巾
36図15	2-SX003	陶器仏花瓶	—	—	7.2	精良・胎土淡灰色	—	外底部鉄釉、その他緑釉掛け	上野・高取系	19c代	底部糸切り痕
36図16	2-SX005	陶器小碗	(9.0)	—	—	精良・胎土灰白色	—	体部内外面に透明釉	関西系	19c代	貫入が氷裂状に入る
36図17	2-SX005	陶器小碗	—	—	3.6	精良・胎土灰白色	—	体部内外面に施釉、高台内外面は露胎	関西系	19c代	
36図18	2-SX005	染付鉢	—	—	5.4	精良・胎土黄白色	透明釉	見込み文様不明	漳州窯	16～17c代	
36図19	2-SX008	陶器小碗	(8.8)	—	—	精良・胎土灰白色	—	体部内外面に青味を帯びた透明釉	関西系	19c代	貫入が氷裂状に入る
36図20	2-SX008	道具藏跡	(12.6)	2.0	(8.2)	精良	—	—	—	—	内面に煤付着、灯明皿
36図21	2-SX010	染付皿	—	—	(5.9)	精良	透明釉	見込み海老文	明 景德鎮	17c前半	疊付釉剥ぎ、高台端部付近に砂が付着
36図22	2-SX018	染付小碗	(8.8)	—	—	精良	透明釉	外面散し丸文	肥前	18c	
36図23	2-SX018	染付皿	(13.0)	3.4	5.0	精良	透明釉	内面二重斜格子文	肥前	18c中頃	見込み蛇の目釉剥ぎ
36図24	2-SX018	染付皿 (輪花形)	(15.0)	4.2	(9.0)	精良	透明釉	外面唐草文、内面立ち沢湯文・丸文	肥前	18c前半	高台内「□□成□□製」文字、型打成形、疊付釉剥ぎ
36図25 図版16	2-SX018	陶器仏花瓶	8.2	14.8	(7.4)	精良・胎土淡灰色	—	内面鉄釉、外面薄緑釉後、口頸部に藁灰釉流し掛け、外底露胎	—	—	36図26とセットか?
36図26	2-SX018	陶器仏花瓶	—	—	(7.4)	精良・胎土淡灰色	—	内面鉄釉、外面薄緑釉後、口頸部に藁灰釉流し掛け、外底露胎	—	—	36図25とセットか?
36図27 図版16	2-SP002	陶器碗	(10.0)	7.0	(3.9)	砂粒を含む・胎土褐色	—	鉄釉総掛け後、内面と体部外面上半付近まで藁灰釉を流し掛け	上野・高取系	17c前半	高台内に兜巾が残る
36図28 図版16	2-SP003	陶器小碗	7.9	4.2	3.5	砂粒を含む・胎土灰色	—	内面と体部外面上半付近まで緑釉を流し掛け	上野・高取系	17c前半	高台内に兜巾が残る
36図29	2-SP004	陶器小壺	—	—	(4.8)	砂粒を含む・胎土赤灰色	—	体部外面と内底の一部に藁灰釉	上野・高取系	17c前半	
36図30 図版16	整地層 第2次調査	白磁小坏	—	—	(2.0)	精良	—	内面と体部外面に透明釉、高台内無釉	有田	17c前半	高台内に兜巾が残る
36図31	整地層 第2次調査	陶器皿	(13.2)	3.9	4.5	精良(磁質に近い)	透明釉	体部内外面施釉、高台内無釉	肥前	17c前半	見込みに砂目(4ヶ)、高台見込みに兜巾が残る
36図32	整地層 第2次調査	陶器向付	—	—	—	精良	—	内面～体部外面を長石釉で施釉後、緑釉と鉄絵文	織部	17c初	見込みに布目痕を有する、底部外面は無釉
36図33	整地層 第2次調査	陶器大皿	—	—	(7.8)	砂粒を含む・胎土明橙褐色	—	内外面に鉄釉後、藁灰釉を流し掛け	上野・高取系	17c前半?	体部下半から高台は無釉
36図34	整地層 第2次調査	陶器鉢	—	—	—	細砂を含む・胎土黄灰色	—	内面と体部外面上位に褐釉	上野・高取系	17c前半?	
37図1 図版16	表土等 第2次調査	染付碗	(10.0)	5.6	4.0	精良	透明釉	外面二重網目文、内面網目文	肥前	18c	見込みに花文
37図2	表土等 第2次調査	染付碗	—	—	4.4	精良	透明釉	外面草花文	肥前	18c	裏銘に崩れた渦福文
37図3	表土等 第2次調査	染付小碗	(9.6)	—	—	精良	透明釉	外面散し丸文	肥前	18c	
37図4	表土等 第2次調査	染付小碗	(6.0)	—	—	精良	透明釉	外面寿字文+竹文	肥前	19c代	
37図5	表土等 第2次調査	染付筒形碗	(7.4)	—	—	精良	透明釉	外面菊文	肥前	18c後半	
37図6	表土等 第2次調査	染付小碗	—	—	(3.2)	精良	透明釉	見込み火炎宝珠文	肥前	18c末～19c前半	体部下位に○×の連続文
37図7	表土等 第2次調査	白磁朝顔形碗	(10.8)	6.2	(4.2)	精良	透明釉	—	肥前	19c前半	疊付釉剥ぎ
37図8	表土等 第2次調査	染付皿	—	—	(9.0)	精良	透明釉	見込み花文	肥前(有田)	17c末	疊付釉剥ぎ
37図9	表土等 第2次調査	染付皿	—	—	—	精良	透明釉	見込み円環松竹梅文	肥前	18c後半	蛇の目凹形高台
37図10	表土等 第2次調査	染付皿	—	—	(8.4)	精良	透明釉	見込み文様不明	肥前	19c	疊付釉剥ぎ
37図11	表土等 第2次調査	染付皿	—	—	(5.4)	精良	透明釉	見込み山水文	肥前	19c	見込みにハマの痕
37図12	表土等 第2次調査	白磁菊花皿	(8.0)	3.7	(3.8)	精良	透明釉	内面に型押しした菊花文	肥前	19c	焼成不良のため釉が白色に濁っている
37図13	表土等 第2次調査	白磁紅皿	(4.0)	1.0	1.5	精良	透明釉	型押し成形で、外面菊花状	肥前	18c末～19c初	内面と口縁部付近のみ施釉
37図14	表土等 第2次調査	染付蓋	(10.0)	2.6	つまみ径(6.2)	精良	透明釉	外面虫文、内天井部に軍配団扇文	肥前	18c末～19c初	
37図15	表土等 第2次調査	染付蓋	(10.0)	3.0	つまみ径(4.2)	精良	透明釉	外面水鳥文+丸文の中に草花文、内天井部に竹笹文	肥前	19c前半	口縁部内面に雷文
37図16 図版16	表土等 第2次調査	染付火入	(11.6)	—	—	精良	透明釉	口縁内外面雷文、外面唐子文	肥前	19c代	体部内面中位無釉、37図17と同一個体か?

表 5 出土土器・陶磁器観察表 5

挿図番号 図版番号	出土地点	器種	法量 (cm) ※ () は推定値			素地・胎土	釉調	文様の特徴	推定産地	推定年代	備考
			口径	器高	底径						
37図17 表土等 第2次調査	染付火入 (底部)	陶器碗	—	—	(9.4)	精良	透明釉	内面無釉	肥前	19c代	37図16と同一個体か?
37図18 図版16 表土等 第2次調査	陶器小碗	陶器碗	(8.2)	4.6	4.0	精良・胎土灰白色	口縁部外面に鉄絵による文様 (文字か?)		不明	19c代?	
37図19 表土等 第2次調査	陶器碗	陶器碗	—	—	4.0	精良・胎土明橙色	内外面に緑褐釉を総掛け		肥前or上野系	17c末~18c	焼成不良
37図20 図版16 表土等 第2次調査	陶器碗	陶器碗	—	—	(4.2)	精良・胎土灰白色	内外面褐釉総掛け後、藁灰釉掛け		小石原	18c前半	畳付釉剥ぎ
37図21 図版16 表土等 第2次調査	陶器碗 (杉形)	陶器碗	—	—	3.6	精良・胎土黄白色	外面に鉄絵による若杉文		信楽系	18c末~19c初	高台脇より下位は無釉
37図22 図版16 表土等 第2次調査	陶器 壺 (胎壺)	陶器 壺 (胎壺)	—	—	5.0	細粒を含む・胎土明赤褐色	外面鉄釉を施した後体部上半まで緑褐釉を施す、内面緑褐釉施す		上野	19c前半	底部糸切り
37図23 表土等 第2次調査	陶器播鉢	陶器播鉢	—	—	—	細粒を含む・胎土明橙~灰褐色	内外面に鉄釉		上野・高取系	19c	
37図24 表土等 第2次調査	陶器播鉢	陶器播鉢	—	—	11.8	砂粒を含む・胎土明橙褐色	内外面に鉄釉 (高台内は部分的に鉄釉が掛かる)		在地か?	19c	見込みに離れ砂の痕跡が輪状に残る
37図25 図版17 表土等 第2次調査	陶器瓶 (徳利)	陶器瓶 (徳利)	—	—	—	良質・胎土灰白色	外面に胎釉・イッチン描きによる文様 (白化粧土)、内面に鉄釉		上野・高取系	18c後半~19c	
37図26 表土等 第2次調査	陶器土鍋	陶器土鍋	(18.2)	—	—	細粒を含む・胎土明褐色	内外面に褐釉		上野・高取系	19c初	
37図27 表土等 第2次調査	陶器土鍋	陶器土鍋	(19.0)	—	—	精良・胎土褐灰色	内面~外面上位に褐釉		上野・高取系	19c	
37図28 表土等 第2次調査	土師質サナ	土師質サナ	—	—	—	砂粒を含む	—	—	—	—	
37図29 表土等 第2次調査	土師質焼壺蓋 (蓋)	土師質焼壺蓋 (蓋)	(6.8)	1.4	(6.4)	細粒を含む	—	—	—	—	蓋上面に板状圧痕、蓋下面に布目痕
38図1 図版17 表土等 第3次調査	染付碗	染付碗	10.2	5.4	3.2	精良	透明釉	外面花文、見込みに虫文	肥前	18c末~19c前半	畳付釉剥ぎ
38図2 表土等 第3次調査	染付広東碗	染付広東碗	—	—	6.2	精良	透明釉	外面山水文、見込み虫文	肥前	18c末~19c初	畳付釉剥ぎ
38図3 表土等 第3次調査	染付広東碗	染付広東碗	—	—	5.8	精良	透明釉	外面唐草文?、見込み合わせ輪文	肥前	18c末~19c初	畳付釉剥ぎ
38図4 表土等 第3次調査	染付碗	染付碗	—	—	4.0	精良	透明釉	外面桐文?	肥前	18c	裏銘に崩れた「大明年製」
38図5 図版17 表土等 第3次調査	染付碗	染付碗	(10.0)	4.9	(3.8)	精良	透明釉	外面文様不明	瀬戸	19c後半	
38図6 図版17 表土等 第3次調査	色絵碗	色絵碗	—	—	4.2	精良	透明釉	外面緑による不明文様、見込み赤による桜文	肥前	18c	
38図7 図版17 表土等 第3次調査	染付碗	染付碗	—	—	(5.2)	精良	透明釉	外面龍文、高台外面に寿文+唐草文	不明	19c前半	
38図8 表土等 第3次調査	染付筒形碗	染付筒形碗	(7.6)	—	—	精良	透明釉	外面山水文	肥前	18c後半	
38図9 表土等 第3次調査	白磁小坏	白磁小坏	(7.4)	4.6	(3.4)	精良	透明釉	—	中国産?	17c	
38図10 表土等 第3次調査	染付皿 (輪花形)	染付皿 (輪花形)	—	—	5.0	精良	透明釉	見込み山水文	肥前	19c	畳付釉剥ぎ
38図11 表土等 第3次調査	染付皿 (輪花形)	染付皿 (輪花形)	—	—	(7.6)	精良	透明釉	外面唐草文、内面立ち沢湯文・丸文	肥前	18c前半	高台内「大□□□□」文字、型打成形、畳付釉剥ぎ
38図12 表土等 第3次調査	染付皿	染付皿	—	—	(12.4)	精良	透明釉	外面唐草文、内面文様不明	肥前	18c	畳付釉剥ぎ
38図13 表土等 第3次調査	陶胎染付皿	陶胎染付皿	—	—	(11.2)	細粒を含む・胎土浅黄褐色	透明釉	見込み柴垣文・梅文	肥前	17c末	畳付釉剥ぎ
38図14 表土等 第3次調査	染付蓋付鉢	染付蓋付鉢	(10.0)	—	—	精良	透明釉	外面に縞文	肥前	19c	口縁部釉剥ぎ
38図15 表土等 第3次調査	白磁蓋	白磁蓋	(9.6)	3.3	つまみ径 (3.8)	精良	透明釉	—	肥前	19c	
38図16 表土等 第3次調査	青磁香炉	青磁香炉	(8.0)	—	—	精良	濃緑釉	口縁部外面算木文	有田	17c後半	体部内面無釉
38図17 図版17 表土等 第3次調査	陶器碗	陶器碗	(9.8)	5.4	3.4	精良・胎土黄白色	体部内外面に透明釉		関西系	19c前半	貫入が水裂状に入る
38図18 図版17 表土等 第3次調査	陶器小碗	陶器小碗	(8.6)	5.0	(3.6)	精良・胎土黄白色	内面と外面上位に透明~淡緑色釉を施す		関西系	19c	
38図19 表土等 第3次調査	陶器皿	陶器皿	—	—	4.6	砂粒を含む・胎土橙褐色	内面と外面上位に緑灰釉を施す		上野・高取系	17c前半?	
38図20 表土等 第3次調査	陶器皿	陶器皿	—	—	5.6	砂粒を含む・胎土橙褐色	内面と外面上位に藁灰釉を施す		上野・高取系	17c前半	
38図21 図版17 表土等 第3次調査	陶器土瓶	陶器土瓶	(8.8)	—	—	砂粒を含む・胎土黄灰色	口縁内面~外面に鉄釉、体部上半に横方向の沈線を入れ、その上に白土を塗り、鉄絵を描く		不明	19c?	
38図22 表土等 第3次調査	陶器土瓶 (注口)	陶器土瓶 (注口)	—	—	—	精良・胎土灰白色	内面に褐釉		不明	19c	
38図23 表土等 第3次調査	陶器土瓶 (蓋)	陶器土瓶 (蓋)	(9.7)	—	—	精良・胎土黄灰色	外面透明釉を施した後、白土を塗り、鉄絵を描く		上野・高取系	19c	
38図24 図版17 表土等 第3次調査	陶器灯明台皿	陶器灯明台皿	8.2	2.4	4.2	精良・胎土灰白色	内面に透明釉、外面は露胎		不明	19c	
38図25 表土等 第3次調査	陶器甕	陶器甕	—	—	—	砂粒を含む・胎土褐灰~橙褐色	内外面鉄釉、内面に当て具痕が僅かに残る		上野・高取系?	17c前半	
38図26 表土等 第3次調査	陶器播鉢	陶器播鉢	(29.0)	13.0	(10.0)	細粒を含む・胎土褐灰~橙褐色	摺目は7条1単位		上野・高取系	17c前半	焼き締め
39図27 表土等 第3次調査	陶器播鉢	陶器播鉢	(35.6)	—	—	細粒を含む・胎土明褐色	内外面鉄釉		上野・高取系	19c	

表 6 出土土器・陶磁器観察表6

挿図番号 図版番号	出土地点	器種	法量 (cm) ※ () は推定値			素地・胎土	釉調	文様の特徴	推定産地	推定年代	備考
			口径	器高	底径						
39図28	表土等 第3次調査	瓦質火鉢	(20.8)	—	—	砂粒を含む	—	—	—	—	
39図29	表土等 第3次調査	土師質七厘	(23.0)	—	—	砂粒を含む	—	—	—	—	口縁部内面に煤付着
39図30	表土等 第3次調査	土師質サナ	—	—	—	砂粒を含む	—	—	—	—	
39図31	表土等 第3次調査	土師質焙烙	(30.0)	5.2	(25.2)	砂粒を含む	—	—	—	—	
39図32	表土等 第3次調査	瓦質火鉢 (脚台)	—	—	(20.8)	細粒を含む	—	—	—	—	
39図33	表土等 第3次調査	土師質焼塩壺(蓋)	(7.8)	1.6	(8.0)	砂粒を含む	—	—	—	—	器面摩滅
39図34	表土等 第3次調査	土師質ハマ	(8.2)	1.2	(8.6)	砂粒を多く含む	—	—	—	—	
39図35	表土等 第3次調査	土師質ハマ	(6.8)	0.6	(6.8)	細粒を含む	—	—	—	—	硬質
40図1	3-SD001 第5次調査	染付碗	(9.8)	—	—	精良	透明釉	外面草花文(菱菱文)	肥前	19c	
40図2	3-SD001 第5次調査	磁器碗	(9.0)	5.2	(3.6)	精良	透明釉	無文	肥前	19c	畳付釉剥ぎ
40図3 図版17	3-SD001 第5次調査	色絵碗	9.4	—	—	精良	透明釉	外面に青・赤・黄による山水文(水車文)	肥前	18c	口縁部内面に四方禪文
40図4 図版17	3-SD001 第5次調査	染付猪口	(5.4)	6.0	4.2	精良	透明釉	外面山水文	肥前	19c	畳付釉剥ぎ
40図5	3-SD001 第5次調査	染付小坏	(6.8)	2.8	(3.4)	精良	透明釉	外面笹文	肥前	19c前半	畳付釉剥ぎ
40図6	3-SD001 第5次調査	染付小坏	(6.4)	2.8	(2.2)	精良	透明釉	内面薄黒色で文字(判読不明)、落款は赤色で素描	肥前?	19c後半	畳付釉剥ぎ
40図7	3-SD001 第5次調査	染付皿 (輪花形)	(14.0)	4.2	(8.0)	精良	透明釉	外面唐草文、内面立ち沢湯文・丸文	肥前	18c前半	高台内「大口口化口口」文字、型打成形、畳付釉剥ぎ
40図8	3-SD001 第5次調査	染付皿	(18.8)	4.8	(10.8)	精良	透明釉	内面花文	漳州窯	17c前半	焼成不良
40図9 図版17	3-SD001 第5次調査	染付小鉢	(8.4)	5.8	(3.4)	精良	透明釉	外面波状文	肥前	18c代	
40図10 図版17	3-SD001 第5次調査	染付段重 (段重の底)	(9.4)	4.8	(6.6)	精良	透明釉	外面窓文に千鳥とススキ	肥前	18c後半	口唇部上端から口縁部内面釉剥ぎ、畳付釉剥ぎ
40図11	3-SD001 第5次調査	白磁紅皿	4.6	1.8	1.4	精良	透明釉	型押し成形で、外面菊花状	肥前	19c代	内面と口縁部付近のみ施釉
40図12	3-SD001 第5次調査	陶器碗	—	—	4.0	精良・胎土黄灰色	内面と体部外面上位に青味を帯びた灰釉を施釉		上野・高取系	19c代	
40図13	3-SD001 第5次調査	陶器碗	—	—	5.2	精良・胎土黄白色	内外面藁灰釉を施釉後、見込み蛇ノ目釉剥ぎ		小石原	17c後半~17c末	2次的に被熱を受けている
40図14	3-SD001 第5次調査	陶器大皿	—	—	7.4	砂粒を含む・胎土褐色	内外面鉄釉後に藁灰釉掛け		上野・高取系	17c前半	見込みと高台内に重ね焼き痕
40図15	3-SD001 第5次調査	陶器盤	(22.8)	3.3	(18.4)	砂粒を含む・胎土褐色	内外面に鉄釉		上野・高取系	17c前半	
40図16	3-SD001 第5次調査	陶器鉢	—	—	—	精良・胎土明灰色	内外面に黄緑釉掛け		須佐or萩?	19c代	
40図17	3-SD001 第5次調査	陶器搦鉢	—	—	—	砂粒を含む・胎土赤褐色	—	—	上野・高取系	17c後半	焼締め
40図18	3-SD001 第5次調査	陶器搦鉢	—	—	—	砂粒を含む・胎土明黄褐色	—	—	上野・高取系	17c前半	焼締め
40図19	3-SD001 第5次調査	陶器搦鉢	(28.6)	—	—	精良・胎土明褐色	内外面に鉄釉		上野・高取系	19c代	焼成不良
40図20	3-SD001 第5次調査	陶器壺	(9.6)	—	—	精良・胎土赤褐色	口縁部内面と体部外面に暗緑灰釉を施釉		上野・高取系	18c代	
40図21 図版18	3-SD001 第5次調査	陶器土瓶	(9.6)	11.7	(7.4)	砂粒を含む・胎土赤褐色	体部外面上位と内面に灰釉、ただし内面は部分的に露胎		肥前?	—	生焼け
40図22 図版18	3-SD001 第5次調査	磁器仏花瓶	6.6	—	—	精良・胎土灰白色	口縁部内面と体部外面に濃緑釉を流し掛け		肥前?	18c代	
40図23	3-SD001 第5次調査	土師器小皿	(8.6)	1.6	6.0	砂粒を含む	—	—	—	—	
41図24	3-SD001 第4次調査	染付小坏	—	—	(2.8)	精良	透明釉	外面草花文?	瀬戸美濃	19c後半	素描きの裏銘
41図25	3-SD001 第4次調査	青磁大皿	—	—	(10.0)	精良	淡青釉	内面手彫り	肥前	17c代?	
41図26	3-SD001 第4次調査	陶器筒形徳利	—	—	6.6	精良・胎土灰白色	外面透明釉、内面と外底部は無釉		関西系	19c	
41図27	3-SD001 第4次調査	陶器土瓶	9.2	—	—	精良・胎土褐色	外面と口縁部内面に餉釉を施釉、口縁部釉剥ぎ		—	—	
41図28	3-SD001 第4次調査	陶器水注	(11.2)	—	—	細粒を含む・胎土褐色	—	—	—	萬古焼系	—
41図29	3-SD001 第4次調査	土師質サナ	—	—	—	細粒を含む	—	—	—	—	
41図30 図版18	4-SP001	陶器皿 (波縁皿)	12.4	3.8~ 4.1	4.1	砂粒を含む・胎土灰色	内面と口縁部外面まで藁灰釉を流し掛け		上野・高取系	17c前半	
41図31	表土等 第4次調査	染付皿	—	—	(7.0)	精良	透明釉	見込み山水文	肥前	19c	蛇ノ目凹形高台、見込みにハマの痕
41図32 図版18	表土等 第4次調査	色絵蓋	(12.6)	—	—	精良	透明釉	外面に赤・青による文様	有田	17c後半	合口部釉剥ぎ

表 7 出土土器・陶磁器観察表 7

挿図番号 図版番号	出土地点	器種	法量 (cm) ※ () は推定値			素地・胎土	釉調	文様の特徴	推定産地	推定年代	備考
			口径	器高	底径						
41図33 表土等 第4次調査	白磁紅皿	(4.4)	1.3	(0.9)	精良	透明釉	型押し成形で、外面菊花状	肥前	19c代	内面と口縁部付近のみ施釉	
41図34 表土等 第4次調査	白磁紅皿	(6.4)	1.9	(2.4)	精良	透明釉	型押し成形で、外面蛸唐草文	肥前	19c中頃	内外面施釉	
41図35 表土等 第4次調査	陶器土瓶	(8.2)	—	—	精良・胎土褐 灰色	—	外面と口縁部内面に胎釉を施釉、口縁端 部釉剥ぎ	—	—	—	
41図36 表土等 第4次調査	土師器小皿	6.0	0.8~ 1.2	4.2	砂粒を含む	—	—	—	—	外底に糸切り痕	
41図37 表土等 第4次調査	土師器皿	(11.0)	2.0~ 2.2	6.0	砂粒を含む	—	—	—	—	内底に煤付着	
41図38 表土等 第4次調査	土師質七厘	(28.4)	—	—	砂粒を含む	—	—	—	—	—	
41図39 表土等 第4次調査	土師質サナ	—	—	—	細粒を含む	—	—	—	—	—	
41図40 表土等 第4次調査	土師質ハマ	7.8	1.1	8.0	細粒を多く含 む	—	—	—	—	硬質	
41図41 表土等 第5次調査	陶胎染付皿	—	—	(11.5)	細粒を含む・ 胎土褐色	透明釉	見込み鳥文	肥前	17c末	畳付釉剥ぎ	
41図42 表土等 第5次調査	白磁紅皿	(4.6)	1.4	1.5	精良	透明釉	型押し成形で、外面菊花状	肥前	19c代	内面と口縁部付近のみ施釉	
41図43 表土等 第5次調査	染付合子	(5.4)	1.0	(5.4)	精良	透明釉	外面文様不明	肥前	19c	裾先釉剥ぎ	
41図44 表土等 第5次調査	陶器皿	—	—	4.4	砂粒を含む・ 胎土褐灰色	—	全面に灰釉を施釉後、見込みに白土を掛 けてハケ目文様	上野・高取系	17c末~18c前 半	高台内の削り込みが深い	
41図45 表土等 第5次調査	土師器皿	—	—	5.6	砂粒を含む	—	—	—	—	割れ口断面にも煤付着、灯明 皿	
41図46 表土等 第5次調査	瓦質火鉢	(32.4)	—	—	細粒を含む	—	—	—	—	—	
41図47 表土等 第5次調査	土師質サナ	—	—	—	細粒を含む	—	—	—	—	—	
42図1 3トレンヂ 第7次調査	染付小碗	(5.8)	5.8	(4.2)	精良	透明釉	外面文様不明、口縁内面雷文	肥前	—	—	
42図2 3トレンヂ 図版18 第7次調査	染付角皿	(25.8)	4.6	(14.8)	精良	透明釉	外面唐草文、内面鳳凰文	肥前	19c代	—	
42図3 3トレンヂ 図版18 第7次調査	染付角皿	(23.0)	4.6	13.8	精良	透明釉	外面波文、見込み鳳凰文、口 縁内面人物文	肥前	19c代	高台内に「乾」	
42図4 3トレンヂ 図版18 第7次調査	染付鉢	(18.6)	8.0	(11.8)	精良	透明釉	外面葉文、見込み花文	肥前	19c代?	蛇ノ目凹形高台	
42図5 表土等 第7次調査	染付碗	(10.0)	5.0	(4.2)	精良	透明釉	外面草花文	肥前	18c末~19c初	—	
42図6 表土等 第7次調査	染付碗	(9.4)	—	—	精良	透明釉	外面草文(すずき文)	肥前	18c末~19c初	—	
42図7 表土等 第7次調査	染付碗	—	—	(4.0)	精良	透明釉	外面紅葉文、見込み環状松竹 梅文	—	—	—	
42図8 表土等 第7次調査 図版18	染付筒形碗	(7.0)	5.2	(3.6)	精良	透明釉	外面半菊文、斜格子文散し	肥前	18c後半	—	
42図9 表土等 第7次調査 図版18	染付小碗	(7.6)	3.7	2.8	精良	透明釉	外面繁文、見込みに落款	肥前	19c代	—	
42図10 表土等 第7次調査	染付小皿	9.6	2.6	(4.4)	精良	透明釉	内面笹文	肥前	18c後半~19c	見込み蛇ノ目釉剥ぎ	
42図11 表土等 第7次調査 図版18	色柄皿	(12.0)	2.8	(7.8)	精良	透明釉	内面に青・金による蝶葉文	—	—	—	
42図12 表土等 第7次調査 図版18	白磁皿	10.0	2.0	5.4	精良	透明釉	内面に「壽」の字を文様化した印 を押し付けられている	瀬戸美濃	明治期	—	
42図13 表土等 第7次調査	色柄蓋	—	—	(4.2)	精良	透明釉	外面に青・赤・薄緑・薄茶に よる文様	—	—	つまみ内に銘	
42図14 表土等 第7次調査 図版18	染付段重 (蓋)	(13.4)	—	—	精良	透明釉	外面に微塵唐草文	肥前	19c代	—	
42図15 表土等 第7次調査	白磁紅皿	(5.8)	1.0	(2.2)	精良	透明釉	型押し成形で、外面蛸唐草文	肥前	19c後半	内面と口縁部付近のみ施釉	
42図16 表土等 第7次調査	白磁紅皿	(5.6)	1.6	(1.0)	精良	透明釉	型押し成形で、外面蛸唐草文	肥前	19c中頃	内外面施釉	
43図17 表土等 第7次調査 図版19	陶器皿	(12.0)	4.5	4.0	精良・胎土灰 色	—	内外面に緑褐釉を総掛け	肥前?	18c後半~19c	見込み蛇ノ目釉剥ぎ、畳付釉 剥ぎ	
43図18 表土等 第7次調査	陶器皿	(12.0)	4.3	(4.2)	精良・胎土灰 色	—	内外面に緑褐釉を総掛け	肥前?	18c後半~19c	見込み蛇ノ目釉剥ぎ、畳付釉 剥ぎ	
43図19 表土等 第7次調査 図版19	陶器土瓶	(7.8)	—	—	細粒を含む・ 胎土黄灰色	—	外面白色釉で施釉、鳥文(鉄絵)	関西系	19c?	—	
43図20 表土等 第7次調査	陶器土瓶蓋	(7.0)	—	—	細粒を含む・ 胎土黄灰色	—	外面白色釉で施釉、鉄絵による施文	関西系	19c?	—	
43図21 表土等 第7次調査 図版19	陶器土瓶蓋	5.0	2.6	—	細粒を含む・ 胎土黄灰色	—	外面緑色釉で施釉後、緑白色釉を流し掛 け	関西系	19c?	—	
43図22 表土等 第7次調査	陶器瓶	—	—	(10.2)	砂粒を含む・ 胎土明褐色	—	体部外面に緑色釉	上野・高取系	—	—	
43図23 表土等 第7次調査	陶器描鉢	(27.6)	—	—	細粒を含む・ 胎土暗赤褐色	—	内外面に鉄釉	上野・高取系	19c代?	櫛目の上端をヨコナデで揃え る	
43図24 表土等 第7次調査	陶器描鉢	(27.6)	9.0	(9.8)	細粒を含む・ 胎土暗赤褐色	—	内外面に鉄釉	上野・高取系	19c代?	櫛目の上端をヨコナデで揃え る	
43図25 表土等 第7次調査	瓦質羽釜	—	—	—	細粒を含む	—	—	産地不明	—	羽上面に煤付着	

V. 自然科学分析

内野宿御茶屋跡で実施した自然科学分析については、1. 植物珪酸体分析、2. 花粉分析、3. 種実同定、4. 樹種同定、5. 放射性炭素年代測定である。以下、分析項目毎に試料の詳細、分析方法・結果および考察・所見を記載する。

1. 内野宿御茶屋跡における植物珪酸体分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 (SiO_2) が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている (杉山, 2000)。

2. 試料

分析試料は、内野宿御茶屋跡第2次調査で確認された池跡 (2-SX002) の埋土から採取された計7点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法 (藤原, 1976) を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を 105°C で 24 時間乾燥 (絶乾)
- 2) 試料約 1 g に対し直径約 $40\ \mu\text{m}$ のガラスビーズを約 0.02 g 添加 (0.1 mg の精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法 (550°C ・ 6 時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W ・ 42kHz ・ 10 分間) による分散
- 5) 沈底法による $20\ \mu\text{m}$ 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400 倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。試料 1 g あたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料 1 g 中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重 (1.0 と仮定) と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重) をかけて、単位面積で層厚 1 cm あたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる (杉山, 2000)。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4. 分析結果

(1) 分類群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表 1 および図 1 に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

イネ、キビ属型、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ属A（チガヤ属など）

[イネ科-タケ亜科]

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等

[イネ科-その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

[樹木]

ブナ科（シイ属）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）、その他

(2) 植物珪酸体の検出状況

下位の40層（試料4~7）では、イネ、ウシクサ属A、メダケ節型、ネザサ節型、ミヤコザサ節型、および樹木（照葉樹）のブナ科（シイ属）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）などが検出されたが、いずれも比較的少量である。イネの密度は700~2,700個/gと比較的低い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている5,000個/g（状況により3,000個/gとする場合もある）を下回っている。29層（試料3）から26層（試料1）にかけても、おおむね同様の結果であり、イネの密度は1,500~2,500個/gと比較的低い値である。なお、ムギ類やヒエなどのイネ科栽培植物に由来する植物珪酸体はいずれの試料からも検出されなかった。おもな分類群の推定生産量によると、おおむねイネが優勢となっている。

表1 内野宿御茶屋跡における植物珪酸体分析結果

検出密度 (単位: ×100個/g)		池跡 (2-S3002)						
分類群	学名	1	2	3	4	5	6	7
イネ科								
Gramineae								
イネ	<i>Oryza sativa</i>	23	25	15	14	20	27	7
キビ属型	Panicaceae type		6					
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type					7		7
ウシクサ属A	Andropogoneae A type	38	13			7	13	7
タケ亜科								
Bambusoideae								
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	8	19		21	13	20	7
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	30	13	7	63	20	20	7
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	8		7	14	7	7	7
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	15	13	7	35	60	40	49
未分類等	Others	30	25	22	77	80	73	42
その他のイネ科								
Others								
表皮毛起源	Husk hair origin	8	13	7		20		
棒状珪酸体	Rodshaped	23	44	7	63	40	47	35
未分類等	Others	98	51	30	70	60	33	118
樹木起源								
Arboreal								
ブナ科(シイ属)	<i>Castanopsis</i>	8	13	7	14		7	7
クスノキ科	Lauraceae	30	6	7	28	13	27	21
マンサク科(イスノキ属)	<i>Distylium</i>	30	44	7	35		13	21
その他	Others	53	13	37	49	7	53	28
植物珪酸体総数	Total	401	298	164	487	360	372	382
おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/n²・cm) ; 試料の仮比重を1.0と仮定して算出								
イネ	<i>Oryza sativa</i>	0.67	0.75	0.44	0.41	0.59	0.78	0.20
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type					0.08		0.09
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	0.09	0.22		0.24	0.15	0.23	0.08
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	0.15	0.06	0.04	0.30	0.10	0.10	0.03
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	0.06		0.06	0.10	0.05	0.05	0.05
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	0.05	0.04	0.02	0.10	0.18	0.12	0.15
タケ亜科の比率 (%)								
Others								
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	26	69		32	32	47	26
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	43	19	31	40	20	19	11
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	17		49	14	10	10	17
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	14	12	20	14	37	24	47
メダケ率	Medake ratio	70	88	31	72	52	66	37

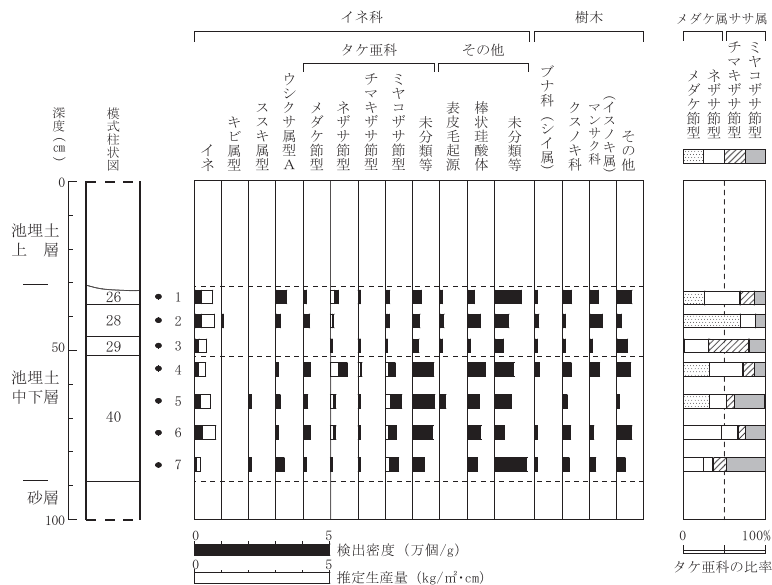


図1 内野宿御茶屋跡における植物珪酸体分析結果

5. 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

池跡の埋土（26、28、29、40層）では、すべての試料から比較的少量のイネが検出された。このことから、当時は周辺で稲作が行われており、そこから何らかの形でイネの植物珪酸体もしくは稲藁が混入したと考えられる。稲藁の利用としては、建物の屋根材や壁材、敷物、履物、俵、縄など多様な用途が想定される。また、遺構周辺の比較的乾燥したところにはメダケ属（メダケ節やネザサ節）やササ属（おもにミヤコザサ節）などの竹笹類をはじめウシクサ族などのイネ科草本類も生育していたと考えられ、遺跡周辺にはシイ属、イスノキ属、クスノキ科などの照葉樹林が分布していたと推定される。

今回の分析では、竹林として植栽された可能性のあるマダケ属（マダケ、モウソウチクなど）の検出が期待されたが、これを示すような結果は得られなかった。

【文献】

- 杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定—古環境推定の基礎資料として—。考古学と自然科学，19，p. 69-84.
- 杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史。第四紀研究，38(2)，p. 109-123.
- 杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）。考古学と植物学。同成社，p. 189-213.
- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法—。考古学と自然科学，9，p. 15-29.
- 藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)—プラント・オパール分析による水田址の探査—。考古学と自然科学，17，p. 73-85.

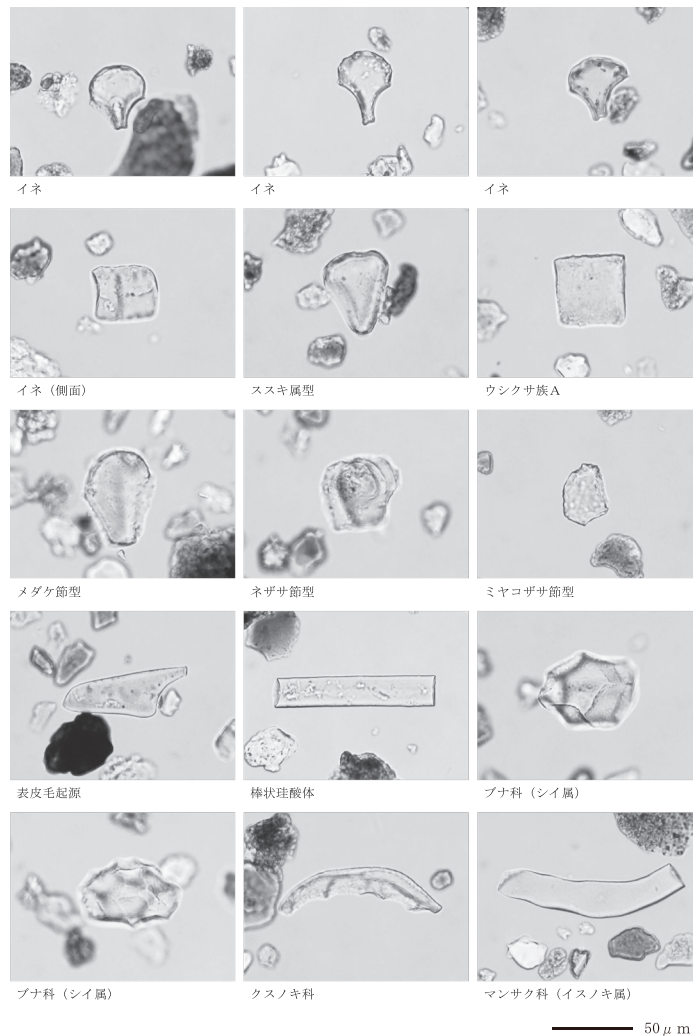


写真1 内野宿御茶屋跡の植物珪酸体(プラント・オパール)

2. 内野宿御茶屋跡における花粉分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復元に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2. 試料

分析試料は、内野宿御茶屋跡第2次調査で確認された池跡（2-SX002）の埋土から採取された計5点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

3. 方法

花粉の分離抽出は、中村（1967）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から1 cm³を秤量
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加えて15分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 4) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 5) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す
- 6) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 7) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とした。

4. 結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉11、樹木花粉と草本花粉を含むもの5、草本花粉13、シダ植物孢子2形態の計31である。なお、寄生虫卵は認められなかった。分析結果を表2に示し、花粉数が100個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

マツ属複維管束亜属、スギ、クルミ属、ハシバミ属、クマシデ属ーアサダ、クリ、シイ属ーマテバシイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、モチノキ属、ブドウ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科ーイラクサ科、バラ科、マメ科、ウコギ科、ニワトコ属ーガマズミ属

〔草本花粉〕

イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、キンボウゲ属、アブラナ科、ツリフネソウ属、ヤブガラシ、アリノトウグサ属-フサモ属、セリ亜科、キク亜科、ヨモギ属

[シダ植物胞子]

単条溝胞子、三条溝胞子

(2) 花粉群集の特徴

40層下部(試料6)では、花粉密度が低く、草本花粉の占める割合が約60%、樹木花粉が約25%、シダ植物胞子が約15%である。草本花粉ではイネ科、ヨモギ属が優勢で、アブラナ科、ヤブガラシ、ツリフネソウ属、キク亜科、アカザ科-ヒユ科などが伴われる。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属が優勢で、コナラ属コナラ亜属、クリ、シイ属-マテバシイ属、マツ属複雑管束亜属などが伴われる。40層上部(試料4)では、花粉密度が低く、草本花粉の占める割合が約50%、シダ植物胞子が約35%、樹木花粉が約15%である。草本花粉ではアブラナ科が増加し、イネ属型も認められた。樹木花粉ではシイ属-マテバシイ属が増加し、コナラ属アカガシ亜属、クリは減少している。

29層(試料3)から26層(試料1)にかけては、花粉がほとんど検出されなかった。

表2 内野宿御茶屋跡における花粉分析結果

学名	分類群	和名	池跡 (2-SX002)					
			1	2	3	4	6	
Arboreal pollen		樹木花粉						
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>		マツ属複雑管束亜属				3	2	
<i>Cryptomeria japonica</i>		スギ				1		
<i>Juglans</i>		クルミ属					1	
<i>Corylus</i>		ハンパミ属					1	
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>		クマシデ属-アサダ				1		
<i>Castanea crenata</i>		クリ	1		1	1	4	
<i>Castanopsis-Pasania</i>		シイ属-マテバシイ属	1	2		9	3	
<i>Quercus</i> subgen.		コナラ属コナラ亜属	1			9	7	
<i>Lepidobalanus</i>								
<i>Quercus</i> subgen.		コナラ属アカガシ亜属				3	13	
<i>Cyclobalanopsis</i>								
<i>Ilex</i>		モチノキ属			1			
<i>Vitis</i>		ブドウ属				1	1	
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉						
Moraceae-Urticaceae		クワ科-イラクサ科				1	2	
Rosaceae		バラ科					1	
Leguminosae		マメ科				2		
Araliaceae		ウコギ科				1	1	
<i>Sambucus-Viburnum</i>		ニワトコ属-ガマズミ属				1		
Nonarboreal pollen		草本花粉						
Gramineae		イネ科		1		14	25	
<i>Oryza type</i>		イネ属型				1		
Cyperaceae		カヤツリグサ科				3	1	
Chenopodiaceae		アカザ科-ヒユ科				5	2	
-Amaranthaceae								
Caryophyllaceae		ナデシコ科				1		
<i>Ranunculus</i>		キンボウゲ属					1	
Cruciferae		アブラナ科		2		23	9	
<i>Impatiens</i>		ツリフネソウ属				8	4	
<i>Cayratia japonica</i>		ヤブガラシ				10	7	
<i>Halenia-Myriophyllum</i>		アリノトウグサ属				2		
		-フサモ属						
Apiaceae		セリ亜科					2	
Asteroidae		キク亜科					3	
<i>Artemisia</i>		ヨモギ属					26	
Fern spore		シダ植物胞子					19	
Monolate type spore		単条溝胞子	1	3		42	7	
Trilate type spore		三条溝胞子	2	5	4	16	8	
Arboreal pollen		樹木花粉	3	2	2	28	32	
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉	0	0	0	5	4	
Nonarboreal pollen		草本花粉	0	3	0	93	73	
Total pollen		花粉総数	3	5	2	126	109	
Pollen frequencies of 1cm ³		試料1cm ³ 中の花粉密度	2.8	4.9	1.4	5.0	4.8	
		×10 ³	×10 ³	×10 ³	×10 ²	×10 ²	×10 ²	
Unknown pollen		未同定花粉	1	2	0	14	10	
Fern spore		シダ植物胞子	3	8	4	58	15	
Helminth eggs		寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	
Digestion remains		明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	
Charcoal fragments		微細炭化物				(+)	(+)	

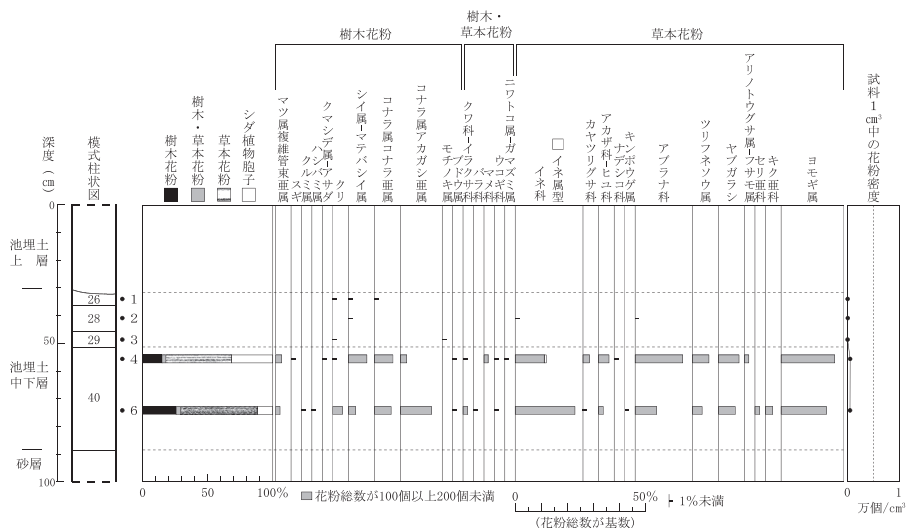


図2 内野宿御茶屋跡における花粉分析結果

5. 花粉分析から推定される植生と環境

池跡の埋土下部(40層)の堆積当時は、遺構周辺はイネ科、ヨモギ属、アブラナ科、ヤブガラシ、アカザ科-ヒユ科、シダ植物などの草本類が生育する日当たりの良い比較的乾燥した環境であったと考え

られ、部分的に半日陰を好むツリフネソウ属などの草本も生育していたと推定される。また、少量ながらイネ属型が認められることから、周辺で稲作が行われていたことが示唆される。アブラナ科には、アブラナ（なたね）、ダイコン、ハクサイ、タカナ、カブなど多くの栽培植物が含まれており、これらが栽培されていた可能性も考えられる。森林植生としては、周辺地域にコナラ属アカガシ亜属、シイ属マテバシイ属などの照葉樹、コナラ属コナラ亜属（ナラ類）、クリなどの落葉樹、マツ属複維管束亜属（クロマツ、アカマツ）などの針葉樹が分布していたと推定される。

池跡の埋土上部（29・28・26層）では、花粉がほとんど検出されなかった。花粉が検出されない原因としては、乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことなどが考えられる。

【文献】

- 金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p. 248-262.
 島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集，60p.
 中村純（1967）花粉分析．古今書院，p. 82-110.
 中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（*Oryza sativa*）を中心として．第四紀研究，13，p. 187-193.
 中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号，p. 21-30.
 中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.

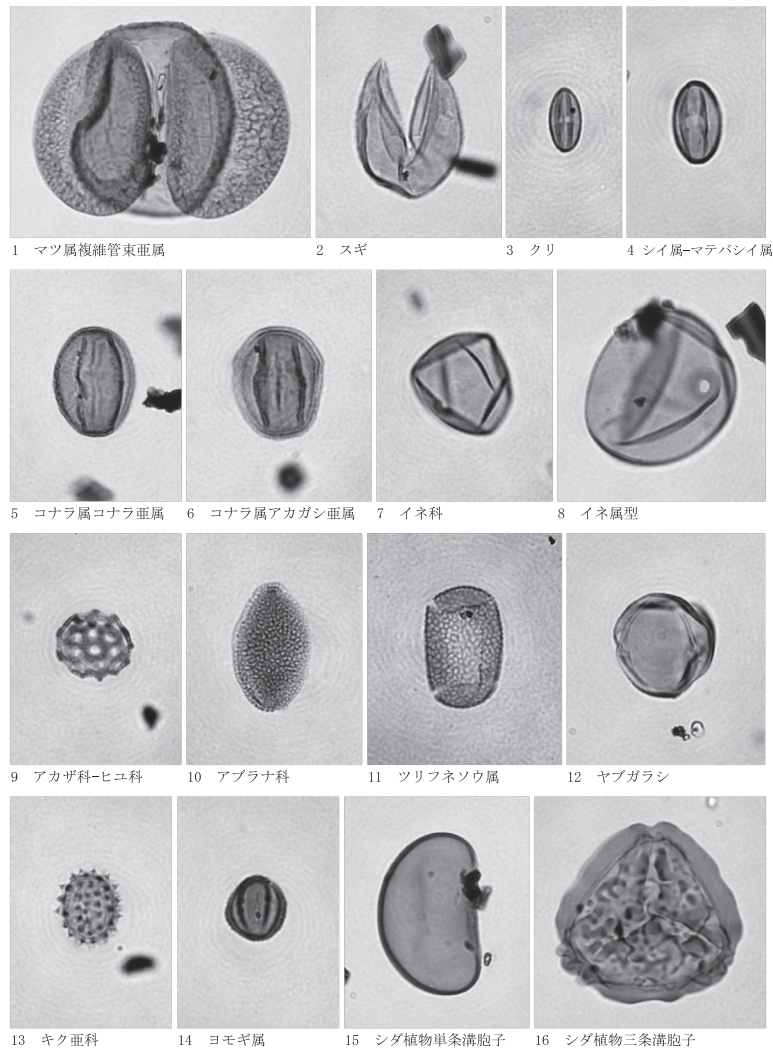


写真2 内野宿御茶屋跡の花粉・胞子

— 10 μm

3. 内野宿御茶屋跡における種実同定

株式会社 古環境研究センター

1. はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物や遺構内などに残存している場合がある。堆積物や遺構埋土などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や植物利用の実態を明らかにすることができる。

2. 試料

試料は、2-SX013、第7次調査において御式台南側に設定した tr1 とその周辺の表土等から採取された炭化種実類 (No.1～No.17) である。試料の詳細を表1に示す。

3. 分析法

種実類について肉眼および双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

4. 結果

種実同定の結果、炭化種実類 (No.1～No.17) は、いずれもイチョウ (種子・内種皮・外種皮) と同定された。分析結果を表1に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記載し、おもな試料の写真を示す。

[樹木]

イチョウ *Ginkgo biloba* L. 種子・内種皮・外種皮 イチョウ科

外種皮、内種皮、種子は炭化して黒色である。種子は楕円形ないしやや扁平。左右の縁は稜をなし、両端は短く尖る。小凹点による模様があり、堅い核状で光沢は弱い。外種皮は光沢はなく、広楕円状球形を呈し、果皮状である。内種皮は光沢は弱く楕円形でやや扁平を呈し、左右の縁は稜をなし、両端は短く尖り堅い核状である。

5. 所見

炭化種実類 (No.1～No.17) は、いずれもイチョウ (種子・内種皮・外種皮) と同定された。イチョウの種子 (銀杏) は、食用や薬用として利用される。イチョウは 14 世紀に伝来したとされ、耐寒耐暑性があり強健で抵抗力も強いことから、全国に植栽されて室町時代中期には一般化していたと考えられている。イチョウの葉は防虫効果があるとされ、古文書から葉が発見される事例がある。

【文献】

笠原安夫 (1985) 日本雑草図説, 養賢堂, 494p.

南木陸彦 (1993) 葉・果実・種子. 日本第四紀学会編, 第四紀試料分析法, 東京大学出版会, p. 276- 283.

4. 内野宿御茶屋跡における樹種同定

株式会社 古環境研究センター

1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2. 試料

試料は、池跡 (2-SX002) から採取された炭化材 (No.18) および 7-SX004 から採取された木片 (No.19) である。

3. 方法

以下の手順で樹種同定を行った。

- 1) 試料を洗浄して付着した異物を除去
- 2) 生材はカミソリで切り取り、炭化材は試料を割折して、木材の基本的三断面（横断面：木口、放射断面：柾目、接線断面：板目）の切片を作成
- 3) 生材は生物顕微鏡、炭化材は落射顕微鏡で観察し（40～1000倍）、木材の解剖学的形質や現生標本との対比で樹種を同定

4. 結果

表1に同定結果を示し、写真図版に各分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった木材構造の特徴を記す。

イチョウ *Ginkgo biloba* L. イチョウ科

仮道管、異形細胞および放射柔細胞から構成される。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭く細胞部の厚さの変化がほぼなく、比較的均質な材である。仮道管の大きさは不揃いであり、横断面の形は多角形のものが多く、仮道管の半径方向の配列が整然としていない傾向がある。異形細胞は大型で、周囲の仮道管よりも薄壁でほぼ均質に散在し、金平糖状の結晶を含む。放射組織はすべて放射柔細胞からなり、単列で1～10細胞高で仮道管の半径壁に1～2列に並んだ有縁壁孔があり、中央に薄壁の細胞が縦に連なる。接線断面で有縁壁孔の正面がしばしば観察される。

以上の特徴からイチョウに同定される。イチョウは北海道、本州、四国、九州に14世紀以降に植栽される。落葉の大高木で大きいもので高さ30m、径4mに達する。

サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科

小型の道管が単独ないし2個複合して密に散在する散孔材である。放射断面では道管の穿孔が階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く60を越えるものも観察される。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる異性放射組織型で単列を示す。

以上の特徴からサカキに同定される。サカキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑高木で、通常高さ8～10m、径20～30cmである。

5. 所見

樹種同定の結果、池跡（2-SX002）から採取された炭化材（No.18）はサカキ、7-SX004から採取された木片（No.19）はイチョウと同定された。

サカキの材は強靱で堅硬であり、建築材、器具、漆碗、楔などに用いられ、薪炭材としても有用である。また、枝葉は神事に利用される。サカキは常緑高木で、照葉樹林の構成要素である。

イチョウの材は木理直通、肌目緻密、硬軟中庸であり、加工が容易で表面仕上げが良く光沢がある良材である。彫刻材、漆塗の林地、碁盤などに利用され、油分が豊富で耐朽・保存性が高く水湿に強く抗菌性があることから、まな板などにも利用される。

【文献】

- 伊東隆夫・山田昌久（2012）木の考古学。出土木製品用材データベース。海青社，449p.
島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司（1985）木材の構造。文永堂出版，290p.
島地 謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧。雄山閣，296p.
山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成—用材から見た人間・植物関係史。植生史研究特別1号。植生史研究会，242p.

表3 内野宿御茶屋跡における種実同定・樹種同定結果

番号	調査回数	出土遺構・地点	層位	種別	状態	結果(学名/和名)	部位	個数	備考
No.1	第2次	2-SX013		種実	炭化	<i>Ginkgo biloba</i> L. イチョウ	種子破片	7	
No.2	第2次	2-SX013		種実	炭化	<i>Ginkgo biloba</i> L. イチョウ	種子破片	1	
No.3	第2次	2-SX013		種実	炭化	<i>Ginkgo biloba</i> L. イチョウ	種子	1	
No.4	第7次	御式台南側	下層	種実	炭化	<i>Ginkgo biloba</i> L. イチョウ	外種皮	1	
No.5	第7次	御式台南側	下層	種実	炭化	<i>Ginkgo biloba</i> L. イチョウ	外種皮	1	
No.6	第7次	御式台南側	下層	種実	炭化	<i>Ginkgo biloba</i> L. イチョウ	外種皮破片	1	種子残存
No.7	第7次	3トレンチ	上層	種実	炭化	<i>Ginkgo biloba</i> L. イチョウ	外種皮破片	1	種子残存
No.8	第7次	御式台南側	下層	種実	炭化	<i>Ginkgo biloba</i> L. イチョウ	種子	1	
No.9	第7次	御式台南側	下層	種実	炭化	<i>Ginkgo biloba</i> L. イチョウ	外種皮破片	2	
							種子	1	
No.10	第7次	御式台南側	下層	種実	炭化	<i>Ginkgo biloba</i> L. イチョウ	内種皮	1	
No.11	第7次	御式台南側	下層	種実	炭化	<i>Ginkgo biloba</i> L. イチョウ	外種皮破片	1	種子残存
No.12	第7次	3トレンチ	上層	種実	炭化	<i>Ginkgo biloba</i> L. イチョウ	外種皮	1	
No.13	第7次	3トレンチ	下層	種実	炭化	<i>Ginkgo biloba</i> L. イチョウ	内種皮	1	外種皮残存
No.14	第7次	3トレンチ	下層	種実	炭化	<i>Ginkgo biloba</i> L. イチョウ	内種皮破片	3	種子残存
No.15	第7次	3トレンチ	下層	種実	炭化	<i>Ginkgo biloba</i> L. イチョウ	内種皮	1	
No.16	第7次	御式台南側	下層	種実	炭化	<i>Ginkgo biloba</i> L. イチョウ	種子破片	1	
No.17	第7次	御式台南側	下層	種実	炭化	<i>Ginkgo biloba</i> L. イチョウ	内種皮	1	外種皮残存
No.18	第2次	2-SX002 (池跡)	上層	木材	炭化	<i>Cleyera japonica</i> Thunb. サカキ			
No.19	第7次	7-SX004		木材	生	<i>Ginkgo biloba</i> L. イチョウ			

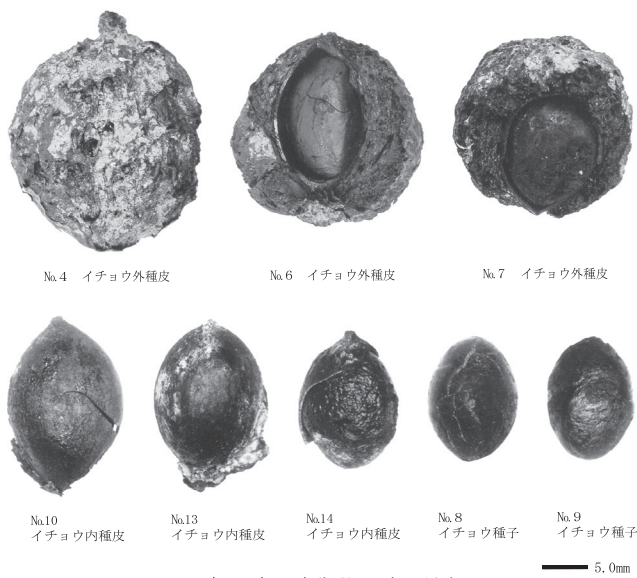


写真3 内野宿御茶屋跡の種実

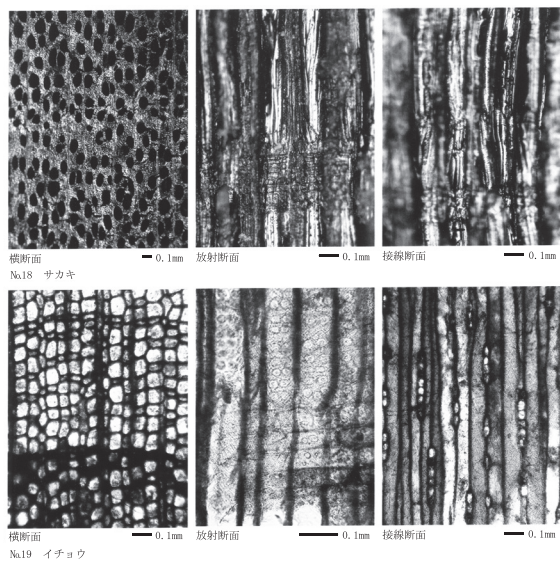


写真4 内野宿御茶屋跡の木材

5. 内野宿御茶屋跡における放射性炭素年代測定

株式会社 古環境研究センター

1. はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 (^{14}C) の濃度が放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土器付着炭化物などが測定対象となり、約5万年前までの年代測定が可能である(中村, 2003)。

2. 試料と方法

試料は、No.2 (炭化種実)、No.15 (炭化種実)、No.18 (炭化材) の3点である。表2に試料の詳細を示す。試料の前処理・調整として、超音波洗浄、有機溶剤処理(アセトン使用)、酸-アルカリ-酸処理(AAA処理)を行い、測定は加速器質量分析法(AMS法: Accelerator Mass Spectrometry)で行った。

3. 測定結果

AMS法によって得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素(^{14}C)年代および暦年代(較正年代)を算出した。表2にこれらの結果を示し、図1に各試料の暦年較正結果(較正曲線)、図2に暦年較正年代マルチプロット図を示す。

(1) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を -25 (‰)に標準化することで同位体分別効果を補正している。

(2) 放射性炭素(^{14}C)年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、現在(AD 1950年基点)から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5730年であるが、国際的慣例によりLibbyの5568年を使用している。付記した統計誤差(\pm)は 1σ (68.2%確率)である。 ^{14}C 年代値は下1桁を丸めて表記するのが慣例であるが、暦年較正曲線が更新された場合のために下1桁を丸めない暦年較正用年代値を併記した。

(3) 暦年代(Calendar Years)

放射性炭素(^{14}C)年代を実際の年代値に近づけるために、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動や ^{14}C の半減期の違いを較正している。暦年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な ^{14}C 測定値および福井県水月湖の年縞堆積物データなどにより作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータはIntCal 20、較正プログラムはOxCal 4.4である。

暦年代(較正年代)は、 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し、OxCalの確率法により 2σ (95.4%確率)で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の値が表記される場合もある。

()内の%表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4. 所見

加速器質量分析法(AMS)による放射性炭素年代測定の結果、No.2 (イチョウの炭化種実)では 115 ± 20 年BP (2σ の暦年代でAD 1687~1730, 1806~1925年)、No.15 (イチョウの炭化種実)では 190 ± 20 年BP (AD 1660~1688, 1730~1807, 1925年~)、No.18 (サカキの炭化材)では 215 ± 20 年BP (AD 1646

表 4 内野宿御茶屋跡出土資料の放射性炭素年代測定結果

試料 No.	測定No. PED-	試料の詳細	種類	前処理 測定法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	^{14}C 年代 (年BP)	暦年較正用 年代(年BP)	暦年代(較正年代)	
								1 σ (68.2%確率)	2 σ (95.4%確率)
2	44201	2-SX013	炭化種実 (イチョウ)	超音波洗浄 有機溶剤処理 AAA処理 AMS法	-25.11 ± 0.13	115 ± 20	114 ± 19	cal AD 1694-1712 (11.5%) cal AD 1717-1725 (5.0%) cal AD 1812-1824 (7.6%) cal AD 1831-1894 (36.1%) cal AD 1904-1916 (8.1%)	cal AD 1687-1730 (24.4%) cal AD 1806-1925 (71.1%)
15	44202	第7次調査3トレンチ	炭化種実 (イチョウ)	超音波洗浄 有機溶剤処理 AAA処理 AMS法	-26.82 ± 0.14	190 ± 20	189 ± 19	cal AD 1665-1680 (16.3%) cal AD 1739-1753 (14.3%) cal AD 1762-1784 (23.8%) cal AD 1794-1800 (5.2%) cal AD 1939 ... (8.7%)	cal AD 1660-1688 (21.1%) cal AD 1730-1807 (59.0%) cal AD 1925 ... (15.3%)
18	44203	2-SX002 (池跡)	炭化材 (サカキ)	超音波洗浄 有機溶剤処理 AAA処理 AMS法	-27.64 ± 0.16	215 ± 20	213 ± 19	cal AD 1655-1672 (28.9%) cal AD 1777-1798 (39.3%)	cal AD 1646-1684 (35.7%) cal AD 1736-1803 (55.7%) cal AD 1936 ... (4.0%)

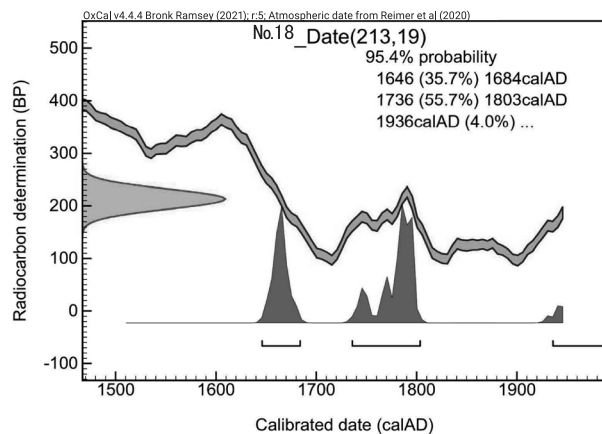
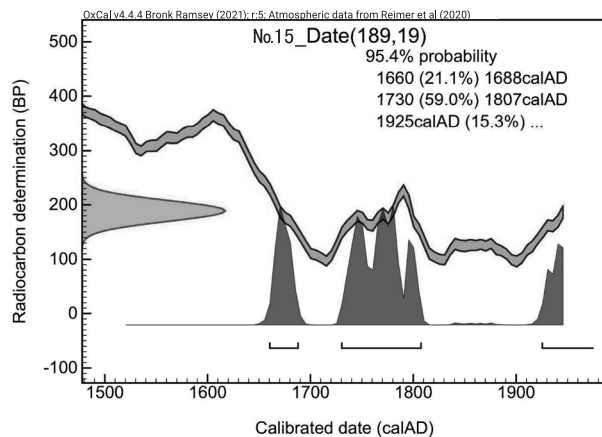
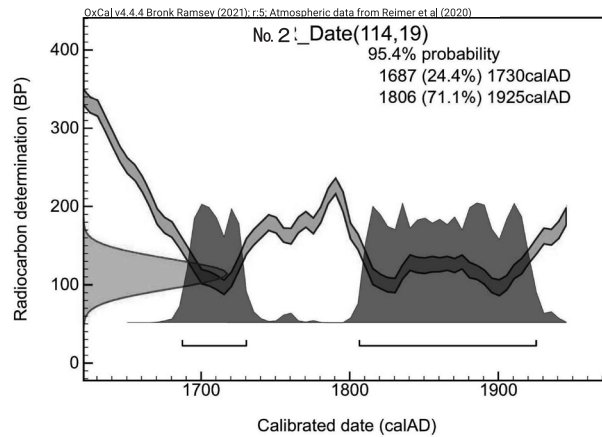


図3 暦年較正結果

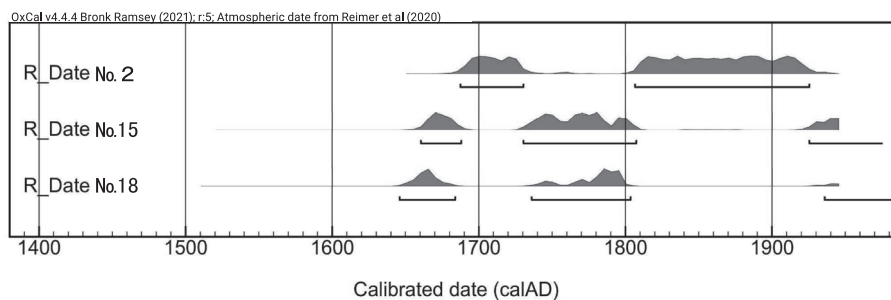


図4 暦年代校正年代マルチプロット図

～1684, 1736～1803, 1936年～)の年代値が得られた。参考までに、複数の暦年代のうち最も確率の高いものを採用すると、No.2の暦年代は1806～1925年、No.15は1730～1807年、No.18は1736～1803年となる。

なお、樹木(炭化材)による年代測定結果は、樹木の伐採年もしくはそれより以前の年代を示しており、樹木の心材に近い部分や転用材が利用されていた場合は、考古学的所見よりも古い年代値となることがある。

【文献】

中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」. 日本第四紀学会, p.3-20.

中村俊夫(2003)放射性炭素年代測定法と暦年代校正. 環境考古学マニュアル. 同成社, p.301-322.

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), p.337-360.

Paula J Reimer et al., (2020) The IntCal 20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 kcal BP). Radiocarbon, 62(4), p.725-757.

VI. 総括

内野宿御茶屋跡の範囲

内野宿御茶屋跡の範囲については、Ⅲ－2で述べたように調査前より文献資料、写真資料、地元の方の証言や周辺の地形により第6図のように想定されていたが、調査によって概ね想定通りの範囲であることが明らかとなった。範囲の北限については、第1次調査において番所跡1-SB001と調査区北壁側沿いの地形の落込みが確認され、これらにより北限については想定された。南限については、池跡2-SX002・物置跡4-SB001・材木小屋跡4-SB002・流路3-SD001により求めることが出来る。範囲の西限は、池跡より概ね推定された。一方、範囲の東限については地形の削平により、発掘調査では明らかに出来なかった。そのため、『内野御茶屋絵図』（以下、『絵図』）や地形等を考慮に入れ推測した。つまり、現在のところ御茶屋跡の範囲については、南北長については物置跡・材木小屋跡から第1次調査2区で確認された地形の落込み上端ラインまでを計測して65m程度、東西長は『絵図』や地形などから60m程度と推定された。

内野宿御茶屋の成立時期

内野宿御茶屋の成立時期については、文献資料での初見が『筑前国続風土記』（以下、『続風土記』）と考えられるので、その編纂開始された元禄期（1688～1704）まで遡ることは従前より知られていた。今回の調査により多くの出土遺物が確認されたことにより、ここでは出土遺物から内野宿御茶屋の成立時期を考えたい。この成立時期を考える上で重要な資料となるのが、第2次調査において御茶屋跡の整地層中から出土した陶磁器（第36図30～34）と池跡2-SX002下層出土の陶磁器（第34図）であろう。整地層中から出土した陶磁器の時期は17世紀初頭～17世紀前半までのものであり、また池跡2-SX002下層出土の陶磁器の時期についても、その上限は17世紀前半に求められよう。さらに、流路跡3-SD001出土陶磁器においても17世紀前半～19世紀代と年代的に幅広いものが出土しているが、その中で17世紀前半のものが一定量出土している。以上のことから、内野宿御茶屋跡の成立時期は、17世紀前半頃の時期と推定された。

御茶屋絵図と遺構について

調査により検出された遺構については、その位置・規模から『絵図』と照合すると、主屋、番所跡、物置跡、材木小屋跡、道具蔵跡、池跡と同定することが出来た。『絵図』には建物の柱位置も描かれていることから、検出された遺構の規模と位置関係から『絵図』との照合は容易である。ただし、主屋が礎石を有する建物であったことは、今回の発掘調査で初めて明らかとなった大きな発見であった。実際に検出された遺構と『絵図』を照合すると、建物配置などの点では発掘調査の成果と概ね合致したが、第9次調査において確認された主屋跡（9-SB001）



第55図 御茶屋空間構成推定図

と第7次調査において確認された主屋跡（7-SB001）の東西柱筋のズレ、物置跡と材木小屋跡の建物構造に相違する点も見受けられた。『絵図』との相違については調査では明らかに出来なかったが、おそらく建替え・増築等がおこなわれた可能性を示すものとして考えたい。

また、『絵図』では知り得なかったが、御茶屋の敷地内においてレベル的な高低差が空間毎に見受けられることが明らかとなった。第7次調査の1～3トレンチ（第14図）と第9次調査の礎石群（9-SB001）の検出により、主屋が所在する御茶屋西側の方が御茶屋東側より50cm高く造成されていることが判明した。さらに、これまでの調査成果を踏まえると、第55図のように推定出来る。つまり、Aゾーンが標高約102.4m、Bゾーンが標高約101.9mとなり、Cゾーンの標高については不明であるがBゾーンより低い標高と考えられる。地形的にも西側の方が高くなるので、地形を活かした空間構成となっていると言えよう。

出土土器・陶磁器について

調査によりパンケース42箱程度の土器・陶磁器が出土した。遺物の時期は17世紀前半～19世紀代のものが主体をしめており、これは御茶屋の存続した時期を示すものであろう。また、福岡藩磁器御用窯であった須恵焼窯の皿（第16図4・5）が2点のみであるが出土したことは注目される。すでに筑前六宿内では、高台内に「黒崎」「山家」「原田」の銘が入った須恵焼が発掘調査によって確認されている。今回の調査で出土した皿2点はいずれも破片資料であるため、銘は明確に確認出来なかったが、筑前六宿銘入須恵焼の分布やその使用方法などを考える上で基礎資料となるものである。また、上野焼の飴壺（第37図22）や田香焼と推定される花生（第32図74）も出土しており、その流通のあり方を考える上でも良い資料となる。

出土瓦について

調査によりパンケース60箱程度の瓦類が出土した。『絵図』により内野宿御茶屋は茅葺きを主体としていることが分かるが、御茶屋の主屋の庇廻り・路次は「欠略瓦」葺き、練塀については「欠略瓦」葺きを基本としながらも、主屋北側の「御居間」「御次」「上ノ間」「次ノ間」「御湯殿」を囲繞する練塀の内側のみ「目板瓦」葺き、表御門は「本瓦」葺きと記されている。「欠略瓦」は棧瓦を表していると考えられている。

調査により出土した丸瓦と平瓦は表御門に葺かれていたものと限定されよう。ただし、出土した軒丸瓦を考えた場合、藤巴文と三巴文の2タイプがあり、両者がどのように葺かれていたかは分からないが、量的に藤巴文の軒丸瓦は1点のみであるため、三巴文の軒丸瓦が主体に葺かれ、副次的に藤巴文の軒丸瓦が葺かれていたと考えられる。軒平瓦については半裁花菱文を中心飾りとするタイプしか出土していないため、このタイプの軒平瓦が表御門に葺かれていたのであろう。

軒棧瓦については花菱文を中心飾りとして、唐草文とy字形子葉を配する左棧瓦⁽¹⁾のものが主体を占めていた。このタイプの軒棧瓦については、同じ筑前六宿で発掘調査が行なわれた黒崎宿・木屋瀬宿では見られないので、内野宿を含めた狭い範囲内での流通が考えられる。

目板瓦は片側の側辺に棧が付けられ、もう一方の側辺には一条の沈線が入るタイプのもので、出土量的には少ない。出土した目板瓦についても軒棧瓦と同じく左に棧を有する。主屋北側（奥向き・表向きの空間）を囲繞する練塀の内側に葺かれたものであろう。主屋施設の数奇屋風の意匠を構成するため、これらの施設（部屋）から見える練塀内側の瓦のみ差別化を図り、目板瓦にしたのであろう。棧瓦と目板瓦の使い分けについては、当時の瓦に対する価値観等が分かり面白い。

雁振瓦についてはその形状から茅葺き屋根の頂部の大棟に乗せたものと考えられ⁽²⁾、『絵図』に記載されてある主屋などの茅葺き屋根に葺かれたものと推定された。

出土した文字瓦については、「飯塚駅瓦師」の篋書き文字を有する平瓦、「飯塚宿東町彌…」の刻印を有する平瓦、「飯埴」の刻印を有する平瓦・棧瓦により、瓦の供給元についても窺い知れることができた。また、珍しい左棧瓦についても、第52図7・8の資料から、飯塚で製作されていたことが明らかとなった。寛政10年(1798)に完成した『筑前国続風土記附録』「土産考」の瓦の項には「穂波郡飯塚…にも瓦師あり。」とあり⁽³⁾、今回出土した文字瓦は飯塚の瓦師の存在を証明する資料ともなった。さらに参考資料として同じ内野宿内に所在する山内家庄屋敷跡から表採された山内家家紋入り鬼瓦(写真4・高34.2cm、幅推定45.6cm、厚8.5cm)があるが、この裏面に篋書きで「寛政五歳 飯塚弥兵…」、表面の上端両隅に第52図3と同様の刻印で「飯塚宿東町彌兵衛」とある。内野宿における瓦の供給元の1つが、同じ筑前六宿筋で隣接する宿駅の飯塚であることが明らかとなり、往時の瓦の物流形態のひとつを窺い知ることが出来た。

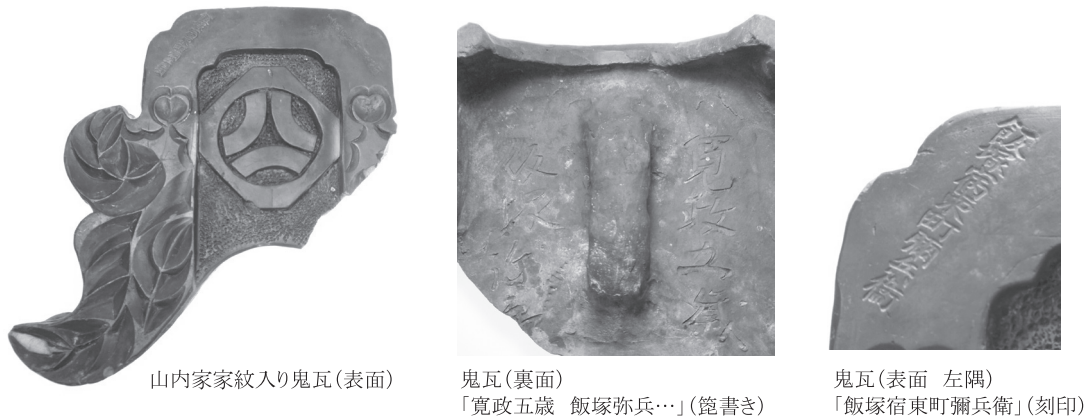


写真4 山内家庄屋敷跡表採鬼瓦

火打石等について

内野宿御茶屋跡出土の火打石との関係が推測された資料92点を検索し、4点(図版22、第54図7~9)の火打石等を確認することができた。7は石英を用いた火打石の欠片⁽⁴⁾である。長さ4.4cm、幅3.0cm、厚み1.2cm、重量14.04g。正面上部の潰れは顕著であり、部分的に鉄錆の付着も認められる。裏面とそれに接する稜線(側縁部)には火打石としての使用痕が残されていないことから、火打石としての使用時に偶発的に割れたもの、或いは意図的に鋭い稜線を再生するために打ち割られた際に生じたものである可能性がある。8は石英を用いた火打石である。長さ4.1cm、幅2.5cm、厚み1.4cm、重量12.78g。火打石の使用過程で生じた剥片の正面稜線上や側縁に潰れが残され、特に正面の稜線上の潰れは顕著である。また、部分的に、潰れに伴って鉄錆の付着が認められる。9は星野村産メノウ質石英⁽⁵⁾を用いた火打石である。長さ3.3cm、幅6.2cm、厚み1.6cm、重量16.49g。元は厚手の剥片であったとみられ、最終的に石核状になるまで使い込まれている。火打石としての使用痕は明瞭で、多くの稜線に小剥離や潰れ、さらには潰れが進んで摩滅した状況が残されている。また、図化出来なかったが、徳島県阿南市の大田井産チャートとみられる石材の

剥片（図版 22）が出土している。使用による潰れと小剥離がなく、火打石が使用された過程で生じた剥片である可能性が高い。重量 0.58 g。

星野村産メノウ質石英は、1682（天和 2）年に医師・西以三（馬間田以三とも云う）により書き上げられた地誌「筑後地鑑」（武藤他 1929 収録）に筑後国の物産として登場し、18 世紀前半～19 世紀前半の久留米城下町において、石英や大田井産チャート製のものと共に火打石として利用されたと判明している（藤木 2014b）。一方で、同石材を用いた火打石が発掘資料で確認されたのは、これまで久留米城下町のみであったため、今回の資料はその流通状況等を知る上で意味が大きい。

次に、大田井産チャートは、阿波藩の政策により広域に流通したブランド的な火打石石材である。近隣では小倉城下町・黒崎宿・久留米城下町などで出土し、さらに鹿児島大学構内遺跡や長崎県佐世保市・平戸市内他と九州一円で出土例があり、遅くとも 18 世紀初頭以降に登場することが明らかとなっており（藤木 2012・2014a）、今回の資料もその分布状況を追認するものである。

2 点確認された石英については、良質で白色のものである。これらは比較的近傍から火打石用に持ち込まれた石英である可能性が高い。

今回確認された火打石等は、これまで火打石等の出土が知られていない筑豊地域に置ける稀有な事例であり、今後の調査研究の上での重要な定点の 1 つなり得よう。また、大田井産チャートや星野村産メノウ質石英といった石材からみて、商品として購入されて用いられた、或いは旅行者等により持ち込まれたものであったと推定され、長崎街道等を介した近世後半における流通等の一端を明らかにする手がかりとして注目される。

おわりに

内野宿御茶屋跡における 9 次に亘る調査により、その範囲・成立時期・地下遺構の遺存状況などが明らかになってきた。検出された遺構については、文献資料である『絵図』との照合により建物等の同定が出来ることが明らかとなり、その復原に大きく寄与している。内野宿御茶屋跡に関して特筆される点は、この詳細に描かれた『絵図』と遺構の遺存状況の良さにあると思われる。

内野宿御茶屋跡の調査成果が、歴史の道百選である「冷水越え」と併せて、長崎街道に関する文化財の見直しや往時の歴史を語る上での資料として活用できれば幸いである。

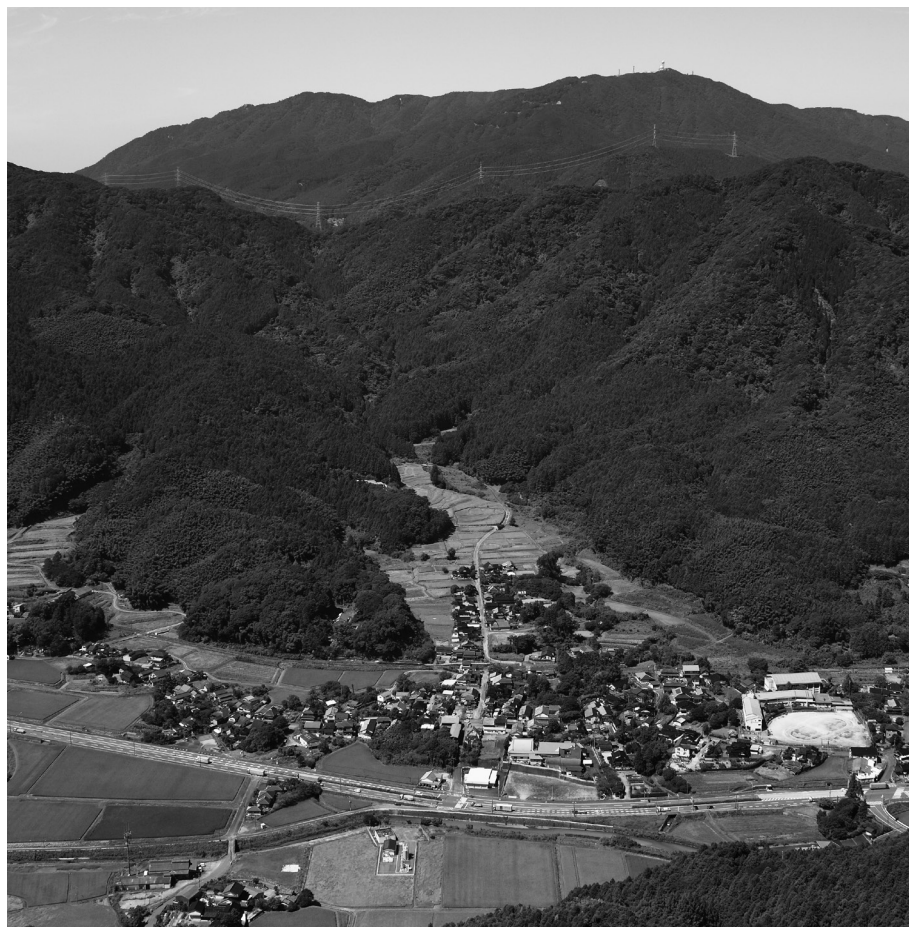
【註】

- (1) 屋根の棟から軒に向かって瓦を見た時に、瓦の右に棧があるものを「右棧瓦」、瓦の左に棧があるものを「左棧瓦」と呼称する。
- (2) 岡寺良氏（九州歴史資料館：当時）より御教示を得た。
- (3) 一瀬智氏（九州歴史資料館：当時）より御教示を得た。
- (4) 火打石とは使用によって割れや欠け・潰れ等が生じて形状の変化を繰り返すものであり、その過程で多くの剥片や破片が生じる。「火打石の欠片」とは、その剥片が剥離された後に、同剥片が火打石として使用されることがないまま廃棄・遺棄されたものである。
- (5) メノウ質石英という石材名は造語である。同石材について、弥生時代前期の良積遺跡（北野町教育委員会 1996『良積遺跡 I』北野町文化財調査報告書第 5 集）で石錐素材等に多用されるメノウと同一であることから、久留米城下町出土の同種火打石もまたメノウ製と呼んで良さそうである。しかし、久留米城下町出土の火打石関連資料を検討した過程で、火打石として用いるには不向きな粗い石英質の部分と、火打石向きのやや粘りのあるメノウ質の部分と同じ石塊の中に脈状に含まれるものが見られ、メノウあるいは石英と呼び分ける意味が小さいと判断するに至った結果、メノウ質石英と呼んだ方が解り良いと考えたため、メノウ質石英とした次第である。

【参考文献】

- 佐藤浩司 2000 「小倉名物三官飴とその容器について」『研究紀要』第 14 号（財）北九州市教育文化事業団
佐藤浩司 2002 「消費地出土の田香焼について」『研究紀要』第 16 号（財）北九州市教育文化事業団
梅崎恵司 2007 「筑前六宿銘入須恵焼」『研究紀要』第 21 号（財）北九州市教育文化事業団
大任町誌編纂委員会 2004 「大任町誌 ふるさと大任」上巻
山口信義編 2001 「木屋瀬宿本陣跡・脇本陣跡 2」北九州市埋蔵文化財調査報告書第 265 集（財）北九州市教育文化事業団
佐藤浩司編 2009 「黒崎城跡 9」北九州市埋蔵文化財調査報告書第 411 集（財）北九州市教育文化事業団
藤木 聡 2012 「近世における阿波大田井産チャート製火打石の流通」『西海考古』第 8 号 故福田一志氏追悼論文集刊行事務局
藤木 聡 2014a 「発掘された火起こしの歴史と文化」『宮崎県文化講座研究紀要』第 40 輯、宮崎県立図書館
藤木 聡 2014b 「久留米城下町・小倉城下町・黒崎宿の火打石とその特質」『先史学・考古学論究 VI』龍田考古会
武藤直治・大庭陸太 1929 『校訂 筑後地誌叢書』筑後遺蹟刊行会

圖 版



1. 内野宿遠景（東上空から）



2. 内野宿御茶屋跡現況
（東上空から）



1. 第1次調査全景
(北上空から)



2. 第2次調査全景
(東上空から)

1. 第3次調査全景
(北上空から)



2. 第4次調査全景
(東上空から)





1. 第5次調査全景
(西上空から)



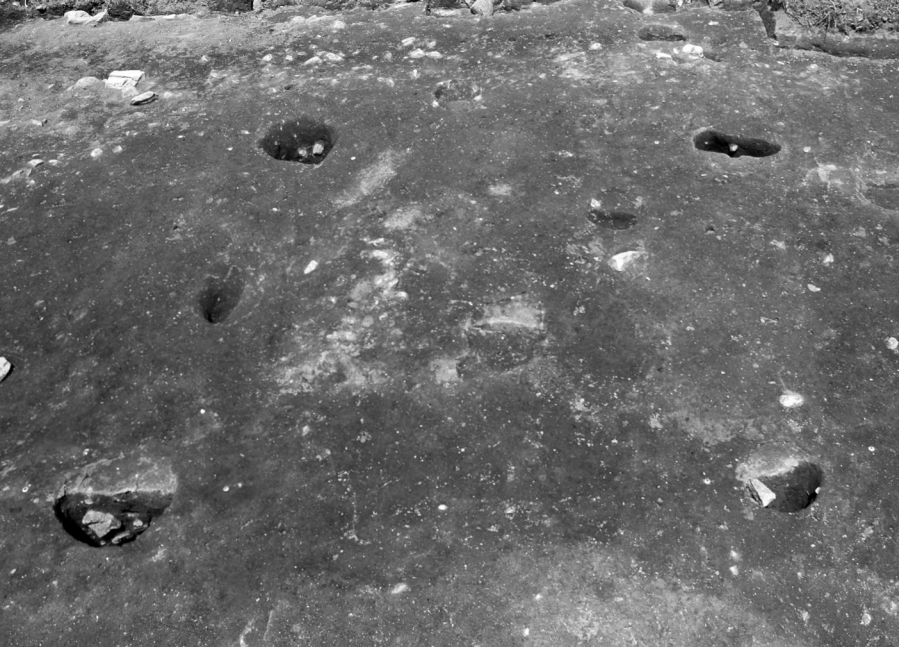
2. 第7次調査全景
(西上空から)



1. 第8次調査全景
(西上空から)



2. 第9次調査全景
(西上空から)



1. 1-SB001 (南から)



2. 1-UK001 (東から)



3. 1-UK002 (北東から)



1. 2-SX008 (東から)



2. 2-SX018 (北東から)



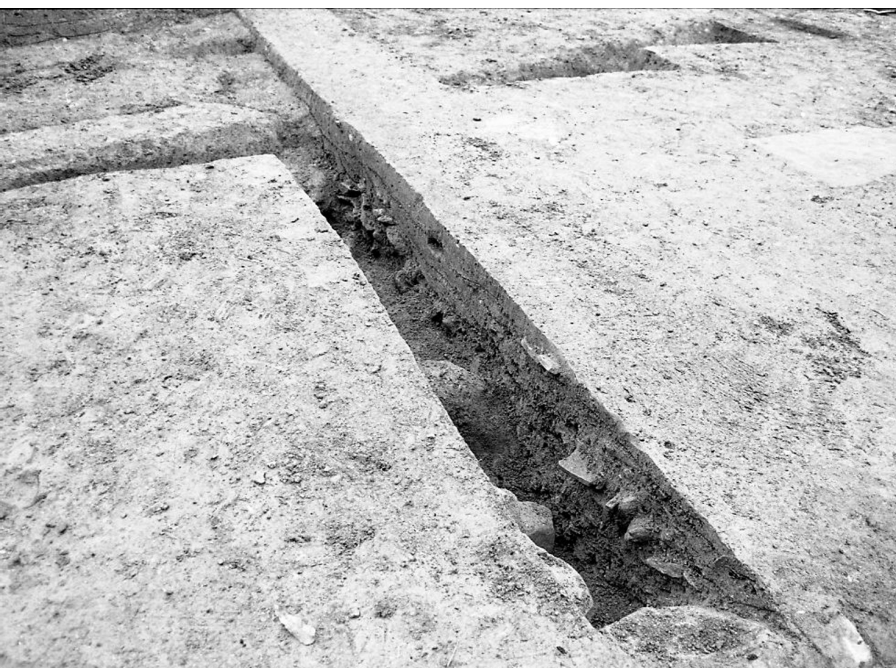
3. 2-SX002 (北東から)



1. 2-SX001土層
(西から)



2. 3-SD001 (東から)



3. 3-SD001土層
(西から)

1. 第5次調査
3-SD001土層
(北西から)



2. 第6次調査
6-tr4 (南から)



3. 第6次調査
6-tr4 (東から)





1. 7-SB001 (北東から)



2. 7-SX001・002
(北から)



3. 7-SX001 (東から)



1. 7-SX003 (南東から)



2. 7-SX005 (北西から)



3. 第7次調査
1 トレンチ (北西から)



1. 第7次調査
2トレンチ (北西から)



2. 第7次調査
3トレンチ (北西から)



3. 9-SB001 (北西から)



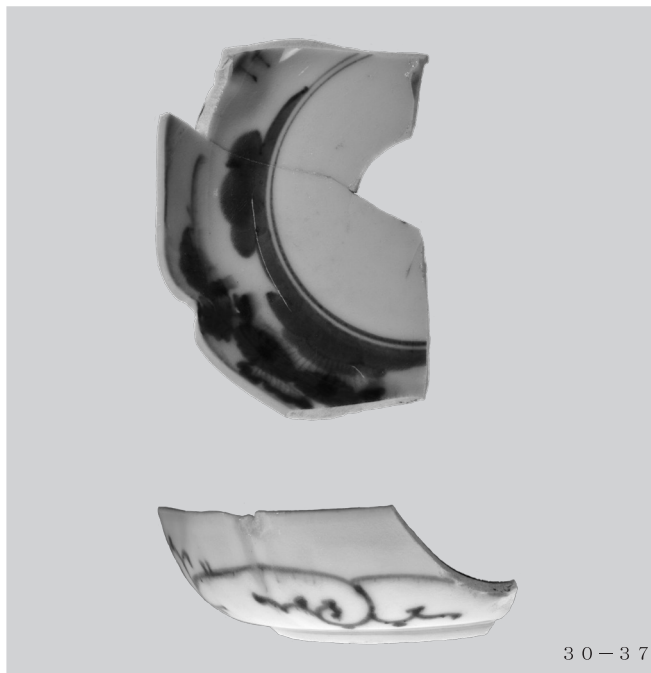
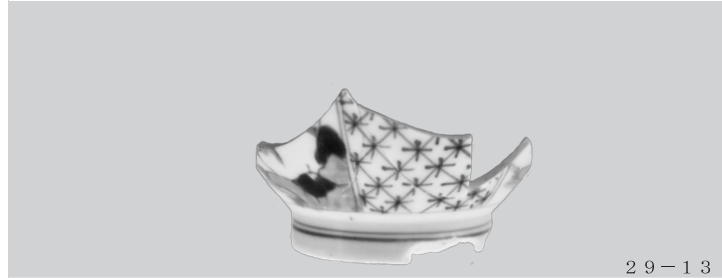
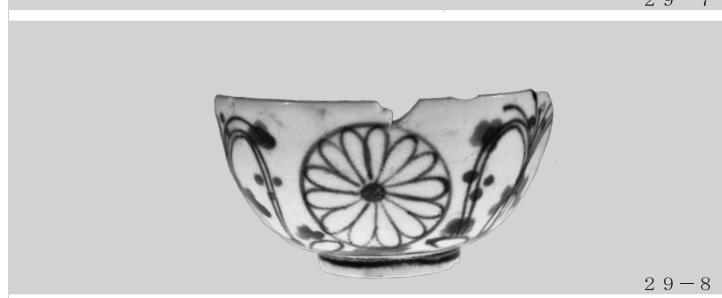
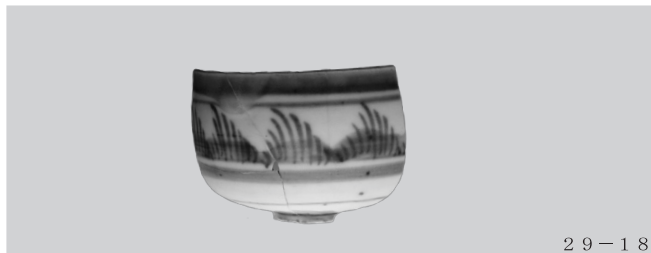
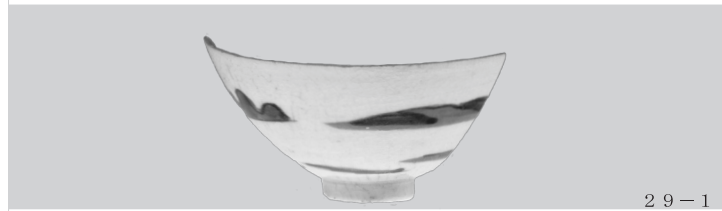
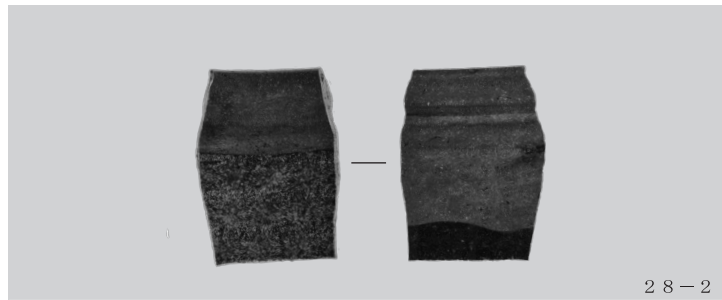
1. 9-SE001 (北から)



2. 第9次調査
1 トレンチ土層(南東から)



3. 第9次調査
2 トレンチ土層(北東から)





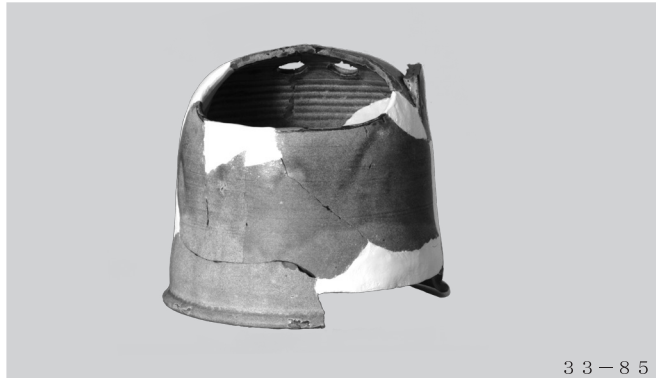
30-40



32-81



30-41



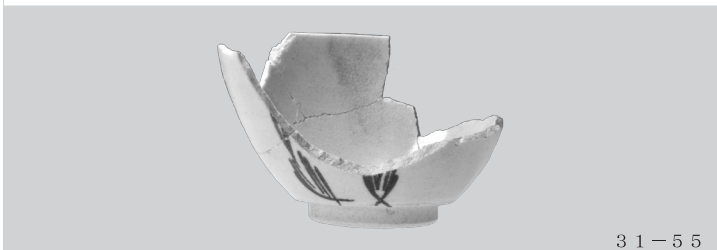
33-85



31-53



33-87



31-55



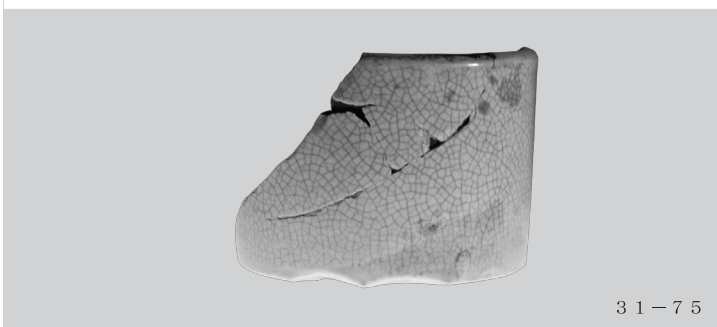
33-92



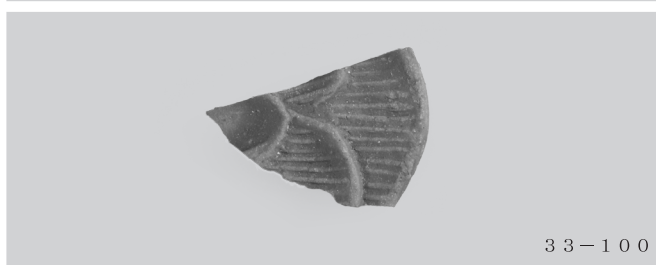
31-74



33-99

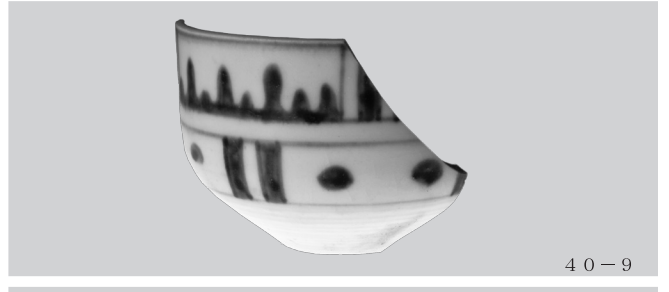
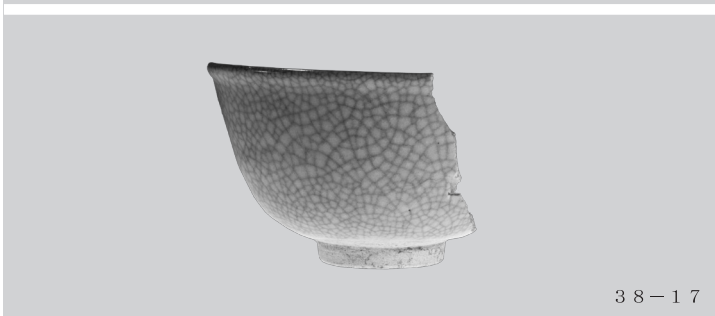
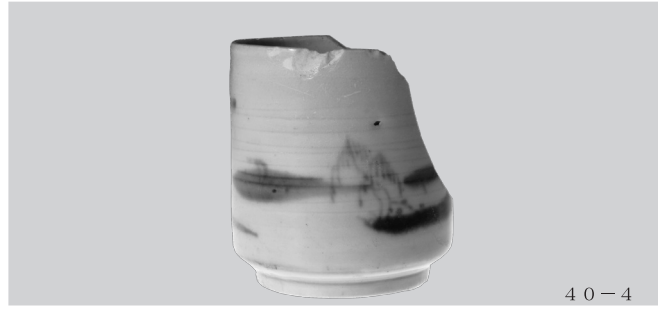
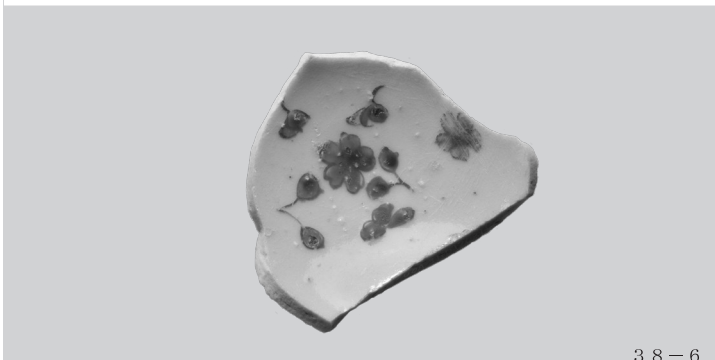
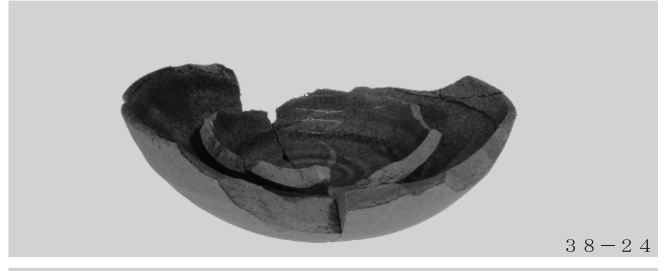
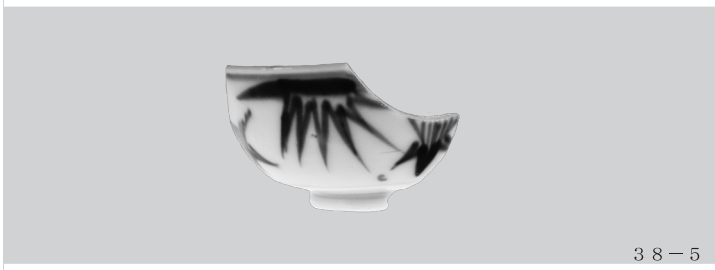
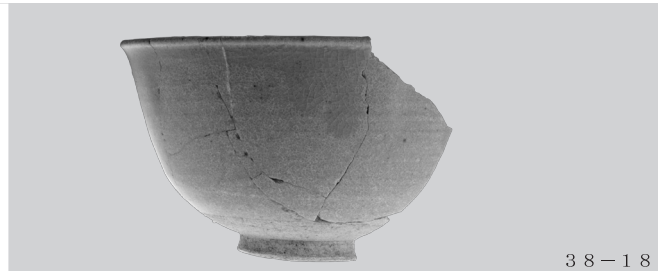
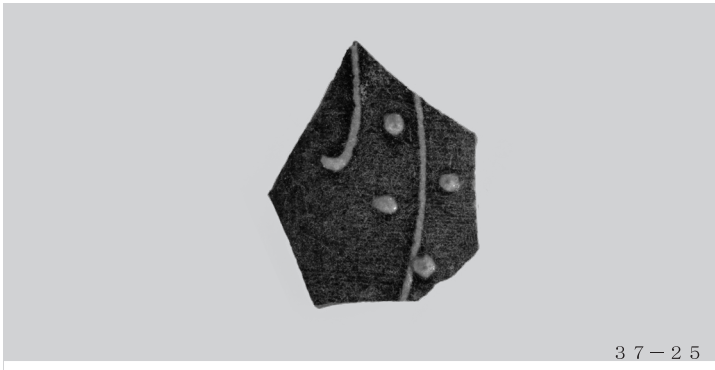


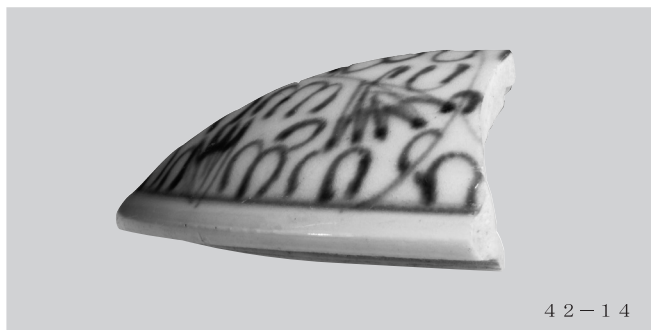
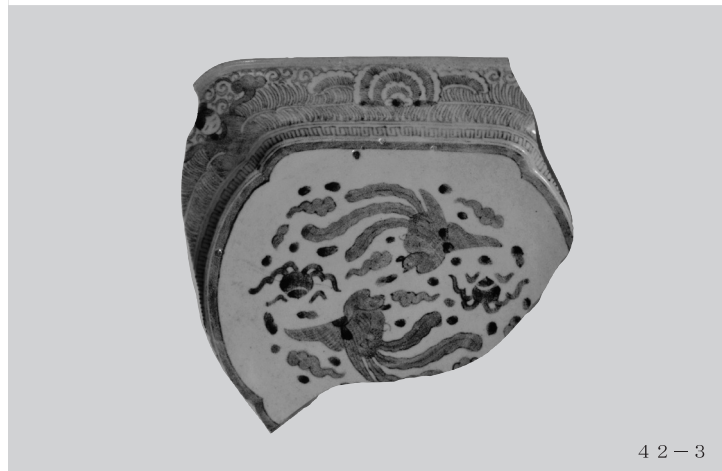
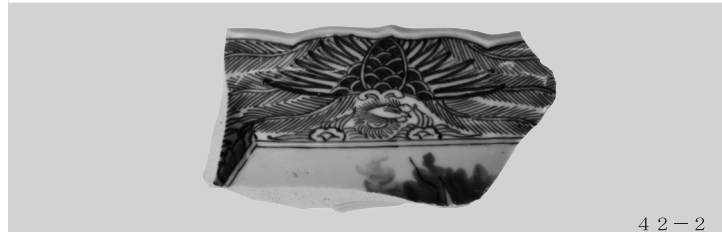
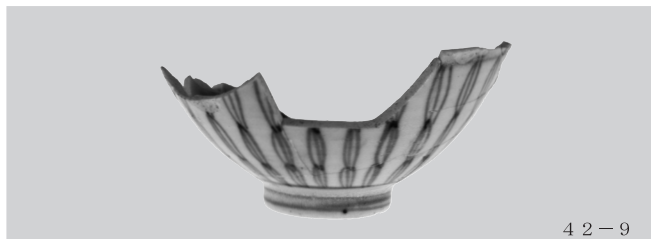
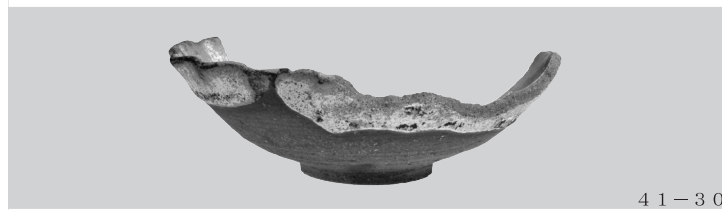
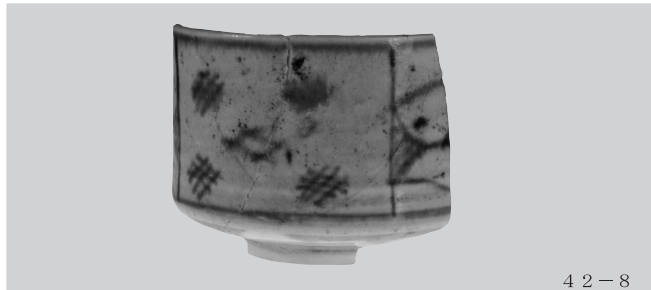
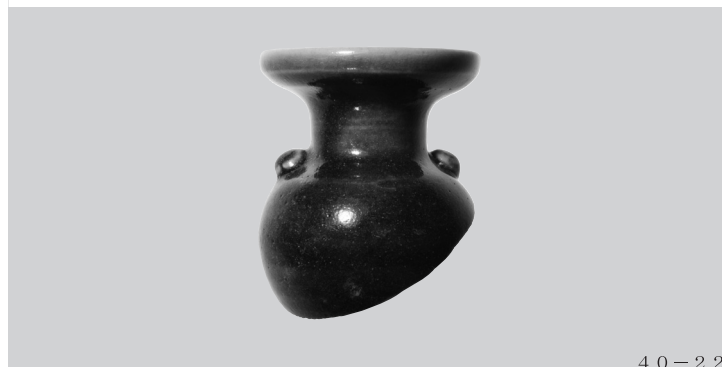
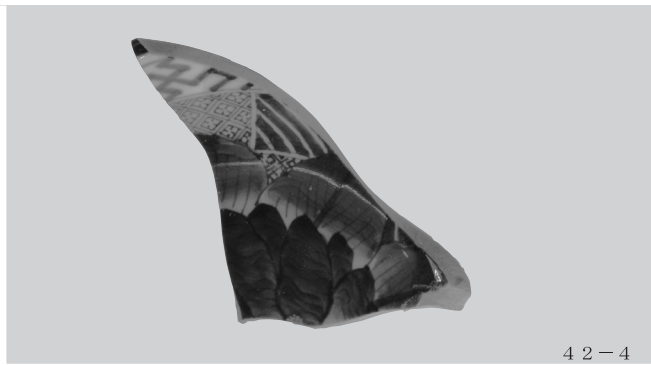
31-75

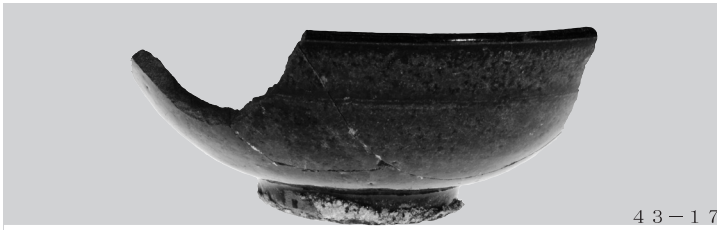


33-100

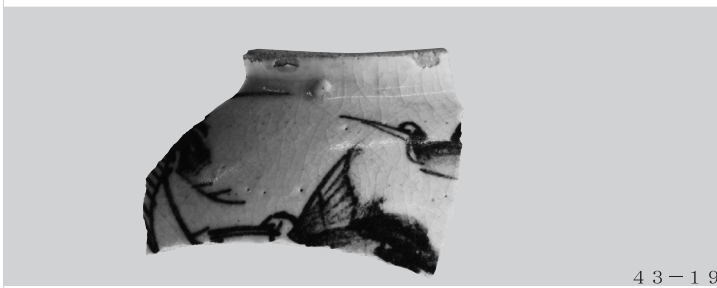




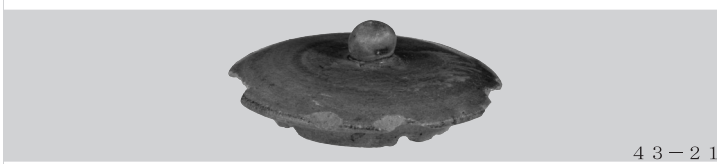




43-17



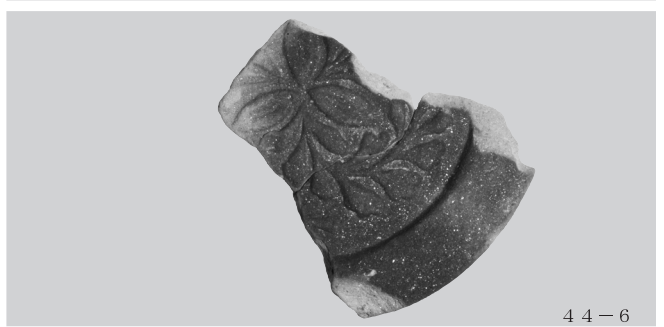
43-19



43-21



44-5



44-6



44-1



45-1



44-3



45-2



44-4



45-5



45-6



45-7

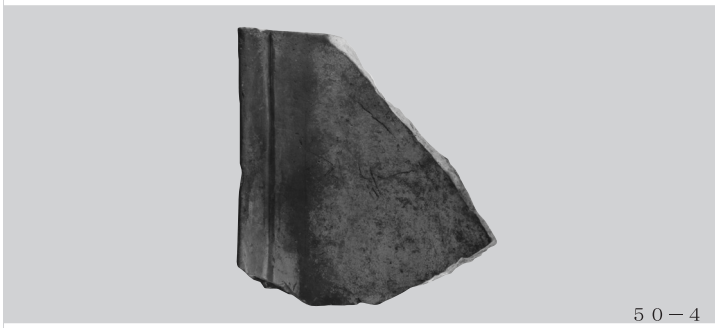




50-1



52-2



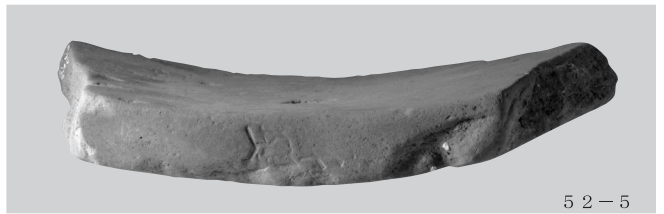
50-4



52-3



51-1



52-5



52-7



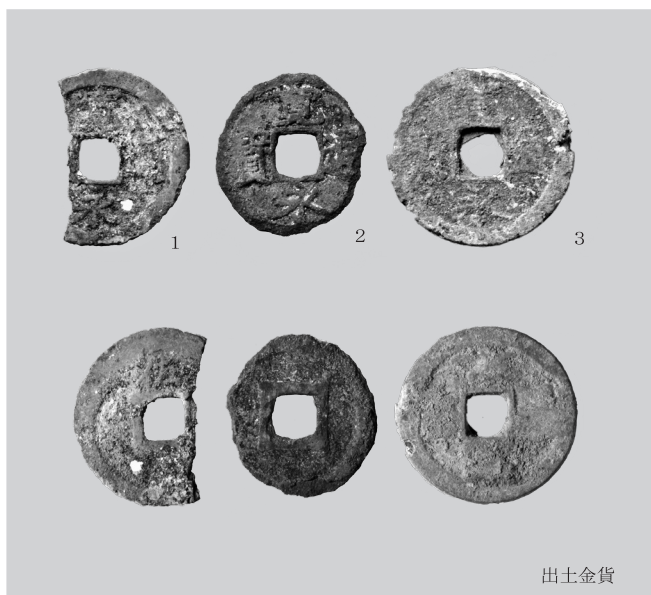
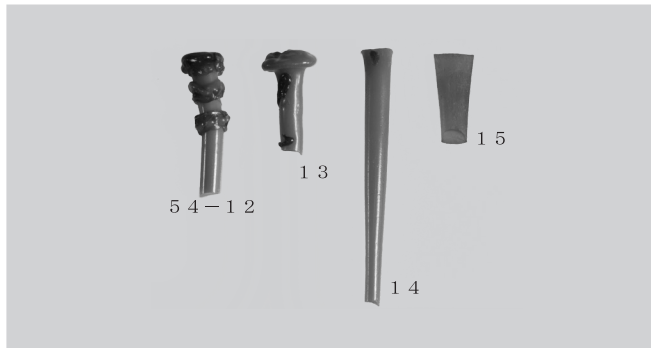
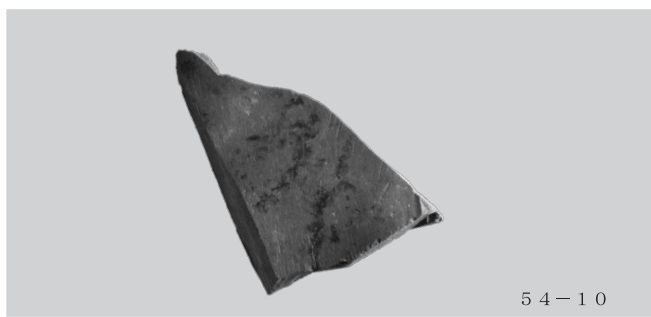
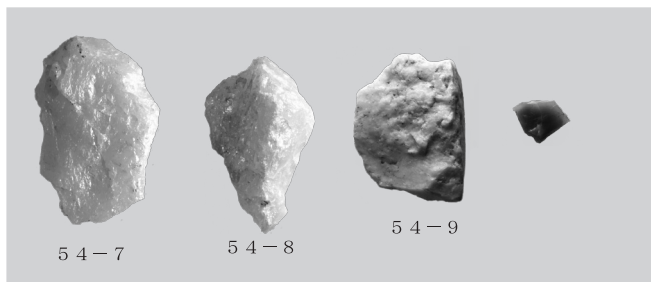
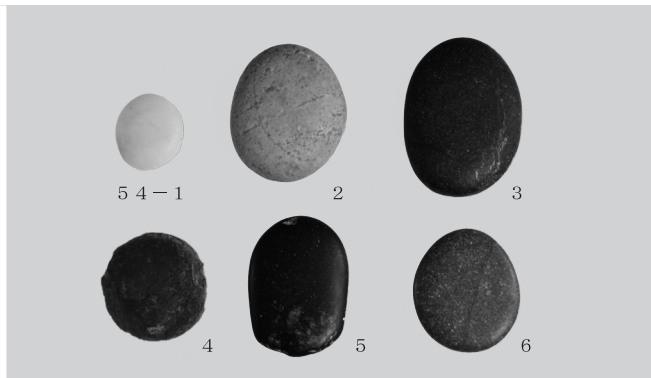
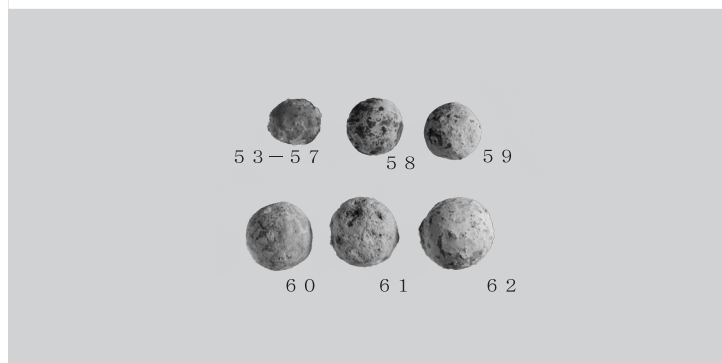
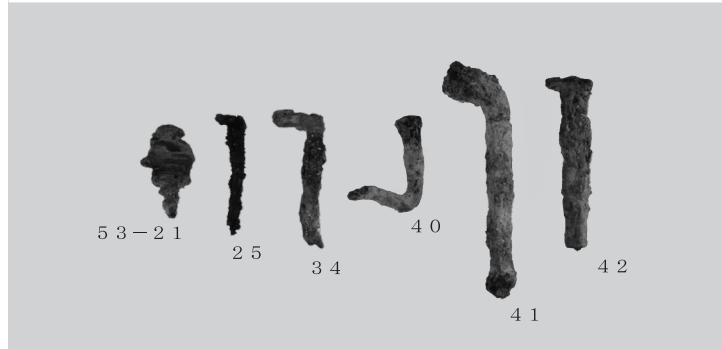
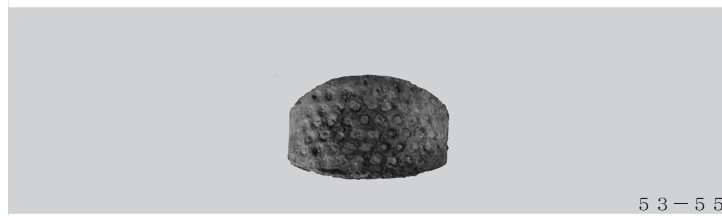
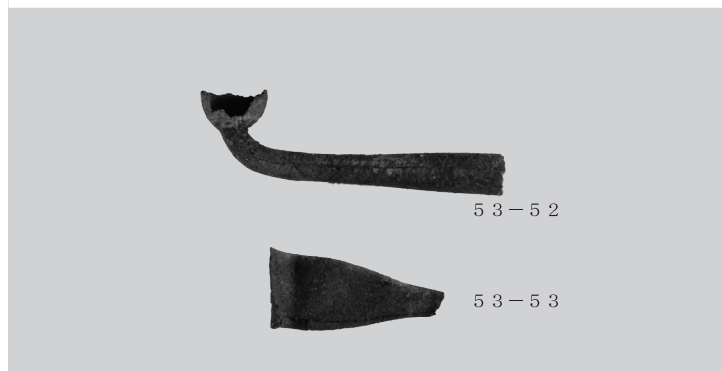
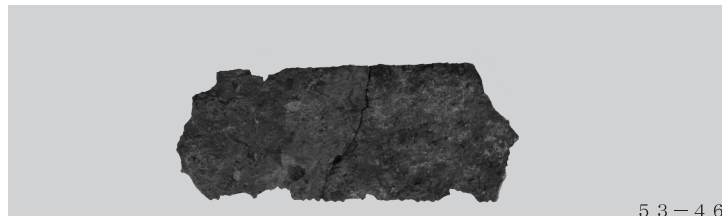
52-1



52-9



52-10



報告書抄録

ふりがな	うちのしゅくおちややあと							
書名	内野宿御茶屋跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	飯塚市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第57集							
編著者名	櫛山範一（編）、株式会社古環境研究所、株式会社古環境研究センター、藤木聡							
編集機関	飯塚市教育委員会							
所在地	〒820 - 8501 福岡県飯塚市新立岩 5 番 5 号 TEL 0948-22-5500							
発行年月日	2022年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うちのしゅくおちややあと 内野宿御茶屋跡	ふくおかけんいづかしうちの 福岡県飯塚市内野	40205	490107	33° 32′ 05″	130° 38′ 12″	①2009. 5. 27～ 2009. 8. 28 ②2010. 11. 16～ 2011. 8. 11 ③2012. 1. 26～ 2012. 3. 31 ④2012. 12. 10～ 2013. 3. 31 ⑤2013. 12. 4～ 2014. 3. 31 ⑥2016. 3. 16～ 2016. 3. 28 ⑦2016. 12. 8～ 2017. 3. 31 ⑧2018. 2. 8～ 2018. 3. 30 ⑨2018. 12. 8～ 2019. 3. 31	1, 750㎡	保存目的調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
内野宿御茶屋跡	その他の遺跡	近世	礎石建物1、掘立柱建物跡3、柱穴列1、布掘り基礎建物跡1、池跡1、流路跡1		土師器、陶磁器、瓦、金属製品、火打石		<ul style="list-style-type: none"> ・ 確認された遺構の配置が江戸時代後期に描かれた図像資料『内野御茶屋絵図』と照合する。 ・ 筑前藩主黒田家の定紋である藤巴文を有する軒丸瓦が出土。 	
要約	<p>冷水峠の麓である飯塚市内野に所在する内野宿は長崎街道の宿場のひとつで、その町建ては慶長17年（1612）とされる。内野宿御茶屋跡は、宿場内を南北に走る長崎街道と宿場の中央において直行して西側に延びる道を上った正面に位置している。第9次までの調査により、礎石建物1棟（主屋）、掘立柱建物3棟（外郭施設）、布掘り基礎建物跡1棟、池跡などが確認されており、これらの検出遺構は文化8年（1811）に描かれた『内野御茶屋絵図』と照合することで、掘立柱建物跡については「番所跡」「物置跡」「材木小屋跡」、布掘り基礎建物跡については「道具蔵跡」と同定され、その規模は南北長約65m、東西長約60mと推定された。また、内野宿御茶屋の成立時期については出土した陶磁器より現段階では17世紀前半と推定された。さらに、筑前藩主黒田家の定紋である藤巴文を有する軒丸瓦が出土し、黒田家との関係を示す資料ともなった。</p>							

内野宿御茶屋跡

飯塚市文化財調査報告書

第57集

2022年（令和4）3月31日

発行 飯塚市教育委員会

〒820-8501 福岡県飯塚市新立岩5番5

電話（0948）22-5500

印刷 有限会社ブランドゥ 北九州営業所

〒820-0001 福岡県飯塚市鯉田2517-195

電話（0948）52-6835
